地名部

あうがう　唐土黄帝の御代の時蚩尤といひし朝敵はびこり、あうがうの海を隔て（持統天皇）

〔烏江〕「をうごう」とも書いてある、安徽省和州の東北にある。史記、項羽本紀に「括地志云、烏江亭卽和州烏江縣是也、晉初爲ゝ縣矣」と見えてゐる。「蚩尤」「黄帝軍を以て云云」を見よ。

あかさか　二川越えて三河の國、北に夕日の入るかと見れば、はしのてりはや赤坂の、谷の木の實をあさるとて（今川了俊）

〔赤坂〕三河國實飯郡赤坂町。

あかさか　（堀山琵）

〔赤坂〕美濃國不破郡赤坂村をいふ、垂井の東北一里半。

あかざはやま　奥野の狩の歸るさや、赤澤山の麓にて、工藤左衞門祐經に討たれぬる（伊豆日記）

〔赤澤山〕伊豆國田方郡にある山の名、河津祐泰の殺された處。

秋篠（あきしの）（井筒）

大和國生駒郡平城村の大字で、歌に外山の里と詠ぜられた地である。

あきのやま　（女夫池）

〔秋山〕山城國紀伊郡にある。雍州府志に「秋山ハ在ニ上鳥羽南一、曾鳥羽法皇設ニ離宮於斯處一、東庭築ゝ山種ニ花木一愛ニ春光一、西庭種ニ楓樹一賞ニ秋色一、南方避ニ暑、北方見ニ雪、各有ニ其趣一、今悉爲ニ田疇一、秋山纔殘、其麓有ニ寺、淨土專念宗僧守之一」。

あくたがは　（蛙合戰）（関八州）

〔芥川〕延喜式に攝津の國島下郡に阿久刀（あくた）神社ありと見えてゐる。芥川は此處にある川であらう。「色に身代字津の山云云」をも見よ。巢林子が芥川といへるは、伊勢物語に芥川とあるに據つたまでである。

あけろのやま　これは信州あけろの山の嶺（堀山琵）

〔上路山〕巢林子は信州あけろの山と云へど、實は越後國西頸城郡市振の東南親不知の嶺を上路山と云ひ、そのあたりを上路村といふ。極めて險所で、多くの谷峯繩を以て橋としてある。謠曲「山琵」に「是はあけろの山とて人里遠き所なり」とあるもこの山である。

あこやのまつ　阿古屋の松の木の間より沖に見えたる津輕が島（鎌田）

〔阿古屋の松〕羽前國南村山郡にある。風土略記に、「今千歳山の頂上にあこやといふ地あり、卽ち阿古屋の松のある所なり云云」。

あさかたが　（日本武尊）

〔淺香潟〕攝津國なる淺香浦のことで、この地舊住吉郡にあつたが、地形變じて今其址なく、和泉國泉北郡三寶村の地古くは海濱であつたから、そのあたりであらうといふ。

あさかのみづ　淺香の水の漏れそめて、笹野の露と置きまどひ（鐘權三）

〔淺香水〕淺香沼（安積沼とも書く）は岩代國安積郡にある歌枕で、今、山野井村大字日和田の西にある東勝寺の後の小池であるといふ。ここの文はおさゝが淺香市之進を夫に持ちながら、なほ多情にして笹野權三に露の情をかけたことをいうたのである。

あさかやま　花の名殘のあさか山（門田八島）

〔安積山〕岩代國安積郡にある山名。

あさくまのだけ　（丹波與作）

〔朝熊岳〕伊勢國度會郡にあつて、山嶺南北に延び伊勢志摩の分水界をなす。

あさくらはちまんぐう　（女夫池）

〔朝倉八幡宮〕國花萬葉集記卷十三、周防國神社之部に「朝倉八幡宮＝朝倉、祭神八幡宮、人皇五十六代清和天皇貞觀元年行宮を建て勸ニ請之一」。

あさひながは　名にし負はば我通ひ路の關の戸も、一夜は破れ朝比奈川、小夜の中山見上ぐれば（今川了俊）

〔朝比奈川〕駿河國志太郡朝比奈村の山中に發し、假宿を經て西南に流れ、瀬戸川に入る。巢林子のここの文、朝比奈三郎義秀の閨の戸破りは有名な話なれば、朝比奈川の名により、「名にし負はば」といひ、「閨の戸も一夜は破れ」というたのである。

あさひのしんめい　月讀の旭の神明額つきて（卯月紅葉）

〔朝日神明〕大阪市東區神崎町にある、祭神、天照大神、世に逆櫓社といふ。

浪花寺社巡、二十二社廻りの條に「一番、松山町朝日宮」。

あさひやま　朝日山山吹の瀬に影みえて（鰤九）

〔朝日山〕山城國宇治平等院の附近にある山の名。謠曲「頭政」に、「朝日山山吹の瀬に影見えて」。

あしたかやま　（曾我山）

〔足高山〕愛鷹山とも書き、駿河國駿東、富士の二郡に跨る山。愛鷹は古訓「はしたか」であるを、訛つて「あしたか」となり足高と書くやうになつた。

あしやがた　草鞋（わらぢ）ぢろりがたつく草分の道（日本武尊）

〔蘆屋潟〕筑前國遠賀郡蘆屋町の海濱をいひ、古來泊舟の地として有名である。往時この地に鑄工あつて、其鑄た釜を蘆屋釜（その條を見よ）といひ、茶人の珍重する物である。巢林子のここの文は、「ぶらつく足」を「蘆屋潟」にいひかけ、この地の名物蘆屋釜をきかせて「銑鐙（もろあぶみ）（その條を見よ）形」にいひつづけ、「形」に「がたつく」をいひかけたのである。

あしやのうら　御影・あられの松原・葦屋の浦（西王母）

〔葦屋浦〕攝津國武庫郡打出濱をいふ。

あすかがは 一夜に變ろ淵瀬こそ大和にあると聞きけるが、何時東路の飛鳥川底意の程の惡さよと（冷泉節）

〔飛鳥川〕大和國高市郡にある山川なれば淵瀬變じ易い。古今集雜下部の歌に、「世の中は何が常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀬になる」。よつて以て心の變じ易きにいふ。

あすかのやしろ 飛鳥の社・濱の宮・王子王子は九十九所（反魂香）

〔飛鳥社〕紀州那智山新宮の攝社であつて、新宮の西南（上熊野）にある。和漢三才圖會卷七十六、紀伊の條に、「飛鳥社。在二新宮坤方一、祭神未レ詳」。

あたかのせき 傳へ聞く、判官殿御存生の折から東下りの忍路や、安宅の關にて我子の辨慶判官殿を打つたるとや（百日曾我）

〔安宅關〕安宅關のあつた所は加賀國能美郡安宅町附近であつたのであらうが詳でない、古の關跡は今は海中になつたといふ。義經が陸奥に下らうとして安宅關で富樫介家直に咎められ、辨慶苦計を廻らし勸進帳を讀上げ、且つ主從でないやうに見せる爲に義經を毆打して、漸く虎口を逃れたことは謠曲・安宅に見えてゐる。

あだちがはらのくろづか まことや鬼のこもるは安達が原の黑塚、葬生ひて茂れる宿のうれたきに（枕狩）

謠曲・安達原に、黑塚といふ所に鬼の出たことが見えてゐる。謠曲拾葉抄・卷二十に、「奥州名取郡安達原に黑塚と云有、草村の中に黑塚として、柏の木の村立て其跡殘れり云云。拾遺集・雜下に、陸奥國名取郡黑塚と云所に重之が妹あまたありと聞て、いひつかはしける平兼盛歌に、陸奥の安達が原の黑塚に鬼こもれりといふは誠か、大和物語には、此歌の下句きくは誠かと有云云」。

按じるに安達が原の黑塚に鬼の棲めるといふことは、平兼盛の歌の有名なるに從ひて、いひ出したものなるべく、事實鬼の棲めるにてもなく、且つ安達が原に黑塚といふ所もなく、安達が原と黑塚とは別所である。

あつかしやま 阿津賀志山の山城を一揉に攻落し（蛙合戰）

〔阿津賀志山〕岩代國伊達郡大木戸村にある山。

あづさがは 梓川原に平張打たせ（振袖始）

〔梓川〕信濃國南安曇郡にある川で、水源を常念嶽と槍ケ岳との峽間に發し、南流約七里で西筑摩郡から來れる黑川を合せ、松本市外の西北に至り、奈良井川を合して犀川となる。

あづまの明神 花は八重咲く梅澤の、里過ぎ行けば朝日さす、影もあづまの明神に暇の法施まゐらせて（扇八景）

〔吾妻明神〕相摸國中郡吾妻村梅澤の里のあたりにある。東海道名所記に、「梅澤。茶屋あり、入口に東の明神とて高き山あり云々」。

あなむしやま 大和河内の境なるあなむし山に着き給ふ（天智天皇）

〔穴虫山〕大和國北葛城郡にあつて、二上村大字關屋より河内に越える坂路に當り、穴虫越と稱する。

あのくだつち つがひの龜の棲む水はあのくだつちの流れと知れ（聖德太子）

〔阿耨達池〕梵語である、清涼地または無熱惱池と譯し、雪山の北にある池だといふ、要するに傳說上の靈池である。

西域記原序に、「贍部洲之中地者、阿耨達多池也（唐曰二無熱惱一舊曰二阿耨達池一訛也）、在二香山之南、大雪山之北一、周八百餘里」。

あののまつばら 此のも彼のもにあののもの、あのの松原しぐれ行く（丹波與作）

〔安濃松原〕伊勢國安濃郡安濃川に沿へる松原をいふか。藤堂元甫編、三國地志卷三十三、伊勢國安濃郡安濃松原ノ條下に、「按、上世藤方・垂水の邊より海涯に松原あり、又乙部村字權現浦に松原あり、是等の遺址なるか云云、安濃村の松原寺の地をさすも一說とすべし、孰れか是なるを知らず」。伊勢參宮名所圖會、鈴鹿郡の條下に、「安濃松原（此邊の濱手なり今はなし）、明應七年の地震に、城下松原ともに波に沈めり、其以前は津の町と海との間にありし也」。

あはさ （淀鯉）

〔阿波座〕「あはざののら鳥」「大阪地圖」を見よ

あはたぐち 親も許さぬ女房とは粟田口へ行きたいか（女腹切）

〔粟田口〕京都の東、今粟田口町といふ、昔刑場のあつた所。

あはぢまち 佐渡と越後の相の手を、通ふ千鳥の淡路町（冥途飛脚）

〔淡路町〕「通ふ千鳥の淡路町」四三三頁を見よ

あはづのはら 揉みに揉んでぞ追ひ追はれ、近江路を一刻にまづ爰までは粟津の原、木曾の昔も氣味惡く（三國志）

〔粟津原〕近江國滋賀郡粟津野をいひ、木曾義仲戰敗れて自刃した所。

あはてのもり 幸ひ當國阿波手の森は人倫離れ、敵もそれとは得知るまじ（日本武尊）

〔阿波手森〕尾張國海部郡甚目村にあつて、名古屋の西。

あはのつちやま 昔の小唄ひきかへて、間の土山死出の山、冥途の旅路通し馬（丹波與作）

〔間土山〕土山は近江國甲賀郡にあつて鈴鹿山の西麓に當り、鈴鹿越の舊驛である。間とは土山が甲賀山（大岡山）と鈴鹿山との間にあるからであらう。

あふぎのしば 扇の芝にはや三番の勝相撲（雪女）

〔扇芝〕山城國宇治平等院内にあつて、源三位頼政の自殺した所。

あふさかのせき （蟬丸）

〔逢坂關〕近江國滋賀郡大津の南、逢坂山にある所謂三關の一。延暦遷都以來重要の地となつた。初め關の廢されたのは延暦十四年であるが、事ある毎に兵を關址に備へ、文德天皇の時再興し、その後屢興廢があつた。

あふさかのせきのしみづ　逢阪の關の清水を汲みあげつ、手にむすびあげ口啜ぎ（曾根崎）

〔逢阪關清水〕大阪天王寺西門筋逢阪の清水をいふ。攝津名所圖會二に、「相坂清水。一心寺（茶臼山の北）門前の西にあり、此邊七名泉の其一箇なり、小坂清水ともいふ、清洌にして四時增減なし、此所の用水とす、茶に可なり」。關の清水といふのは近江國逢坂の關の清水は有名であるから、それをかりて文飾としたのである。

あぶと　あぶと、御手洗、くろくく島（女護島）

〔阿武兎〕備後國沼隈郡鞆町の南方約一里の海岸にあつて、絕壁の上に阿武兎觀音堂があつて、海上の眺望絕佳である。

あぶらかけ　今夜はどこに泊らうぞ、ハテ三栖が端か油掛か（鑓權三）

〔油掛〕山城國伏見町にあつて、京橋の北に當り、東西に通ずる町名。

あぼすたうげ　（三國志）

かかる名のある峠は朝鮮には無い。恩ふに出鱈目であらう。

あまなは　甘繩の盛長屋敷（最明寺殿）

〔甘繩〕相州鎌倉長谷・甘繩神明社の前は安達盛長の邸宅があつた。盛長は源頼朝擧兵の時より其謀を助けて大いに親任された。

あまのぐち　あれへ越ゆればあまの口（萬年草）

〔天野口〕高野山上の西端の大門口を下り、矢立を經て天野に至る道筋をいふ。

あみがさじま　編笠島の笹屋の嬶でござんする（二枚綸）

〔編笠島〕曾根崎（大阪）の西端梅田橋附近の地名。

あみじま　南無あみ島の大長寺（天網島）

〔網島〕今大阪市網島町。攝津名所圖會、三に「網島。京橋の北にあり、此所は澱川の堤にして、漁家列り、鮮魚を多く市に出す、云云」。

あみのみやうじん　（松風）

〔網野明神〕丹後國竹野郡にあつて浦島大明神とも云ひ、浦島太郎の靈を祀る。

あめの帝の御廟野　（鰤九）

天の帝とは天智天皇のことで、卽ち天智天皇の山科の御陵。

あめのみや　西條山は長尾の陣所、下米の宮は武田の備（川中島）

〔下米宮〕信濃國埴科郡雨宮縣村の大字で、千曲川の南岸である。

あめのみや　（烏帽子折）

〔雨の宮〕雍州府志・三、神社門下に、「雨宮明神。在三衣笠山麓西南一、所謂眷日社之攝社也」。

あめのもり　（隣歷歌）

〔雨の杜〕國花萬葉記、日向國名所之部に「雨の杜」とある。

あらちのやま　越えても末の泊とは、何處あらちの山高く、歩み惱みし御風情（蘐餘）

〔愛發山〕越前國敦賀郡にあつて近江の國境に接し、海津より越前に出づる通路に當る。

あらやばし　立寶堀を漕廻し、辨當濟まば椀家具も、釜もちやくちやくあらや橋、跡へはんなり入花の（今宮）

〔荒屋橋〕ちやくちやく洗やをあら屋橋にかけて斯く云うたのである。あらや橋は西橫堀川に架し、唐物町筋（北久太郎町北隣の筋）で備後橋から南四つ目の橋に當り、今の新江達橋あたりにあつた橋。

あられのまつばら　御影・あられの松原・葦屋の浦（西王母）

〔阿良禮松原〕續松原とも書く。攝津國東成郡住吉村の南にありて今の安立町の濱の名。

あらゐ　このこのあらゐ・今ぎれ（丹波與作）

〔新居〕遠江國にある村邑。白須賀と舞坂との間にあつて、東海道五十三次の一。

ありすがは　（以呂波）（大覺）

〔有栖川〕山城國葛野郡下嵯峨を流れてゐる川。

ありとほしのみやうじん　（百日曾我）

〔蟻通明神〕和泉國泉南郡長瀧村にある社。

あをのがはら　（鰕山姥）

〔青野原〕美濃國不破郡青野が原。

あをばか　（鰕山姥）（當流小栗判官）（榮華）

〔青墓〕美濃國不破郡にありて今も青墓村といふ、垂井と赤坂との間で青野が原にある。國花萬葉記に「垂井より五町餘東なる青野原を過ぐれば青墓なり、昔青墓の長者が住みし所とて、道より北の方に其跡あり」。

あをばやま　（門出八島）

〔青葉山〕陸前國宮城郡にある山名。

あんじやうじ　はや安祥寺の入相の音羽の峯に夕づく日（酒呑童子）

〔安祥寺〕山城國宇治郡山科陵の東方にあつて、文德天皇勅願の眞言宗の寺院である。往時は山科陵以東の山野を占めてゐたが、その後衰微し、慶長年中東部大半を割いて毘沙門堂に附し、安祥寺は西偏に移つた。

あんぼん　べんがら・あんぼん・すべいで（國性爺後日）

馬來群島中にあつて、セラム島の西南に當り、和蘭語でアンボン（Ambon）、馬來語でアンボン（Amboun）、英語でアムボイナ（Amboyna）といふ島名で、その首都をもアンボンといふ。十六七世紀頃既に我が國人と交商してゐた。新井若美撰、五事略に「あんぼん。島也、日本を去る事三千九百里程」。

いかほのぬま　（津戸三郎）

〔伊香保沼〕上州榛名湖の古名。

いかるが　富の小川を打越えて斑鳩の御所へそ參りける（聖德太子）

〔斑鳩〕大和國生駒郡にあり、今の法隆寺東院の地に推古天皇の九年聖德太子が宮を建てられて斑鳩宮と稱した。

いきのまつばら　あればある世の命とて生の松原打過ぐる（天神記）

〔生松原〕筑前國早良郡山門村に屬し、姪濱の西に連り今宿村に至る海岸をいふ。

いくしなだいみやうじん　（千正犬）

〔生品大明神〕上野國新田郡生品村にある。新田義貞が兵を起す時、この社頭で旗擧げしたといふ。

相撲人道千正犬のここの文は道行の巡路を擧

げたのではなく、文飾に諸國の地名などを入れたのである。

いくたま こだまのひびきはきもつかず皆生玉へとはしりけり（重井筒）
今日生玉で逢はんして戻してくれとあつたれば（曾根崎）得意を廻りいく玉の社にこそは着きにけれ（曾根崎）

〔生玉〕高津の南一帯の地の總稱で、この地に生國魂神社がある。祭神は生國魂大神・足國魂大神で、社殿の結構善美を盡し、八つ棟造の神殿莊嚴を極め、官幣大社に列す。

いくの いくのの道や大江山（賀古教信）

〔生野〕「ふみも見ぬいくのの道云云」を見よ。

いくわうさん 唐土育王山佛照禪師の御寺へ祠堂に御渡し候（孕常盤）

〔育王山〕支那浙江省寧波府にあり、支那五山の一で育王山阿育寺といふ。源平盛衰記に、平重盛が人に托して黃金千三百兩をこの寺に寄進して、菩提を弔はしめたこと見え、また比古婆衣・十六の卷、重盛が育王山黃金施入之狀の返牒の末文に、「當寺禪侶等著講講三其施物、奉レ祈二日本安穩太平君二世所一レ仲求一矣、仍佛照禪師所二講取一如レ右、南無日本大將重盛奉レ入二育王山過去帳一畢」と見えてゐる。

いけだのしゆく 遠江池田の宿や東の空（本領曾我）

〔池田の宿〕遠江國磐田郡にありて今池田村といふ、天龍川の東岸に當り東海道の驛なりしが今は衰へて荒村となる。平宗盛の時代の池田の宿は天龍川の西岸にあつたのである。

いこまやま さらばや生駒山あとに見捨てて出で給ふ、心の内こそ哀れなれ（三世相）

〔生駒山〕大和國生駒郡北生駒村の西に聳え、大和・河内の國界をなす。

いさわがは 石和川石に御法を書き留めて、弔ふためしも有栖川（大鏡）

〔石和川〕甲斐國東八代郡石和町のあたりを流れる川。石和町はづれの日蓮宗の鵜飼山遠妙寺に、日蓮が鵜飼人を濟度したといふ題目書寫の石を祕藏してゐる。甲陽隨筆中卷、石和鵜飼寺の條に、「石和町は甲州道中馬繼宿にて、村はづれに鵜飼寺と稱する日蓮宗鵜飼山遠妙寺とて、御朱印寺領拾石被下也、往昔日蓮聖人安房國清澄より甲斐國行脚の時、鵜遣ひの亡靈に行逢ひ弔ひ給ひし所のよし、村外より西の方に川あり、笛吹川也、此邊にては石和川とも云、唯今鵜飼川と云ふは、八代郡黒駒村の山澗入より流れ出る川を、上にては金川と云ひ、此邊にては鵜飼川と唱へ候よし、小川也、川瀨の石を拾ひ取り、法華經を書きて渡間に沈め弔ひし石も、今以て天然より有之ふし、云云。

いしざき （振袖始）

備中國阿哲郡の村で、上市村の南なる石蟹郷のことであらう。

いしづちやま （嵯峨天皇）

〔石槌山〕伊豫國周桑、新居、上浮穴の三郡に跨り、高さ六四〇〇尺の高嶺。

いしのとりゐ 石の鳥居のあなたより女子の泣く聲（重井筒）

〔石鳥居〕大阪高津の宮の石の鳥居。

いしべ 金になほいて一歩二朱の借錢負うて、肩の重たい石部の八藏に請負てもらうた（丹波與作）

〔石部〕近江國にあり、東海道五十三次の一、草津と水口との間。

いしやくし せきにせきよりかめやまに、たばこ火うちの石やくし（丹波與作）

〔石藥師〕伊勢國にあり、東海道五十三次の一、庄野と四日市との間。

いしやま さて石山の繁昌京大ざかが打明けう（卯月潤色）

〔石山〕近江國滋賀郡石山村大字石山にある石山寺をいひ、西國巡禮第十三番札所である。ここの文は、石山寺の開帳供養が寶永四年三月七日から六月十八日まで行はれたので、京大阪からの參詣人群集して繁昌を極め、爲に京大阪は盧明きのやうであるとの意。

〔序云、卯月潤色の中卷に「今は四月十七日觀音樣の御緣日」「今日は卯月の十七日此命日の明けぬ間に」「來月十七日はお龜樣のむかはり」と見えてゐるから、卯月潤色の初上演は寶永四年四月と見るべきである。〕

いすずかは （國性爺）

〔五十鈴川〕伊勢太神宮の傍を流れてゐる川で、御裳須曾川ともいふ。

いそのかみ 我本領にいそのかみ布留のやかたは家さかえ（井筒）

〔石上〕大和國山邊郡にある。石上の内に布留といふ地がある。この地の礫上布留社は有名である。國花萬葉記卷三、大和山邊郡神社の條に、「礫上布留社＝石上に御鎭座は人王十代崇神天皇の御宇に昧間見命六世孫伊香色雄命大臣にして天神地祇を定め、八百萬の群神たちを大和國山邊郡石上邑にうつし奉る、往昔十種の瑞寶は高皇産靈尊より饒速日尊に傳り、其子昧間見命にあたへ、それより神武天皇に奉りて、後は、蔵 齋 て石上の太神と號し、國家にあがめ祭るもの也」。

いたどり 柚山人の板取や、袖に涙の春雨を（癸醉）

〔板取〕越前國南條郡堺村の村邑。

いたはな （最明寺殿）

〔板鼻〕上野國碓氷川の北岸にあつて今板鼻町といふ。安中の宿へ一里。

いちのがは 漬ざ出で見れば天滿川、市の側なる初甜瓜（今宮）

〔市之側〕大阪天滿市、即ち天神橋北詰より龍田町までの濱側をいふ、青物などの市場あれば初甜瓜といひつづけたのである。攝陽群談・卷第九、市の部に、「天滿市。西成郡天滿市之町にあり、毎朝所所の商人于是集り、土地の名物竝五畿内及紀州丹波播磨近江等の隣國より出る山林郷河の珍物、菜蔬果蘤九穀等の類、或は器物品品萬物求むるに不足と云ふ事なし、專ら繁榮の處、問屋甍を竝ぶ、世俗市之輪と云へり」。

いちはら （文武五人男）（關八州）

〔市原〕山城國愛宕郡にあつて鞍馬路に當る。もと曠漠たる原野であつて、普陀落寺の庭上に小野小町及び深草少將の墓と稱するものがある。「をのとはいひて云云」をも見よ。

いちふり（繰綿）
〔市振〕越後國西頸城郡にある。附近に親不知子不知の險道がある。

いづし　わきて出石の山はあれど、戀の病は驗なき（鑵樋三）
〔出石〕但馬國出石郡の西境に出石町がある、町の東北に有子山がある。巢林子のここの文は、出石が有名な但馬の城崎温泉に近いによつて、「戀の病は驗なき」といひつづけたのである。

いづみかは　濁りなき世に泉川（雪女）
〔泉川〕山城國相樂郡瓶原を流れる川の名。

井手の山吹（冥途飛脚）（聖德太子）
山城國綴喜郡井手の里をいふ。山吹の名所である。

いながはじゆく（十二段）
〔稻川宿〕近江國甲賀郡大野村大字今郷。

いなのささはら
「ゐなのささはら」（猪名野笹原）を見よ。

いなばやま（嶋山堤）
〔稻葉山〕美濃國稻葉郡にありて岐阜の東に屹立する峰巒である。巢林子作、鎌田兵衛名所盃に「旅行く人の立別れ稻葉の山や」とある、稻葉山もこの美濃國なる稻葉山をいへるなり、但この文に引用したる百人一首なる中納言行平の「たち分れいなばの山の峯に生ふる云々」の歌にある稻葉山は、因幡國法美郡稻葉山でこれとは別である。

いなみの　風に宿かるいなみのの、尾花かたしき女郎花（浦島）
〔印南野〕播磨國加古郡・明石郡に跨れる原野の名。

いなむらがしろ　守屋の大臣は稻村が城に立歸り士卒を集め（聖德太子）
〔稻村城〕日本書紀、崇峻天皇の條に「大連親率子弟與奴軍、築稻城而戰」と見え、河内志に「志紀郡古蹟有稻城址、在弓削村」と見えてゐる。

いなり　まだ其上に稻荷あたりの裏屋小路をのぞき廻り（夕霧）
〔稻荷〕大阪城の南玉造稻荷社をいふ。此社のあたりの裏屋小路に暗屋（その條を見よ）といふがあつて、姪賣女の巢窟であつたことは西鶴の好色一代男にも見えてゐる。巢林子作の曾根崎心中に「夢をさまさんばくらうの、ここも稻荷の神社」とある「稻荷の神社」は「ばく」の條を見よ。

いなりやま（城）
〔稻荷山〕山城國伏見の稻荷山。

いはくらやま（女夫池）
〔岩倉山〕京都の北、北岩倉にある。

いはせのもり　玉鶴殿への御使と聞くより嬉しさ、口上もろくにいはせの森の蟬、たかいたかいと文引かくす（聖德太子）
〔岩瀨森〕大和國生駒郡奈良志岡の北にある森をいふ。ここの文は、口上もろくに言はせずを岩瀨にかけて、蟬は高聲に鳴けば高い高いに、使者の口上の聲の高い高いをいひかけて制したのである。

いはたがは　業の秤の錘には、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著きにける（反魂香）
〔岩田川〕紀伊國にある川の名、栗栖川の下流で栗栖川莊北郡村領より岩田鄉鮎川村領に入り、艮から坤に貫き鄉中の枝溪を合せ流れること三里餘、岩崎村境で富田莊に入つて富田川といふ、熊野の古道此川に沿うて登る。

いはまつむら
〔岩松村〕「がんするじ」を見よ。

いはやごえ　竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や（冥途飛脚）
〔岩屋越〕河内國南河内郡山田村鷲閑にて、大和國當麻寺に出る山路に當る。

いまぎれ　ヤ此このあらゐ今ぎれ（丹波與作）
〔今切〕遠州濱名郡にあり、新居と舞坂との間。丙辰紀行に「遠州荒井の濟より奥の山五里ばかり海となりて大舟も出入る、むかしは山につづきたる陸地なりしが、中比山よりほらの貝おびただしくぬけ出て海へ入る、其跡かくのごとく海となりて今切と名つくるよし、古老いひつたへたり」。

いまつ　はや近江路に打出の濱、今津海津の舟よばひ（源義經）
〔今津〕近江國高島郡にありて、越前路・若狹路の交點に當り、琵琶湖に臨む小邑である。

いもあらひ　はつめい月や一口（淀鯉）
〔一口〕一口は山城國久世郡槻牧村の北部、巨椋湖の水細流となり淀に向ふ邊をいふ。ここの文は、八月十五夜の月（初明月）を芋明月といふ緣によりて、一口につづけた。

いもせやま（以呂波）
〔妹背山〕紀伊國那賀郡にある山の名。

いるの　さをしかの入野も山も聲聲に（會稽山）
「さをしかのいるの」といふこと古歌に多く見えてゐる故に、巢林子は小牡鹿の居る野の義にとりて用ゐたのである。「居る」は「ゐる」で「いる」の假名ではなけれど、當時は假名遣についてはゐられなかつた。入野は萬葉集卷十七も「さをしかの入野のすすき云云」と見えて、山城國乙訓郡入野神社のある處をいふ。

いろはぢやや　いろは茶屋から坂町かけて（生玉）　そんならばいろは茶屋か（重井筒）
〔以呂波茶屋〕大阪道頓堀にあつた茶屋。南水漫遊繪篇に「往古は道頓堀側芝居の近邊とても今の如く寸尺の地を爭ふこともなく建家疎らなる故、炎天或は俄雨の節見物の諸人雜遝に及びしにつき、元祿十三年卯十一月立慶町役島二十八役、吉左衞門町役二十役、都合四十八役、右兩町一役に水茶屋一軒づつ御免有之、濱側に於て板圖の内に床几を構へ茶店をきことにて石茶屋四十八軒出來し故、世俗に呼んでいろは茶屋といふ云云」。

いわうがしま
〔硫黄が島〕流され人の彼の島で流す卒塔婆」を見よ。

いんべ　何をか思ひそめつけの、霞に咽ぶ伊部の濱（佐佐木）
〔伊部〕備前國和氣郡伊部村をいふ、山陰の間に挾在す。この地古來陶器を出す。世にこれを伊部燒又は隨前燒といふ。

うきよせうぢ　これはこちの大事の

お客、浮世小路までお歸りぢや（淀鯉）高麗橋の西東、床も定めぬ立君はこれも世渡る習とて、浮世小路の細き聲（卯月紅葉）

〔浮世小路〕大阪高麗橋筋と今橋筋との間にある細き小路をいふ、往時大阪四小路の一で、新町通ひの繩簾の立場でもあり、また辻君などの経営婦の出没した處であつた。西鶴の好色一代女・巻之五、濡問屋硯の條に、「遊女になほ身をそんざいに持ちなし、旦那の内にしては朱唇萬客に皆めさせ、浮世小路の小宿に出ては里中無量の枕を交はし云云」。日本新永代藏に、「抑この浮世小路といふ所は南は高麗橋筋、北は今橋筋の裏中に細き小路ありて、ここぞ手代の隠し宿、又は間屋薄葉女の身まゝになりて、相應より斎麗に住居する譯はといふに拳公人の出合宿なり」。傾城色三味線・大阪の巻に、「我大丈夫なる身代となりて太夫を自由にまはし、大盡と稱美せられ、浮世小路の繩簾に乘らずば云云」。浪花江南筆記に、「寛文貞享の頃は東堀より〇堀の間兩側に揚弓屋・風呂屋あれば、其際は餅屋・質屋・次は三味線法師・謡曲指南の者もあり、或は米屋・油屋と軒を併ひ、家家建集ひて實に浮世の有樣眼前に見わたす故を以て、浮世小路とは唱へたる由なり」。

うこんのばば　地黒地淺黄紅ひはだ、右近の馬場にぞ著き給ふ（反魂香）

〔右近馬場〕京都上京・北野天滿宮に接近して其東南に當り、南北に通ずる街路である。

宇佐八幡宮（國性爺後日）

豐前國宇佐郡宇佐町の東部龍山にある官幣大社で、祭神三座あつて應神天皇・比咩大神・神功皇后を祀る。

牛が瀬（深靜）

越前にある地名とは察せられども、麓が城から三國の浦に出る道路にこの名のものは無い。

うしのを（三國志）

〔牛の尾〕山城國宇治郡山科村大字小山。

うしまど　廻り車の牛窓や室の港に身を寄せて（國性爺後日）

〔牛窓〕備前國邑久郡にあつて今牛窓村といふ。昔は備前海上の一水驛であつたが、現今は寂寞たる漁村である。

うすひたうげ（川中島）

〔碓氷峠〕上州碓氷郡と信州北佐久郡との境にある峠で、輕井澤の東に當る。

うたつめがは（小栗判官）

近江國愛知郡の北西に當り、琵琶湖畔の一丘に荒神山と云ふがある。その荒神山の下に架かる橋を歌つめの橋といふ。うたつめ川とはこの橋下の川を云うたのである。原田藏六撰・淡海府志（元祿二年成）巻之四に、「歌つめ橋。荒神山下にかかる橋」。淡海錄第二に、「歌つめの橋。荒神山下にかかる」。

うたのなかやま（鰤九）

〔歌中山〕京都清水の南、清閑寺の上の山。

うちでのはま　さらばこちから打出の濱、大津へ三里、爰で矢橋のふなちんが（丹波與作）

〔打出の濱〕近江國滋賀郡大津あたりの湖邊をいふ。東海道名所圖會・一に云「京師より逢坂山を越て、初て湖水へ打出る濱をいふなるべし、今の松本の渡口にはあらず」。赤染衛門の家集に「雪いみじく降りたりしに、石山の湛堅會に詣でて、打出の濱にて、いと深く積りたりしに」と端書ありて、「隅越えてあふみ路とこそ思ひつれ雪の白浪ここはいづくぞ」の歌を載せ、平家物語、巻九、木曾最期の事の條に、「（義平）都の方へ上る程に、大津の打出の濱にて木曾殿に行き逢ひ奉る」と見えてゐる。

うぢばしのみやゐ（鰤九）

〔宇治橋官居〕山城國久世郡宇治川に架せる大橋を宇治橋といふ。その橋の東側にある橋姫社は橋守の神である。

内平野町太神宮　伊勢の内外の、内平野町太神宮よと、いろいろの諸願の種を上町の（卯月紅葉）

大阪東區内平野町にあり、祭神・天照太神・八幡宮・春日明神の三座。浪花寺社巡・二十二社廻りの條に「四番。内平野町、神明宮」。

うつのやま　蔦の細道宇津の山邊の夢は、一富士にたかよつたの山も、外にはすつとんとん走り付き（隅田川）

うつの山邊の十團子、所所の名物買うて（丹波與作）

〔宇都山〕駿河國安倍郡にあつて、岡部と藤枝との間。伊勢物語に「宇津の山にいたりて我いらんとする道はいと暗う細きに蔦楓は茂り、……駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」と見え、また太平記（神田本）俊基朝臣再關東下向の條に「岡邊の眞葛うらかなしき夕暮に、うつの山邊を越え行けば蔦楓いとしげりて道もなし、昔業平中將の住所求むとて、東へ下ると夢にも人にあはぬなりけりと、詠みしもかくやと思ひ知られたり」とある。鹽生隅田川のこの文に「夢は一富士二鷹三茄子」といふに據つて、かく續けたのである。

宇都の山の名物十團子は、宇都の山の坂を岡部に向つて下る街道筋で賣つてゐたものである。井上通女撰・歸家日記（正德六年刊）中巻、宇都山をいへる條に「坂下るほどに十團子といふ物を家々の軒のつまにかけならべて賣る也、しとぎの小さき丸を十づつ絲につらぬけるは玉をつづりたらんやうなり、旅人買ひめて行きてわらはべにとらするとぞ、はかなげなる物から早くよりすることにて、今に變らぬさまなるもあはれ也」と見えてゐる。以て巢林子當時に於ける宇都山の名物十團子のいかなるものなるかが知られる。「とをだんご」とも見よ。（序云、古來有名な宇津の谷峠は明治九年長百五十間の隧道を通じ、車馬交通の便を開いた。その舊道を蔦の細道といふ）。

うづまさ　太秦となせ高尾山（義好）

〔太秦〕山城國葛野郡葛野鄕をいふ。

うづみ　うづみ・くずみ・河津の庄、押領は召されうが、高位の交りは及ばぬ事（本領曾我）

この地名伊豆國中に見當らない。本領曾我のここは恐らく宇佐美の誤であらう。曾我物語に河津が領地を記して、「宇佐美・葛見・河津・三箇莊」とある。宇佐美は伊豆國田方郡宇佐美村あたりの古の鄕名。

うへだ　玉水近き山城の、村は上田に家富みて（宴庚甲）

〔上田〕山城國綴喜郡玉水附近の村名。

うみのうら（國性爺後日）

〔宇美浦〕筑前國糟屋郡宇美村の海邊。

うめざはむら　闇はあやなし梅澤村（曾我會稽山）　**花は八重咲く梅澤の里過ぎ行けば**（扇八景）

〔梅澤村〕相模國中郡吾妻村大字山西の舊稱。曾我會稽山のこの文は「やみはあやなし云云」を見よ。

うめだ　加賀に梅田（最明寺殿）

〔梅田〕加賀國河北郡森本村大字梅田。

うめだ　やがて梅田へ行くときにどうで入られぬかなはぬと（氷朔日）

〔梅田〕大阪の梅田は往時火葬場墓所の地であつた。曾根崎新地圖について見よ。巢林子作の賀古教信七墓廻に、「あだし烟の梅田の火屋」とも見えてゐる。好色萬金丹・卷二に、「難波津の墓所處のみにもあらず、小柏瀬・飛田・野枝・曾根崎・梅田・馘原云云」。

うめだつつみ

「むめだつつみ」を見よ。

うめだばし　市村玉柏梅田橋と見立てたり、それなどに、はて渡れば色町・越ゆれば火屋、濡れにも憂ひにもようううつるはさて（今宮）

〔梅田橋〕砲川に架せる橋の名。「曾根崎新地圖」を見よ。攝陽群談・七に、「梅田橋。下堂島新地裏町にあり、北は西成郡上福島村に渉る處也、此の所茶店南北の岸にあり、初夏より秋に至るまで諸人群をなして都の涼を移す」。

うめつがは

「むめつがは」を見よ。

うめのき　梅の木の是齋の辻で身を粉にはたいてやつて見た（丹波與作）

語釋部「うめのきのぜさい」を見よ。

うめのみや（雛好）

〔梅宮〕山城國葛野郡西梅津にあり、今官幣中社に列す。黒川道祐編・雍州府志・三、神社門下、葛野郡の條に、「梅ノ宮。在二梅津村西一、所レ祭之神四座、酒解神・大若子神・小若子神・酒解子神是也云云」。

うらのみだう（今宮）

〔裏御堂〕大阪東區北久太郎町四丁目にある大谷派本願寺別院を裏御堂または南御堂といふ、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛である。

うりふざか　二つに割らば瓜生坂、頂嶺峨峨と冬枯れたり（川中島）

〔瓜生坂〕信州佐久郡にある。木曾路名所圖會・卷之四に、「瓜生坂＝上り坂也、下りを金山坂といふ、布引山への道あり」。

うるさん　うる山が嶽森森と只月獨あこがれて（三國志）

〔蔚山〕朝鮮慶尚南道烏山府にある。豐臣秀吉征韓の役、加藤清正が明軍に圍れてこれを擊破した地である。

うるま　罪をうる間の里近き、友にも疎く親しきも（狐山姥）

〔宇留間〕今は鵜沼村と云ふ、美濃國山縣郡にありて、岐阜の東約六里にして達す。

うんすん　うんすん六郎（國性爺）

葡萄牙國から渡來したウンスンガルタの名を取つたもので、その實國名ではない。

うんぜんがだけ　御湯を捧げん靈門山、うんぜんがだけ見上ぐれば、峯に煙の一結び（國性爺後日）

〔雲仙嶽〕溫泉岳とも書く。肥前國南高來郡（島原半島）にある火山。その西方海拔二千四百尺の高地一帶は現今雲仙公園となり、溫泉湧き、周圍は樹木鬱蔥として風光佳麗の境である。

うんりんゐん（峨）

〔雲林院〕大德寺の南、舟岡の東にある寺院。

えぐち　こがれ寄る邊の江口とて、假の枕に惜しむなよ（本領曾我）

〔江口〕攝津國西成郡中島村の地をいふ、往時は遊女も多く住んで繁昌した地で、遊女妙も此地にゐたのである、されども今は淋しい村となり妙の故居の跡も定かに知られない、妙と西行との歌塚の碑も寂光寺境内に移されてある。「えぐちのきみ」を見よ。

えじり　ふちゆう江じりすつとんとん（丹波與作）

〔江尻〕駿河國にありて府中と興津との間で東海道五十三次の一。

えのこじま（今宮）

〔江之子島〕攝陽群談・五に、「江之子島。西成郡にあり、大阪の市中にして江之子島町と稱す、所傳不詳、一說難波江の兒島を以て上略したるかといへり」。

えびすばし　惠比須橋や、惠比須橋越えて、見たや見せたや難波橋（卯月紅葉）

〔惠比須橋〕戎橋とも書く、大阪道頓堀川筋、太左衛門橋と大黒橋との間にある。

攝陽群談卷第七、橋の部に「戎橋。南は吉左衛門町と九郎右衛門町の間、北は(もと)右衛門町と九左衛門町の渉り也、此橋始は操橋と稱す、川の南側、操狂言・歌舞伎等の芝居地を以て、今に操橋の名をいふ者あり」。

おいのさか　其使の早駕籠を乘せて、おいの坂のおり口から、二里の間を一貫四百（大經師）

〔老坂〕山城國乙訓郡大江坂をいふ、丹州街道に當る。

羅洛瑣攝、山城名跡巡行志、第五、乙訓郡の條下に、「大江坂（或云二老坂一）、坂路二十一町」。又云「大江越（云二老坂越一）丹州街道也、出二桑田郡峠村一國界峠ノ四二町ニアリ云云」。

應天府（國性爺後日）

支那南京（金陵）。和漢三才圖會卷六十二、南京の條に「按京師稱二應天府一、昔楚威王初置二金陵邑一、因レ其地有二王氣一、理二金以鎭レ之、故名二金陵一云云」。華夷通商考・卷一に「應天府＝南京の城下也」。

おうとうごえ（井筒）

おとごえ（追夫越）のこと。河内國北高安の里から大和へ越える道路なる十三峠の南の山道

おかたま　雨の宮・風の宮・おかたま・うがたま・鏡の宮（國性爺後日）

〔興玉〕伊勢國度會郡二見浦にある夫婦岩をいひ、何時の頃よりかこの岩に注連繩を張つて、興玉の神の拜所となつた。

おきつ　とんとうつたるおきつ波、まつばらはるる膏藥買うて、月を

すひ出せ清見寺（丹波車作）

〔興津〕駿河國にあつて江尻と由井との間。東海道五十三次の一。この町に萬病によいといふ膏藥を賣る店があつた。東海道名所記（萬治元年成）に、「宿の中に萬病によしとて膏藥あり」。

おきのかぶろ 沖のかぶろに言問へば、灘の男波が打寄せて（女護島）

「おきのかむろ」（沖家室）をいひ、周防國大島郡家室西方の南にある小島の名。近松のこの文は、家室に禿をいひかけたのである。

おくのゐん 深く心をおくの院（萬年草）

〔裏院〕高野山上一の橋（女人堂より十八丁許東）より弘法大師廟まで十八丁の間右も左も墓碑ばかり、總て奥の院の境内である。

おぐらつづみ （出世景清）

〔巨椋堤〕山城國久世郡の北部にある巨椋湖畔の堤をいひ、奈良街道に當る。

おこびとちやう お小人町の久六は此方より若い人（夕霧）

〔御小人町〕大阪にある町名であつて、雞波雀（延寶七年刊）・諸大名御屋敷付、天滿之分の條に、「蒔田權之佐殿屋敷天滿十一丁目、御小人丁蒔田重大夫」と見えてゐる。

おたが 近江に建部おたが、武藏に氷川鷲の宮（日本武尊）

〔御多賀〕近江國犬上郡多賀社。國花萬葉記卷十、江州國郡神社之部に「多賀社＝犬上郡。祭神一座、伊弉諾命なり」。

おたぎのてら （娘）

〔愛宕寺〕京都下京區小松町珍皇寺の稱。色葉字類抄に、「珍皇寺（愛宕寺）。參議小野篁卿建立。土俗云此寺者山城國分寺、弘法大師幼少之時相二從慶俊僧都一、久住二此寺一給云云」。

おちばやま 夜半の鐘の落葉山（百合若）

〔落葉山〕攝津國有馬郡有馬湯山浴室の西にある、山頭に城郭の古跡あり、因て城山ともいひ、遠寺の晩鐘幽に聞えて、有馬名勝の一。

おとなしがは 疑深き音無川流れの罪をかけて見る（反魂香）

〔音無川〕紀伊國東牟婁郡にありて本宮と新宮との間。

おとはやま 鳥が鳴く音羽の山をあとに見て（娘）

〔音羽山〕山城國宇治郡山科にあり、逢坂山以南の山嶺。

おなりばし 佛の姿に身をなり橋（天網島）

身を成りに御成橋（おなりばし）をいひかけたのである。御成橋は京橋の北の小橋の稱であつて、（延寶頃の大阪地圖に「小はし」と記し、網島と片町との間に架し、今の備前島橋のこと）、この橋金城の通路に當る。大坂町鑑に、「備前島橋」鉸川西の口、世に御成ばしといふ」。

おにとりやま （井筒）

〔鬼取山〕大和國生駒郡の西端にある山で、河内國中河内郡に跨り生駒嶽の支峰。

おばら おばらざしにいで立たせ、人目忍びて丹波路や（扇の芝）おばらざしなる旅出立、馴れにし宿の名殘りには（扇の芝）

〔大原〕丹波國桑田郡にある大原社をいひ、大原社に參詣することを「おばらざし」（大原志）といふ。國花萬葉記・卷十三、丹波國中神社の部に、「大原社＝桑田郡に立。祭神一座、（今有三座）。伊弉並尊一座、社家の說に云、當宮は伊勢太神宮の母神伊弉册尊の鎭座也、今伊弉諾・天照太神を以て三座とす。春秋兩度の祭奠には遠近の貴賤群をなす、云云」。

おびとき 帶ときまで來たれば尊樣から迎が出て（持統天皇）

〔帶解〕今「おびとけ」といふ。大和國添上郡にあつて、現今鐵路櫻井線に當る驛。

おひわけ 四日市にも程近き追分にこそ着きにける（博多）

〔追分〕伊勢國三重郡日永村の村邑で、東海道より參宮街道の分れる所にて、四日市へ一里半。

おほうちやま （娘）

おほえのきし 大江の岸にうつ波に（曾根崎）

〔大内山〕洛西仁和寺の上の山の名。

〔大江の岸〕攝津名所圖會・四上に、「むかしは大江の岸大江の浦といひしも、今は京橋筋三丁目四丁目といふ、又八軒の旅舍あれば、土俗八軒屋と地名す」。

おほえばし 丸三年もなじまいで、この災難に大江橋（天網島）

〔大江橋〕大阪中之島と堂島との間、裏川筋に架せる橋。攝陽群談・七に、「同所（中之島の北）の裏川筋堂島新地一丁目にあり、南は上中之島町に渉る處也」。

おほえやま 振上げ見れば源の鬼神退治の大江山、峯は青葉に包まれて（鑓權三）

〔大江山〕丹波國天田郡と丹後國加佐・與謝の二郡に跨れる高嶺をいふ。昔時鬼神（酒呑童子）の栖んでゐたのを源頼光等が退治したことは謠曲大江山に見えてゐる。明法勘狀（條公卿家所藏、正曆二年の寫、延喜式・卷一の紙背）に、丹波大枝山に於て强盜二十人許出で來ることが記してあるから、この當時既に大江山が魔窟であるかに恐れられたことが知れる。

おほかめだに ここは所もおほかめ谷、せめて誠の狼が食殺してもくれよかし（嵯峨天皇）

〔狼谷〕山城國紀伊郡深草村の東南にある。黑川道祐編・雍州府志・一、山川門（紀伊郡）の條に、「狼谷。在二藤杜東勸修寺村一。此所近二宇治一、故多設二茶店一、又盛二抹茶於小壺或盞器一而賣レ之、旅行者買レ之止レ渴、又充二方物一。此處元狼谷也。今誤爲二大龜谷一、見二日本紀欽明紀一」。

おほさかさんがう 身こそ貧なれ大阪三郷隱れもない鐵槌煎餅三郎兵衛（氷朔日）

〔大阪三郷〕大阪全町をいふ。攝陽落穗集・一に云、「大阪三郷の事。三郷といへるは北組南組天滿組なれども、大阪は二郷にして天滿は南中島の內なり、いま當地繁榮にして町續なれども、古き繪圖には今市場迄は家建なし云云」。

大阪三十三所（おほさかさんじふさんしよ）（曾根崎）

第一番札所。大融寺は天滿の西北北野村にあり、本尊は千手觀世音、弘法大師の開基、

嵯峨天皇の勅願所にして、承和年中河原大臣源融鐘樓七堂を建立した。（攝陽群談などによる）

第二番札所。長禪寺は天滿西寺町にあり、觀音堂あり。本尊は十一面觀世音。（攝陽群談には五番札所となれり）

第三番札所。天滿西寺町の前曾根崎村領の地、神明社内にあり、本尊は十一面觀世音（攝陽群談などによる）

第四番札所。天滿西寺町法住寺内に觀音堂あり、本尊は十一面觀世音。（攝陽群談による）

第五番札所。天滿西寺町法界寺内に觀音堂あり、本尊は如意輪觀世音。（攝陽群談による）

第六番札所。天滿東寺町大嶺寺内の觀音堂。（攝陽群談による）

第七番札所。天滿東寺町超泉寺内の觀音堂。（攝陽群談による）

第八番札所。天滿東寺町善覺寺内の觀音堂。

第九番札所。天滿東寺町栗東寺内の觀音堂。

第十番札所。大阪城南玉造稻荷社内の觀音堂

第十一番札所。小橋寺町興德寺内の觀音堂。

第十二番札所。小橋寺町靈傳寺内の觀音堂。

第十三番札所。遍明院は俗に平野の觀音といふ。攝陽群談に「南平野村の東にあり、境内に大阪巡禮十三番の觀音あり」。

第十四番札所。中寺町西側長安寺内の觀音堂。（攝陽群談による）

第十五番札所。中寺町東側蓬安寺内の觀音堂。

第十六番札所。觀音堂は大阪の谷町にある。堂前に藤の大樹があつて、花の頃群集す。よつて世俗この あたりを藤の棚といふ。（攝陽群談による）

第十七番札所。谷町筋八丁目寺町重顯寺内の觀音堂。（攝陽群談による）

第十八番札所。中寺町本蓼寺内の觀音堂。（攝陽群談による）

第十九番札所。中寺町菩提寺内の觀音堂。

第二十番札所。天王寺蓮池前の六時堂。

第二十一番札所。天王寺内の經堂。

第二十二番札所。天王寺の金堂。

第二十三番札所。天王寺金堂の北の講堂。

第二十四番札所。天王寺内の萬燈院。

第二十五番札所。天王寺より西安井の北の新清水。（難波九綱目による）

第二十六番札所。高津下寺町の心光寺。

第二十七番札所。高津下寺町の大覺寺。

第二十八番札所。高津下寺町の金臺寺。

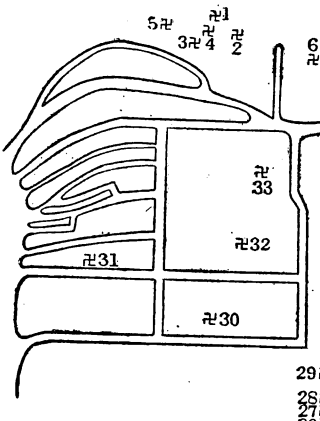
第二十九番札所。高津下寺町の大蓮寺。

第三十番札所。三津寺は三津寺町にあり、本尊は十一面觀世音にして行基菩薩の作である。

第三十一番札所。白髮町の觀音堂。

第三十二番札所。博勞町稻荷社内の觀音堂。

第三十三番札所。平野町新御靈内の觀音堂。



おほたに　杖突坂・小谷・大谷打過ざて（博多）

〔大谷〕伊勢國員辨郡梅戸村領南山の谷一里も連りて、これを大谷といふ。

おほつはつちやう　是をいくさの始めとして大津八町で八百まけろ（丹波與作）

〔大津八町〕大津旅籠町をいふ。東海道名所圖會卷一に、「大津旅籠町の名を八町といふ。近江國輿地志略卷六、志賀郡大津の條に「上八町下八町。或は南北を以て呼び東西を以て呼び、其町八町あり、世に大津八町といふはこれなり、この邊旅館にして往還の旅人をとどむ、西國の諸侯止宿する家兩軒あり、これを本陣宿といふ」。好色旅日記（貞享四年刊）卷二に「大津にはたごや町八町あり、故にただ八町とも申さぶらひ侍ろ」。

おほはらの　（蕉好）

〔大原野〕大原野神社は山城國乙訓郡小塩山の麓大原野にあり。黒川道祐編、雍州府志卷三、神社門下・乙訓郡の條に「春日社。在三西岡大原野一、桓武天皇始先遷二都於三長岡鄉一、于レ時遷二春日社四座神於二斯處一云云」。

おぼろのしみづ　あれは御所へ柴入るろ朧の清水のお嫁でないか（酒呑童子）

〔朧の清水〕山城國愛宕郡大原村西北の澗。字草生なる寂光院のほとりにある名水。

おほゐがは　いとど悲しさ大堰川、流泉の曲になぞらへて（三世相）

〔大堰川〕山城國嵯峨なる嵐山の下を流れる川。

おむろ　おむろ法輪嵯峨の御寺（蕉好）

〔御室〕山城國葛野郡御室仁和寺をいふ。

親不知・子不知（おやしらず・こしらず）（蕉翁）

越後國西頸城郡にあり、外波と市振との間約二里の間をいふ。北陸道第一の險阻の道であつて、怒濤打寄せて親は子を見かへるいとまなく、子は親を見かへるいとまがないとてこの名がある。

おやま　お山勤めて有難い（女殺）

〔御山〕「山上講」「山上樣」を見よ。

おらんかい　西天兀良哈を帶とし（國性爺後日）

〔兀良哈〕朝鮮咸鏡道の北邊で、今の間島の地。

かあひむら　おりゐの鴛籠の河合村（博多）

〔河合村〕伊勢國阿山郡河合村。

かいだんゐん　戒壇院の富樓那沙彌（女護島）

〔戒壇院〕天平勝寶七年の建立で、奈良大佛殿の前にあつて、大佛殿の壇法を移したもので三層より成る。

かいづ 今津海津の舟よばひ（源義經）

〔海津〕近江國高島郡にあつて、西近江路に當り琵琶湖北の水驛である。

かうかけやま 七歳の時近郷の國、高懸山の鬼神を手とらまへにして（弘徽殿鵜羽産家）近江國かうかけ山には惡鬼栖んで（嫗山姥）

〔高懸山〕若狹國遠敷郡三宅村大字神谷にあり、險岨にして攀躋し難い。この山にはもと惡鬼栖んでゐたとの傳説がある。嫗山姥に、高懸山を近江國といへるは當らない。

かうしんだう 頼まば願かのえ申、庚申堂よと伏拜み（冥途飛脚）

〔庚申堂〕大阪四天王寺南大門の南にある。攝陽群談卷第十二、寺院の部に「庚申堂。南門（四天王寺）の南にあり、青面金剛童子・梵天・帝釋・三甲・四鬼を正面として、藥師・觀音・地藏を安置す、庚申の日貴賤群を成せり」。

かうだう こんこん堂にかう堂や（曾根崎）

〔講堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺金堂の後にあり、聖德太子此堂場に於て諸經を講讀あり、因て講堂と號す、大阪順禮第二十三番」。

かうづのみや 世世に高津の坂道を登ればさつさ、下ればさつささつさ三六十八番、茲も難波の大君を唐人の褒め詞（卯月紅葉）

〔高津宮〕攝花寺社巡・二十二社廻りの條に、「二十二。高津宮、仁德天皇」。攝津名所圖會・四下に、「高津社。西高津にあり、祭神仁德天皇（中略）此社頭は道頓堀の東にあたりて一堆の丘山なり、遙に眺めば大阪の市街の万戸、川口の歸帆、住よしの里、住吉の浦、數津・三津の浦まで、一瞬の中にありて難波津の美觀なり」。

かうらみやうじん いざ先高良明神の廻廊近所を探して見ん（弘徽殿）

〔高良明神〕山城國綴喜郡男山の麓にある末社。雍州府志三、神社門下、綴喜郡の條に、「高良社。在八幡山下、自筑前國高良山移之斯處、西一座祭三住吉、東一座祭三武內一者也、是稱三下高良明神、武內大臣以三手珠滿珠兩顆一投三于海一、故或號三玉垂命一、凡斯社表三船形一而建之者也」。

かがみのしゆく 何故作ろ姿見の、鏡の宿も引過ぎて（小栗判官）

〔鏡宿〕近江國蒲生郡にあつて、守山から二里。淡海見聞錄卷五十五に、「鏡村＝西橫關村の南東にあり、中山道の往還大路なり、今は驛次にはあらざれども、昔の殊に繁昌の地にて、鏡の宿とのみよべり、逆旅もあり、遊女もありけるにや、云云」。

かがみのみや 鏡の宮に影とめて（國性爺）

〔鏡宮〕肥前國東松浦郡鏡村にあり、松浦宮ともいひ神功皇后を奉祀してある。

かぐなみ 音に聞えしかぐなみのこんさんちやにそ着き給ふ（三國志）

湖鮮では明人または明を江南といつた。このあたりの文の地名は唐音まがひの梟林子頓作の出鱈目語と思はれるものが少くない。胡鮮地理に通じてゐなかつたことも知れる。

かけがは 縞のさいふのふくろゐや、のりかけがはを飛下りて（丹波與作） 葛て布を掛川の、宿より末に事まちの、神の御名さへいかめしき（日本武尊）

〔掛川〕遠江國にありて袋井と日坂との間、東海道五十三次の一で葛布はこの地の名産である。國花萬葉記卷八、遠州國內出る名物數品の條に「葛布＝懸川にあり、根本は上はり村と云所にて作る也」。

かげろふのもり （蜻九）

〔蜻蛉森〕山城國宇治の里大路方の東、三室戸の左方で、蜻蛉石のある森。

かさいがやつ 葛西が谷の佐々木屋敷（最明寺殿）

〔葛西が谷〕相州鎌倉滑川の向ひに當つて屏風山の山ふところに入り込んだ谷。

かざごえのみね （最明寺殿）

〔風越峯〕信濃國伊那郡風越山峯をいふ。風越山は木曾山脈の一峯で、今は白山權現を祭りて權現山といふ。

かさとりやま なき顔かくせ笠取山（淀鯉）

〔笠取山〕山城國宇治郡醍醐山の東に當れる山で高さ三七一米。古今集・秋下部、在原元方の歌に、「雨ふれど露もらじを笠取の山はいかでか紅葉染めけむ」。

かさぬひのさと （嫗山姥）

〔笠縫里〕美濃國安八郡にある古驛路で、今北杭瀬村の大字とす。

かしはぎのもり 月に枕のヤ宿かした、宿かしはぎの森ならで、粟津の森にやすらひて（艷容）

〔柏木森〕近江國甲賀郡水口村の西、柏木村の森をいふ。

かしはぎのもり 柏木の森暗きより、今をはじめの旅衣（天智天皇）

〔柏木森〕大和名所圖會卷二、添上郡の條に「柏木社＝柏木村にあり」。

かしま 伊勢・石清水・加茂・春日・鹿島・三島（加增曾我）

〔鹿島〕鹿島明神は常陸國鹿島郡にありて、祭神は武甕槌神である。

かすみのたに （蜻九）

〔靈の谷〕山城國紀伊郡深草山の谷。

かすりね この手かの手の枕の酒、奠霧と隔つれど、解くれば同じかすりねの、水をかりなる蚊れも（反魂香）

〔微井〕奈良、橋本町南側東端にある。大和名所圖會に、弘法大師の掘らしめ給うた四十八井の一であると見えてゐる。日本輿地通志、大和志、添上郡の條に「可須理井＝在三橋本町一、可レ容二一瓶一、霖雨不レ滿、亢旱不レ涸、數汲不レ竭」。「奠霧と隔つれど云々」をも見よ。

かぜごし 風ごしの峯の吹雪ぞ身にはしむ（最明寺殿）

〔風越〕木曾山脈の一峯であつて、信濃國下伊那郡飯田町の西方、今權現山と云ふ。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名之部に「風こしの山」。

かぜのみや 咳氣を祈るは風の宮(女殺)

〔風宮〕伊勢皇太神宮の域内にある風日祈宮をいふ、弘安年中蒙古襲來の時神威を顯はし給はれたので、正應六年三月二十日官號宣下ありて別宮に列す。

かせやま 花に悟りの善提山、衣かせ山梅谷の、移り香とめて端木とろ(持統天皇)

〔鹿脊山〕山城國相樂郡瓶の原の泉川の向ひにある。名勝志に「在二木津里東一里半許一、山西南半里許有二鹿脊山村一」と見えてゐる。「衣かせ山」といへるは、古今集卷九、羇旅歌の部の歌に、「都いでて今日甕の原泉川川風寒し衣かせ山」とあるに據つたもので、「衣かせ山」といふ山の名ではない。

かたびらがつじ (三世相)

〔帷子辻〕山城國葛野郡にありて、上下嵯峨、廣澤、愛宕等の別れ道に當る。黒川道祐撰、雍州府志、古蹟門下(葛野郡)の條に「帷子辻。傳言覆盆林皇后任二遷勅一奉二野葬一時所二著御一之帷子殘二斯處一云」。

かたびらやま 淺葱小紋の帷子山(大磯虎)

〔帷子山〕武藏國橘樹郡程ヶ谷あたりの山。程ヶ谷は昔程ヶ谷・新町・帷子と三宿であつたが、慶長二年に一驛としたといふ。

かたらひやま いざや旅路のかたらひ山、それさへ跡に三輪が崎(持統天皇)

〔談山〕大和國磯城郡多武峯をいふ、多武と談と音相通じる故に談峯といふ。談峯縁起に、「初鎌足與二天智帝一、會二談和州倉橋山麓花下一、謀誅二入鹿一、因號二其地一曰二談峯一」。

かたをかやま 片岡山の飯に飢ゑ行き悩みたる旅の者(聖德太子)

〔片岡山〕大和國北葛城郡王寺村にある小丘。達磨日本に渡來し、片岡山にて飯に飢えたこと、古來俗説として傳へられてゐる。日本書紀、推古天皇二十一年の條に「十二月庚午朔、皇太子(聖德)遊二行於片岡一、時飢者臥二道垂一、仍問二姓名一而不レ言、皇太子視レ之與二飲食一、即脱二衣裳一覆レ飢者一而言、安臥也、則歌之曰、斯那提流、那能多烏箇夜儺利、伊比爾飫惠弖、許夜勢禮、那禮那禮、那禮那禮、於夜那志爾、夜那岐弖、那禮那禮、那禮那禮、佐須那餓能、伊比爾飫惠弖、許夜勢禮、那禮那禮、那禮那禮、於夜那志爾、夜那岐弖、那禮那禮、那禮那禮、阿波禮」。とありて、この片岡山にて飯に飢えた旅人を古來達磨として傳へられ、鶏鷺合戰物語卷三にも、「聖德太子善提達磨にあひ給へる時、飢を憐むに片岡山の歌を以てし云云」と見えてゐる。

かつき 上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民(蛙合戰)

〔香月〕筑前國鞍手郡にあつて、木屋瀧町の北にある村名。

かつてのみや 勝手の宮の拜殿に其夜は休らひ給ひしが(吉野忠信)

〔勝手宮〕吉野山藏王堂の南數丁にあつて、祭神は愛鷲命である。六十四神式に愛鷲命は勝手大明神なる由見えてゐる。文治元年靜御前がこの神前で法樂の舞を奏したといふ。

かつぼう 逃ぐるといふとも唐土天竺へはよも行くまじ、津輕がつぼう筑紫の果、王土の限りは武將の下知(酒呑童子)

津輕がつぼうの邊に住む蝦夷人半分、こけ猿のやうな面付(日本武尊)

〔合浦〕陸奥國津輕郡外濱の地をいふ。

かつまだのいけ (千足犬)

〔勝間田池〕大和國生駒郡樂師寺の東なる池の名にもあり、又美作國勝田郡の池の名にもある。相模入道千足犬のここの道行文は順路を顚倒したのではなく、文飾に諸國の地名を入れたのであるから何れでもよい。

かつをさばし 扨又鳳三十郎を鰹座橋とおしやる、心はの、何の料理に遣うても仕出が甘いは扨(今宮)

〔鰹座橋〕大阪長堀川筋に架し、下白髪橋と新玉造橋との間にありて、南北とも白髪町の渉である。

かなや さいに無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、しまだ・かなやに二日のよどみ(丹波與作)

〔金谷〕遠江國にありて、日坂と島田との間、東海道五十三次の一。

かねかなやま 桃林・赤壁・かね金山、首陽の蕨手に握り(唐船噺)

謡曲、鶴鷹に「是は唐土かね金山の麓、揚子の里云云」とあるに據つてかね金山といつた。謡曲拾葉抄に、「かね金山とは唐土に徑山といふものあれば、此きん山は金の字の金山にてあるべしと云事也、大明一統志卷十一云、中都鎮江府金山在二府城西北七里一江中、宋周必大筆錄、此山江環繞、每大風四起、勢若二浮動一、唐有二裴頭陀一、於二此開一山得一金、賜二名金山一矣、私云、一統志を見るに唐土に金山と云所凡十六ケ所有、今爰にうたふ金山は何れ歟是なる」と見えてゐる。

かねのみさき 鐘の岬の波の聲、響の灘とはれとかや(國性爺後日)

名所は音に響の灘、鐘が岬にあけ渡る(女護島)

〔鐘岬〕筑前國宗像郡の東北に斗出せる岬をいひ、響灘と界灘とを分つ。

かねのみだけ 斯る處にかれのみだけの方よりも、若武者一騎(雪女)

〔金御嶽〕金峰山をいふ、大和國吉野郡吉野にありて、山下に金峰神社(藏王堂)がある。

かば 平治の亂にも遠州かばに忍び給ひ何の恙もあらざるとや(十二段)

〔蒲〕遠江國濱名郡にありて、今も蒲村といふ。

かはさきの大權現 苗代水に堰きかけて惠めやあまの川崎の大權現を伏拜む(卯月調色)

〔川崎大權現〕大阪天滿橋の北、今の造幣局の西にあつた東照權現社。巢林子のこの文は、天の川に川崎をかけていひ、古今著聞集卷五、能因法師の歌に「天の川苗代水にせきくだせ天くだります神ならば神」の語句を取りて書いたのである。

かはなかじま (川中島)

〔川中島〕信州を流れる犀川と千曲川との間に介在する平野の總稱で、現今は更級郡に屬し、布施、柴、中津、御厨、今里、笹井、稻

里、眞島、小島田、青木島、東福寺、西寺尾の諸村を包有すれども、戰國時代は交通の駅態、河川の流域等今とは異つてゐるから、しかといひ難い。天文二十三年八月上杉謙信が兵を擧めて夜河を渡り、晩鐘に乘じて武田信玄の本營に突入し、舩を擁つて信玄を斫ろ、危機一髪遂に信玄を逸した古戰場である。

かははらのゐん 河原の院の古道より長講堂の裏筋を追かけ（女護島）

〔河原院〕京都下京區五條の西、鹽釜町より以南八町に亘る、六條坊門以南、西は萬里小路を限り、南は七條坊門に及び、東は京極限り八町。この地河原左大臣源融の邸第の跡である。

かはらまちばし 備後橋はこちこちと、寄せ寄せ濱際の瓦町橋にぞ着にける（今宮）

〔瓦町橋〕攝陽群談卷七、橋の部に、「瓦町橋。西橫堀川筋にあり、瀨戸物町より東は濱町に渉る處なり」。

かひづ 敵千曲川を夜の中に渡り、貝津の城の通路を切取り（川中島）

〔貝津〕信濃國埴科郡松代城址を舊貝津城と稱し、甲越の軍戰を交へた地。

かびらゑ かびらゑに共に契りし甲斐ありて、今又汝を相見つろ（以呂波）

〔迦毗羅衛〕中印度の國名で釋尊の生れ給うた聖地。

かぶとやま（三國志）

〔甲山〕攝津國武庫郡にある圓錐形の峯の山。

かぶろ

「おきのかぶろ」を見よ。

かへるやま 越の白山も去歲の綠にかへろ山（反魂香）

〔歸山〕還山とも書き、越前國南條郡にある。國花萬葉記、越前國名所之部に、「此山は西東へ遶し、海道は南の麓なり」。傾城反魂香のここの文は、綠にかへるに歸山をいひかけたのである。

かぼちや 東蒲塞右衞門（國性爺）

カンボヂア（Cambodia）をいふ。漢字で柬蒲塞、甘孛智、眞臘などと書き、印度支那半島の王國で、現今は佛國の保護國である。

かまだむら（冥途飛脚）

〔緑田村〕大和國北葛城郡下田と當麻との間の村。

かまどやま 御湯を捧げん竈門山（國性爺後日）

〔竈門山〕筑前國筑紫郡御笠村大字內山の東北に峙立せる山で、一名寶滿山といふ。

かみつら 上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民（蛙合戰）

豐後國北海部郡上北津留村のことか。

かみのせき 今日泊りては上の關（女護島）

〔上關〕周防國熊毛郡の村で、蕎名を釜戸關ともいひ、水を隔てて室津港に對す。

かみやがは（蝗丸）

〔紙屋川〕北野の西、平野の東にある川。

かみやのしゆく コレ忝くもおれが親は神谷の宿で隱もない（萬年草）

〔神谷宿〕紀州高野山下一里、山間にある小邑で、高野山に登る者の、擧文路（むじろ）より行くものと、高野口より行くものと道ここに會す。

かめがせ 齡も長き龜が瀨の上を步みて（井筒）

〔龜が瀨〕大和國北葛城郡王子村より大和川の南岸に沿ひ、河內國南河內郡國分村に至る臨路をいひ、龍田越の別道である。

かめやま 庄野に續く龜山は（出世景清）

〔龜山〕伊勢國鈴鹿郡にあり、今龜山町といふ。

かめゐばし 荻野八重桐を龜井橋ちやとおしやる、心はの、先はおたびの神かけて跡先に又續くものがないはさて（今宮）

〔龜井橋〕現今の大渉橋のあたりにあつた橋の名。攝陽群談・七に、「龜井橋、江戸堀・京町堀・阿波堀川の西、大川筋より南に流れ、橋は東西にあり、元祿年中始て造之、東は江之子島西之町、西は戎島の渉り也」。この流に架せる橋は龜井橋のみで、現今の木津川橋は無かつた。「をぎのやへぎり」を見よ。

かも 賴みを賀茂の瑞垣に、玉依姫の其昔、別雷の御神を、御產の紐のやすらかに、あやかる爲の御祈り（女夫池）

〔賀茂〕山城國愛宕郡上賀茂社（別雷山鎭座）の所地をいふ。秦氏本系帳に、秦氏女（玉依姫）夫無うして懷姙し、別雷神を生む。上賀茂社の祭神なる由を記してある。

かものさんまい 泣く泣く步む夏草の、かものさんまい行きなやみ（賀古敎信）

〔蒲生三昧〕今の京阪電車の蒲生停留所の南あたりにあつた墓地で、攝津七墓地の一である。「ななばか」を見よ。

かやばら 行先あてどはなけれども、私在所丹波の柏原まで落ちて見るばかり（大經師）

〔柏原〕今・柏原町といひ、丹波國氷上郡にあつて鐵道線路の驛となり、篠山と福知山との中間にある。町の西小丘におさんの森があり、ここにおさん茂兵衞が曝れてゐたと傳ふ。

からこと 都まで聞き通へる唐琴は、浪の緒すげて風ぞ彈くらん（浦島）

〔唐琴〕備前國兒島郡西南海岸にある泊である。「みやこまで聞き通へる云云」を見よ。

からすがだけ（吉岡染）

〔烏嶽〕大和國宇陀郡八咫烏神社のある山。

からすざき 浮根に鳴くや烏埼、明行く空は白石の（國性爺後日）

〔烏埼〕播磨國明石郡西垂水海岸の名であつて、西は明石、東は舞子浦となる。

からだのいけ 暮れぬ日影や夕陽山、からだの池に駒とめて（鸚迦）

〔迦毗羅池〕大唐西域記・卷九に、「竹林精舍（天竺王舍城ニアリ）北行二百餘步至迦毗羅池、如來在昔、多此說法、水既清澄、具八功德、佛涅槃後、枯涸無餘」。

かるかやのせき（傾城島原蛙合戰）（天神記）（國性爺後日）

〔筑紫國〕筑紫の舊址は筑前國筑紫郡水城村の南大字通古賀にある。

かれいがは 親を恨みの日は涙、何に生れんかれい川（讃岐歌）

〔佳例川〕大隅國姶良郡を流れる川。ここの文は、親を睨めば鰈になるといふ譬を用ひて、佳例川にいひかけたのである。

かんざき 神崎の町は歌仙が右左、以上三十六格子（賀古教信）

〔神崎〕攝津國河邊郡小田村にある。往時京津間の水驛で、遊女町もあつて繁華であつた。「三十六格子」といへるは、三十六歌仙に譬屋三十六軒をきかせていうたのである。

がんすゐじ 岩松村岩水寺の門前より（春庚申）

〔岩水寺〕國花萬葉記・卷八・遠州岡中諸宗佛閣の條に、「岩水寺、眞言宗、岩松村、寺領四十二石」。

神田の明神 武州神田の明神と神に齋ひ世を祝ひ（雜物擧）

東京神田區湯島聖堂本町にあつたが、大正十二年九月一日の大震大火災で全燒して再建。江戸名所圖會・卷之五に、「神田大明神社。聖堂の北にあり、唯一にして江戸總鎭守と稱す、祭神大己貴命、平親王將門靈二座、社傳曰人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年の鎭座にして其はじめ柴崎村にありし頃、中古荒歷し既に神燧絶えなんとせしを、遊行上人第二世眞教坊東國遊化の砌ここに至り、將門の靈を合せて二座とし、社の傍に一字の草庵を結び芝崎道場と號す、其後慶長八年當社を駿河臺に移され、元和二年又今の湯島に移させらる、其然舊號を用ひて神田大明神と稱す」。

かんどり これは鹿島かんどりより罷出た事觸でござりや申す（用明天皇） 那須の湯泉大明神かしまかんどり諏訪熱田（加增曾我）

「かとり」（香取）に撥音「ん」の增加したのである。香取神宮は下總國香取郡香取町にありて官幣大社である。祭神は經津主命、武甕槌命、天兒屋根命、姫神。

きうせんざん （國性爺）

〔九仙山〕支那福建閩侯縣城內東南隅にある。

きかい 彼に綴くは鬼界十二の島（國性爺）

〔鬼界〕鬼界島をいふ。大隅薩摩の南方にある諸島の稱、古來指す所明瞭でない。長門本平家物語には、「鬼界は十二の島なれや」とある。平家物語にある俊寬が流されたる鬼界島は、硫黄島のことである。謠曲「俊寬」の條もよりも此島は鬼界が島云云」を見よ。

きききやうがはら 草の細道傳ひ行く、爰ぞ桔梗が原とかや（川中島）

〔桔梗が原〕信濃國東筑摩郡にある原野にして、鹽尻より北、松本に至る四里許の間をいひ、武田信玄の兵が小笠原長時の軍と戰つた所である。

きしのわだ 雜賀屋へ出入致す岸の和田の九兵衞と申す駕籠の者（萬年草）

〔岸和田〕和泉國泉南郡にある町。

きじま （加增曾我）

〔木嶋〕信濃國下高井郡にあつて、飯山町の東。

ぎしやくせん ぎしやく山に雲覆ひ、西は又鷲の御山峨峨として聳えて連れり（驛迦）

「ぎしやくさん」、耆闍崛山をいふ、印度摩訶陀國王舍城の東北にある山で、その形が鷲に似てゐるによつて靈鷲山ともいふ。「わしのやま」を見よ。

きせがは この頃手越黄瀨川の龜菊龜鶴なんど數多の君に出會ひしが（加增曾我）

〔黄瀨川〕駿河國駿東郡にあつて、箱根・三島の通路にあたる古驛である。

きそのみさか 木曾のみさかの谷風は吹けども袖に寒からで（最明寺殿）

〔木曾御坂〕信州西筑摩郡の南端にあつて、山口（現今中央本線驛）の東なる馬籠（木曾谷の南門に當り、美濃國神合より一里）から三留野驛に出る山路馬籠峠をいふ。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名所之部に「木曾の御坂＝まで峠といふ、是より深山に入山坂多し」。

きたのしんち 北の新地の料理茶屋（女殺）

〔北新地〕大阪堂島川の北岸曾根崎新地。

きたはま （淨瑠）

〔北濱〕「きたわき」を見よ。

きたむきのはちまんぐう それを頼みに北向の八幡宮の御寶（卯月紅葉）

爰に北向の八幡宮の燈明も、おのれとしめり行先は（生玉）

〔北向八幡宮〕大阪西高津生玉社の門前南の方蓮祖の御にあり、慶長年中、城中の諸士此地に於て射術の稽古をなして、八幡宮を勸請したもの、北向は大阪城守護の謂である。浪花寺社巡、二十二社廻りの條に、「二十。生玉、北向八幡」。

きたわき 北脇邊のよい衆は、大かた火燵に水を入れるげに御座ろ（重井筒）

〔北脇〕北濱ともいひ、大阪の北部中の島の川南の地で、米穀取引商人の多かつた所である。淨瑠璃世繼德に、心中重井筒のこの所を引いて、「北濱邊のよい衆は、火燵に水を入れますろ」と書いてある。

きちじやうゐん （女護島）

〔吉祥院〕南都七大寺の一なる大安寺の東坊をいふ。

きつじ 奈良坂や木辻も戀の札所にて（淨瑠） それ故に木辻では三つ山と付けられし（反魂香）

〔木辻〕奈良の遊女町の名。木辻の名稱については坊目考に、「往年在家無之、草庵有、稱念寺是也、路傍一大樹有、木辻稱其藍縣也、慶長年間民家二三宇造而爲茶店、薄夜登之族ヲ謂、竟恨城町成」と見えてゐる。大和名所圖會二に、「南都の恨城町は木辻鳴川といひて縱橫にあり云云」。延寶六年刊の八重襷に、木辻遊女町の繪が載せてある。

きつちう （三國志）

朝鮮の州名。吉州（Kijiyu）である。

きつねがは よしみよしみの言の葉にばかされわたる狐川（淨瑠）

〔狐川〕淀の水驛の南にて淀川に落ちる川。黒川道祖撰、雍州府志・一、山川門、紀伊郡の條

に、「在三輿等之西南」、淀川與三木津川一相合所也」とある。「こしみよしみ云々」をも見よ。

きぬがさやま　衣笠山の紅葉ばも、來て見よとてや牡鹿鳴く（三世相）

〔衣笠山〕山城國葛野郡鹿苑寺の西南、仁和寺の東北にある山。

きぬかせやま　「かせやま」を見よ。

きぬばりやま　きぬばり山の文覺屋敷（最明寺殿）

〔衣張山〕絹張山とも書き、相州鎌倉にあつて標高百二十五米突。頼朝が政子と共に炎暑を苦しみ、此山に絹を張りて雪景を作り、酒宴を開いたからかくいふとぞ。文覺屋敷はその附近小富士と滑川とに挟まれた地にあつた。

きのめやま　上り登るや木芽山、峠遙に西の空（嚴靜）

〔木芽山〕越前國敦賀郡と南條郡との界に跨れる山で、木芽峠は敦賀・疆井間の通路に當る。

きのもと　木の下の宿もとさゝぬ世となせし（蓬萊）

〔木之本〕近江國伊香郡の首邑で、賤ケ岳と平峯山との間にあつて、現今鐵道停車場がある。

**きびのなかやま　**（振袖始）

〔吉備中山〕備中國吉備郡眞金村にある。

**きぶね　**（歌枕佛）

〔貴船〕山城國愛宕郡鞍馬村大字貴船に貴布禰（きぶね）神社がある。

きまんこく　きまん國の鬼王、はらな國のはくだわう、五天竺の波羅門が摩醯首羅を驅集め（鎌田）

鬼滿國卽ち鬼の充滿する國の義か。荻生徂徠著、南留別志に、「世俗に鬼まん國といふ事をいへるは、鬼方を誤れるなるべし」。

きやうがしま　清盛の御骸（おんから）を津の國兵庫の名にし負ふ、經が島にぞ納めける（平家女護島）

〔經島〕今攝津國武庫郡兵庫北濱の地であらう。平家物語卷六に、「骨（清盛）をば四寶法眼首にかけ、攝津の國へ下り經の島にぞ納めけろ」と見え、「石のおもてに一切經を書きて、つかれたりける故にこそ經の島とは名づけけれ」と見えてゐる。

ぎやうき　行基から山田まで召しまして（百合若）

〔行基〕昆陽寺をいひ、攝津國川邊郡稻野村寺本にある。天平五年行基菩薩の開創に係り、俗に行基寺と稱し、本堂には行基菩薩作の藥師佛を安置し、往時攝州第一の名刹であつたが、天正年中火災に罹り、後今の堂を造營す。この地西國街道に當つてゐるので其名夙に著る。

きやうだう　七千餘卷の經堂に（曾根崎）

〔經堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺のうち太子堂の北の隅にあり、大阪順禮第二十一番」と見えてゐる。

きやうばし　京を持つたる京橋に一つ流れの御祓（みそぎ）川（鑓權三）

〔京橋〕山城國伏見町にありて宇治川に架せる橋。大阪通ひの川船の乘場。

きやうばし　妙法蓮華きやう橋を越ゆれば（天網島）

〔京橋〕天滿橋の東方にある橋。攝陽群談・七に、「京橋。大和川筋玉造川にあり、南は金城の下、北は片原西町に渉る京道なり」。

ぎよくけい　玉京・崑閬・貌姑射の山（松風）

〔玉京〕神仙の居處。枕中書に、「玄都玉京七寶山、週遍九萬里在大羅天之上」。

きよたき　高野川西に清瀧鳴瀧山（雉子）

〔清瀧〕山城國葛野郡愛宕山井に水尾山に通ずる路に當り、この地を流れてゐる川を清瀧川といふ。

きよみがせき　清見が關明方に興津が原の群千鳥（大掛物）　早くもこゝに清見潟、關のとざさぬ君が代の（鎌田）

〔清見關〕駿河國庵原郡清見潟の傍にあつた關で、その址は今の清見寺の域内になつてゐるといふ。清見潟今は清水港といひ、興津の南に當る。「關のとざさぬ云云」は、關の戸を鎖さぬ泰平な若の御代の意。

きよみづでら　景清常に清水寺の觀世音を信仰し（出世景清）

〔清水寺〕京都下京區清水町にある。法相宗の中本山で、音羽山と號し、奈良の興福寺に屬してゐる。千手觀世音を奉祀し、西國巡禮第十六番札所である。緣起によれば坂上田村麻呂の創建といふ。現在の伽藍は寛永十年德川家光の再建にかかり、同十八年朝廷から長樂寺架を賜はつたもので、高尚莊嚴を極めてゐる。

きよみづでら　松原はるゝ賣藥買うて、月を吸ひ出せ清見寺（丹波與作）

〔清見寺〕巨鰲山と號し、駿河國庵原郡興津町にある古刹。清見寺の門前の面ひの家々賣藥を賣る店多く、所謂清見寺賣藥の名高かつた。國花萬葉記卷八、駿河國中名物出所之部に「清見寺かうやく。井上通女撰、歸家日記（正德六年刊）上卷に「清見寺の門前より……向ひの家々賣藥賣る所多し」。近松のこの文は、清見寺は月の名所であり、又清見寺賣藥といふ名物があるので、松原（三保松原）晴るゝに晒るゝ（道中の疲れに足が晒るゝ）をいひかけて、賣藥買うてといひ、その藥で吸ひ出せといひ、月の名所をもきかせたのである。

**きららざか　**（三國志）

〔雲母坂〕山城國愛宕郡にありて、修學院村から比叡山に登る道にある。雲母坂の絕頂は山城國と近江國との堺で、字を水飲といふ。（巢林子作の三世相の中にもこの坂が書いてあるが、道順が合はない）。

きりがやつ　二八の春の藤紫、御髻を恐れもなくきりがやつの牢屋形に押込め（千正犬）

〔桐谷〕相模國三浦郡材木座にある。

きりはら　みづの御牧か鳥飼か、信濃に霧原望月か（源義經）

〔霧原〕信濃國西筑摩郡神坂村にあつて往昔御牧の地。霧原一に切原に作る。

きりやまがぜんぢやう　軍兵盡きんず其時は高館殿に火をかけて、斷谷が岩谷霧山が禪定へ君を移し奉り（源義經）

〔霧山が禪定〕霧山は陸中國磐遲郡上衣川の西

嶺にして、その頂上は修驗者の攀登修行の場なりしを以て之を禪定と呼ぶ、斷巖絶壑岩窟である。

きれと 丹後の名所が見せましたい、なれ合切戸天の橋立(浦島) きれとのもんじゆの法印様(大經師)

〔切戸〕丹後國與謝郡吉津村大字文珠の海濱をいふ、もと橋立の南なる狹水道の名で、また其南なる海岸に及ぼして切戸濱といふ。この地に智恩寺ありて、本尊文珠菩薩は梵天帝釋化現の作であると傳へて名高い、里人寺號を呼ばないで切戸の文珠閻といふ。

くがみ のりはかへさん法の人、くがみの寺は何處とも老いたる馬よ道しるべ(加增曾我)

〔國上〕九上と書いてもある、越後國西蒲原郡にある村名、國上寺は北越の最古刹で國上山の中腹に位し、元明天皇和銅二年の草創で、泰澄大師これを再興した、本尊は釋行基作の上品上生彌陀佛である。往昔は盛大を極め文應年間には僧徒千人を越えてゐたといふ。曾我物語・卷十、禪師法師が自害の條に、「惜もこの人人(曾我祐成・時致)の弟に細坊とて十八になる法師一人あり、故河津の三郎が忌の中に生れたる子なり、母思ひの餘りに棄てんとせしを、伯父伊東九郎養ひて越後の國九上といふ寺に登せ、伊東の禪師といひけり」。

謠曲・小袖曾我にも九上と書いてある。

くけん 九軒阿波座の野良烏(淀鯉)

九軒の町に羽かはす比翼の羽子板

欒子も(醫門松) 餅花開く餅搗のにぎにぎはしや九軒町(夕霧)

〔九軒〕九軒町の略、大阪新町遊廓内の町名。寛永年間始めて新町遊廓のできた時に、玉造の九軒茶屋ここに引移つたよりの名であるといふ。「大阪地圖」を見よ。

くさつ 乘おくれじとどさくさ津(丹波與作)

〔草津〕近江國にあつて大津と石部との間、東海道五十三次の一。

くしだ そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをやれ紫ばうし(丹波與作)

戀の櫛田の眞中中で、深き思ひをやれ紫帽子(國性爺後日)

〔櫛田〕淋德基編、伊勢參宮名所圖會卷上、飯高郡の條に、「櫛田。本名曾原村なり、俗にくしだといへども、櫛田村は川の五六丁下に有て是古道なり、松坂より一里十八丁」。丹波與作のここの文は、「そなた櫛田の眞中ほどで云云」の條を見よ。國性爺後日合戰のここの文は、「戀の櫛田の眞中中で云云」の條を見よ。

くしだのかみ (蛙合戰)

〔櫛田の神〕筑前博多の南西偏にある鄉社(祭神は天照皇太神、素盞嗚尊、大幡主神)。

くしなじやう 既にくしな城ばつだい河のほとり沙羅双樹の下にて、三界の導師涅槃に入らせ給ふ(釋迦)

〔拘尸那(Kushinagara)城〕中印度にある。釋尊は拘尸那城外跋提河の西畔、沙羅双樹の下で入寂されたのである。

くすは (淀鯉)

〔楠葉〕河內國北河內郡楠葉村。

くずみ うづみ・くずみ・河津の庄(本領曾我)

〔玖須美〕久須美また葛見などとも書いてある。伊豆國田方郡伊東村あたりの鄉名。現今も久須美村の名を存す。戰國時代には多賀村邊までを汎稱した。

くちなしはら (雪女)

〔山梔原〕山城國木幡の里にある。

くちのつ 聲も高句の與茂十郎、口之津勢を驅り催し(蛙合戰)

〔口之津〕肥前國南高來郡島原南端の村名。

くつかけのしゆく (三世相)

〔沓掛宿〕大和國添上郡田原村沓掛の小邑。

くにしま (二枚繪)

〔柴島〕俗に國島とも書き、攝津國西成郡にあつて淀川に沿ひ、長柄の北に當る。

くはつ 懇な友達は桑津まで迎ひにぢや(女殺)

〔桑津〕攝津國東成郡北百濟村桑津(大阪天王寺の南)をいひ、大和國吉野郡大峯山に登つて(卽ち山上參り)歸る人だちを此の地に出迎へするを坂迎へといふ。

くはな 今の湯あがりは長長の中風病み、なほるも道理桑名の衆(百合若)

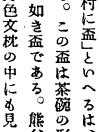
〔桑名〕伊勢國桑名郡の町。近松のこの文は、桑の木の杯で酒を飮めば中風に罹らぬといふ俗說に據つて、かくいうた。

くぼた (丹波與作)

〔窪田〕伊勢國河藝郡大里村窪田。

くまがいむら 熊谷村に盃の、佐野のくくたち肴にて(最明寺殿)

〔熊谷村〕武藏國大里郡にある。熊谷町は中山道屈指の一驛で、現今高崎線鐵道驛がある。「熊谷村に盃」といへるは、熊谷盃をいうたのである。この盃は茶碗の形で此國の如き盃である。熊谷盃は新好色文枕の中にも見え、また西鶴諸國咄卷四にも、「熊谷の大ぶりなる金の盃」と見えてゐる。



くまのさん 熊野山のほいほい酒(酒呑童子枕言葉)

〔熊野山〕紀州熊野三山のある巡禮地で、古來修驗者の往來繁き所。「ほいほい酒」とは、熊野ではこの酒山門に入るを許されなかつた爲、ほいほいと追拂ふ意より附いた酒名か。

くもづ 小萬泣く泣く申すやう、緣は異なものその時に起請一枚書かれども、雲津の川瀨二せ三せ指切りしてのいひかはせ(丹波與作) 借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて、くもづの渡で算用(丹波與作)

〔雲津〕伊勢國にある。雲津の渡は津と松坂との間にある。雲津川は壹志郡を流れてゐる川の名。伊勢參宮名所圖會・三に、「雲出川。島貫村今の雲出と須川とを隔て大川なり、かり橋あり水出れば船にて渡す、此下流は上に云雲出が崎なり、此邊すべて雲津ともいへり」。「小萬泣く泣く云云」は、音曲色酒盛・八百屋お七の祭文に、「お七泣い泣い申すやう、何時ぞや額火にあひし時……逢うて語らん嬉しやと、思ひ定めて夕暮に一わの鳶に火を包み、ほほり上げたるばかりにて燃ゆる仔細は候はず……」とあるに據つたのである。

くものはやし 曉かけて立つ空の、雲の林の名を頼む(娘)
〔雲林〕京都市外・紫野の西偏、舟岡の東・大徳寺の南に雲林院があつた。今は親音堂に雲林の名を存してゐる。

くらがりたうげ (三世相(女殺))
〔闇峠〕大和と河内との國境で生駒山の南嶺に當り、生駒山の山路辻子越の南なる峠である。近代奈良・大阪間の通路は專らこれによつたものである。

くらはしやま 宿直の兵防ぎ戰ふ力なく、或は逃失せ討死し、帝はやうやう倉梯山まで落ちさせ給ふ(聖徳太子)
〔倉梯山〕大和國磯城郡と宇陀郡との交界に横はる山で、昔羽山ともいふ。

くらぶやま 木蔭あやなしくらぶ山(用文章)
〔暗部山〕山城國愛宕郡鞍馬山。或云貴布禰山。

くりのわたし 陸を往けば遠うて迫手の氣遣ひ、九里の渡が近いげな(薩摩歌)
〔九里渡〕大隅國姶良郡福山の海峽にあり、隣國鹿兒島に渡る海路をいふ。

くりやがは 磯に手操の厨川(國性爺)
〔厨川〕和名抄に、厨を久利夜と訓んである。筑前國粕屋郡宿崎の地を厨といひ、そこを流れる川をいふ。

くるまおほぢ 車大路の藪蔭より、なうなう和上物申さん(蝉蛻天皇)
〔車大路〕京都五條橋を渡りて眞直に行く道。

くるわよすぢ くるわ四筋は四季共に、散ること知らぬ花揃へ(女殺)
〔廓四筋〕大阪新町遊廓をいふ。「よすぢのまち」も見よ。

くろかみやま (振袖始)
〔黒髪山〕備中國阿賀郡新見村の東にある山嶺

くろかみやま (門出八島)
〔黒髪山〕下野國日光山の主峯男體山をいふ。

くろさき 豐前の國の黒崎に上る朝日と打連れて(蛙合戰) 對の揃への黒崎や(日本武尊)
〔黒崎〕豐前の國とあれど、筑前國遠賀郡洞(くきの)海の南岸で今鎭道驛の黒崎町であらう。
序云、巢林子は唐津に居たものではあるまいと思はれることは、彼が用ゐる九州北部の地名が甚だしう前後し、その地を知つて書いたとは思はれない。若し彼が唐津に居たことがあるならばかうはあるまい。

くろだに 如意が嶽より黒谷の流れは白河に轡きて(三國志)
〔黒谷〕山城國愛宕郡八瀬村の東にして西塔の北谷である。溪水北に流れて高野川に注入す。

くわいけいざん (國性爺)
〔會稽山〕支那浙江省紹興府の東南にある山。

くわうかう 唐土の黄岡の二胶竹(源義經)
〔黄岡〕今の湖北江蘇道黄岡縣であつて、大きな竹の産地。王禹偁の黄州竹樓記に、「黄岡之地多竹、大者如椽、竹工破之、刳去其節、用代陶瓦、比屋皆然」。

くわざん あや菅笠にて顔隱し、忍び居たりし花山をばまだ夜をこめて出で給ふ(娘) 花山寺の和尚(酒呑童子)
〔花山〕山城國宇治郡山科村大字花山。この地に花山寺がある。雍州府志・五、寺院門下・宇治郡の條に、「華山寺。或號慈徳寺、又稱東山寺。花山院藏出三禁劍一先赴二此寺一、近世妙心寺嚴堂和尚再興之」。

ぐわんこうじ (女護島)
〔元興寺〕奈良七大寺の一。

くんしこく 慈悲を旨とし、儒道を學んで五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞く(大職冠)
〔君子國〕日本國の美稱。後漢書東夷傳に「仁而好レ生、萬物一レ地而出、故天性柔順易レ以道御一レ至二有君子不死之國一焉」。神武紀、慶雲元年七月甲申の條に、「唐人謂二我使一曰、聞二海東有二大倭國一、謂二之君子國一、人民豐樂、禮儀敦行」。

けあげのみづ つよきおきめに粟田口、けあげの水に名を流す(大經師)
〔蹴拳水〕蹴上は粟田口の東端にある。粟田口は京都三條通の東端で(今も白川橋東から蹴上までをいふ)大津への道。昔の刑場は此道の右方で面積百三十坪許の長方形。雍州府志、九、古跡門に、「蹴拳水。在二下粟田口一、源義經爲二牛若一時、出二鞍馬山一、從二資金商橋次末者一而東行、於レ是遙望二園原與市一、與市美濃國之土也、騎二馬入京師一、其從者十人意氣揚揚然列行、誤蹴二斯水一污二義經之衣一、義經怒三其無禮一、拔二刀斬一從者十人一、殺二與市之耳鼻一而放之、義經喜以爲二東行首途之吉兆一也、今斯水稱二蹴清水一、蹴清水在二近江國大津西追分東一」。
「つよきおきめに粟田口云云」を見よ。

けいそくざん 摩伽陀國鷄足山(釋迦)
〔鷄足山〕天竺にある山。大唐西域記に「其西河東、入二大林野一、行百餘里、至二屈屈吒播陁山一(唐云雞足)云云」。

けいてんじ (曾根崎)
〔慶傳寺〕攝陽群談に、「東生郡小橋寺町にあり。境内に大阪巡禮十二番觀音堂あり」。

けいひん 我はけいひんの般若三藏なり(以呂波)
〔罽賓〕印度西北境方面の地名であつて、時代によつて指す地を異にす。漢代では罽ら今のカーブル河流域の謂であつて、南北朝頃にはカシミールを指す。西域記に、「迦濕彌羅國、舊曰二罽賓一、訛也、北印度境」。

けはひざか (百日曾我)
〔假粧坂〕相模國鎌倉郡にある市邑であつて、國谷より西、深澤・俣野に出る坂路で往還の途に當る。

けふ 窓の雪のあかりにてけふの細布織るとの(源義經)
〔狹布〕中世頃狹布郡と稱したもの今は陸中國鹿角郡の内であるといふ。狹布の地より細布を産出した。奥義抄に、「狹布の細布とはみちの國のけふの郡より出くる布なり、はたはり狹き布なればむねあはずとはいふ也」。

けまや 申し善樣、これお見忘れなされたか、毛馬屋の七兵衛(二枚絵)
〔毛馬屋〕大阪府下の長柄より淀川を隔てて毛馬村がある。よつて屋號に云ひなしたのである。

げんだいふ　さてこそ尊は熟田の明神、源太夫も神となる（井筒）

〔源太夫〕熱田神社境内に源太夫社あるによつていふ。國花萬葉記・巻九、尾張熱田大明神をいへる條に、「源太夫殿とて小社有、これ手摩乳なり云々」。

こうとくじ　これぞなばせのこうとくじ（曾根崎）

〔興徳寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡小橋寺町にあり、境内に大坂巡禮十一番の觀音堂あり」。小橋は現今東生郡鴨橋村に屬す。

こうのあみだ

「こふのあみだ」を見よ。

こうもん　樊噲が鴻門の怒れる形も今此處に、奈落へ通れと踏む足に（大磯冠）

〔鴻門〕今の陝西省西安府臨潼縣の東にある。樊噲は漢の沛公の臣である、沛公が楚の項羽と鴻門に會合せし時、沛公の危急に及ぶや、樊噲其會合の席に突入し、目を瞋して項王を視る、頭髪上り立ち、目眦盡く裂けてゐたといふ。

こえだのはし　今ぞこえだの橋柱、淀の大橋（女夫池）

〔小枝橋〕山城國紀伊郡上鳥羽小枝川に架し、下鳥羽に通じる橋。

ごかうのみや　市之進は御香の宮、甚平は三栖の里、毎日そんじやうそこそこと（鎌髭三）

〔御香宮〕山城國紀伊郡にありて伏見町の東北に當り、神功皇后を奉祀せる宮。雍州府志・三、神社門下（紀伊郡）の條に、「御香宮。在二伏見一。神功皇后之廟也、鎮座年紀不二分明一。豐臣秀吉公築二伏見城一時、遷二神社於東岳舊畑一。香宮地、屢依レ爲レ祟、又遷二舊地一」。

こがらしのもり　身をこがらしの森のしたみち（淀鯉）

〔木枯森〕駿河國安倍郡にある。後撰集に「こがらしの森の下草風はやみ、人のなげきは生ひそひにけり」。

こくぶがはら　國分原に追詰め討取る首に候なり（畦合戰）

〔國分原〕陸前國宮城郡仙臺附近の地で、國分寺がある。

こけなはのしろ　（女楠）

〔苔縄城〕播磨國赤穗郡にあつた赤松氏の城。

こざん　音に聞えし親子の武士今日を限りの死軍と、につこと笑うて出でたるは、獅子と虎とが子を連れて孤山を巡る如くなり（碁盤太平記）

〔孤山〕支那浙江省杭州府西湖のほとりにある山の名。宋時代鏤唐の人林逋廬を西湖の孤山に結び、梅を植ゑ双鶴を畜へたといふ。碁盤太平記のここの文は、矢間父子を孤山の双鶴に喩へたのである。

こしごえ　さてこそ御子ましまさず、常に冷えたる腰越より追返されさせ給ひし、九郎大夫の判官源の義經の（壽女）

〔腰越〕相模國鎌倉郡にありて、片瀬の東南に接し、鎌倉の門戸に當る。義經ここより鎌倉に入れられず、爲に頼朝に腰越狀を呈した所である。巣林子のここの文、腰に腰越をかけていうたのである。

ごじふさんつぎ　是こそ五十三次をゐながら歩むひざくりげ（馬（丹波與作）

〔五十三次〕京都三條橋より江戸日本橋迄、百二十四里餘の間にある傳馬などを次ぐ五十三の驛宿をいふ。

五十三次、里、丁

大津（近江）		草津（近江）		石部（近江）									
5.18		5.24		2.32									
水口（近江）		土山（近江）		坂下（伊勢）									
2.18		2.26		1.35									
關（伊勢）		亀山（伊勢）		庄野（伊勢）									
1.23		1.18		1.26									
石藥師（伊勢）		四日市（伊勢）		桑名（伊勢）									
1.25		1.27		5.08									
宮（尾張）		鳴海（尾張）		池鯉鮒（參河）									
7.00		1.27		3.13									
岡崎（參河）		藤川（參河）		赤坂（參河）									
5.04		1.27		2.9									
御油（參河）		吉田（參河）		二川（參河）									
1.6		2.27		1.16									
白須賀（遠江）		新居（遠江）		舞阪（遠江）									
1.00		1.10		1.00									
濱松（遠江）		見附（遠江）		袋井（遠江）									
3.04		3.07		1.18									
掛川（遠江）		日坂（遠江）		金谷（遠江）									
2.16		1.29		2.00									
島田（駿河）		藤枝（駿河）		岡部（駿河）									
1.00		2.00		1.26									
鞠子（駿河）		靜岡（駿河府中）		江尻（駿河）									
2.09		1.18		2.23									
興津（駿河）		由井（駿河）		蒲原（駿河）									
1.00		2.00		1.00									
吉原（駿河）		原（駿河）		沼津（駿河）									
2.28		2.16		1.18									
三島（伊豆）		箱根（相模）		小田原（相模）		藤澤（相模）							
1.18		3.50		3.28		5.18							
大磯（相模）		平塚（相模）		程谷（武蔵）		神奈川（武蔵）							
4.00		2.6		2.00		2.18							
戸塚（相模）		品川（武蔵）											
2.00		2.18											
川崎（武蔵）													
2.18													

五所の祕水　その落葉が下こそは五所の祕水と聞くばかり（國性爺後日）

太平記巻七、千劍破城軍の條に、「此の城を搦へけるはじめ、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水此の峯にありて、適る事一夜に五斛ばかりなり、此の水いかなる旱にも干る事なければ」と見えてゐるが、五所の祕水の舊蹟今明でない。

ごせかいだう　是を路錢にごせ街道へかかつて一足も早う退かつしやれ（冥途飛脚）

〔御所街道〕大和國南葛城郡御所の街道をいふ。

こそべ　古曾部の能因法師（會稽山）

〔古曾部〕攝津國三島郡醴手村にある。能因法師この地に住んで居たので、世に古曾部入道といふ。

ごづてんわう　南東の門前の牛頭天王に我願ひ（卯月紅葉）

〔牛頭天王〕大阪天王寺の南門と東門との前にある牛頭天王社をいひ、二十二社巡りの第十四番と第十五番。攝陽群談・十一に「牛頭天王祠。東生郡四天王寺南大門の下にあり、所レ祭祇園ノ神也、（中略）此社は當所の氏神にして、住昔は山鉾を渉し美美敷祭あり、世に土地の守護神と稱す」。

こつま　こつま新家の綿事（三國志）

〔勝間〕木綿ともいひ、攝津國西成郡の村名で、大阪の南、天下茶屋の西。

ごてんぢく　その昔五天竺に蔓つて（用明天皇）

〔五天竺〕昔時印度をその地勢の上から東・西・南・北・中の五部に分ちての稱。

ことまちのかみ　末にことまちの神の御名さへ厳めしき（日本武尊）

〔事任神〕國花萬葉記卷八、遠州神社之部に、「事任社、周智郡一宮村、社領九百九十石、祭神大己貴命也」。

こなたが裏の西の方（生玉）

さがの居所大阪伏見坂町柏屋の裏の西方なる千日の刑場をいふ。

こばたのさと　木幡の里の片ほとりに千手太郎忠光といふ者あり（蟬丸）

〔木幡里〕山城國宇治郡大字宇治村小幡の里。

こばやしがう　小林郷の朝比奈屋敷（最明寺殿）

〔小林郷〕鎌倉の鶴岡八幡宮のあたり一圓の地の稱。東鑑・卷一に「治承四年十月十二日點三小林郷之北山、構二假屋一被レ奉レ遷二鶴岳宮於此所一」。

こびきちやう　「さかひちやう」を見よ。

こひづか（女夫池）

〔戀塚〕山城國紀伊郡にある。雍州府志・十、陵墓門に、「戀塚。在二上鳥羽一、曾遠藤盛遠誤斬二源渡妻之首一、携來於玆始見之、大驚且悔、則埋二首於斯處一、盛遠不レ堪二悲歎一、終剃髪爲二僧號一文覺一、時詣二斯塚一繼二慕之一、依號二戀塚一、永井日向守直清領二攝州高槻一、日誦二林道春一使レ作二碑銘一、建二塚上一、然斯所元鯉塚也、中古此邊有二大池一、池有二巨鯉一、作二妖怪一、土人殺レ之埋二此所一、源渡妻塚在二此南壇上一戀塚寺、然誤建二碑於斯處一惜哉」。

こぶくろざか（最明寺殿）

〔巨福路坂〕相州鎌倉の鶴岡八幡宮の裏門の少し南から西に登る坂で、雪の下から建長寺門前に出る道である。今の小袋坂の南つづきである。

こふじ　伊豫の小富士（嵯峨天皇）

〔小富士〕伊豫國宇摩郡にある。

こふなちやう　江戸小舟町米問屋の爲替銀（冥途飛脚）

〔小舟町〕今も東京市日本橋區にある町名で、江戸橋の北に當る。

こふのあみだ　こふの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の緣、千貫松にぞ着きにける（丹波與作）

〔國府阿彌陀〕伊勢國鈴鹿郡國府の阿彌陀をいふ。伊勢參宮名所圖會・三に「國府の阿彌陀。當國鈴鹿郡國府村上寺山の安置なりしを、寺荒廢して尊像雨露に朽ちし事を惜みて、延寶の頃か當寺の境内に捨行きしとなり」。

ごべうの　あめのみかどの御廟野よ（蟬丸）

〔御廟野〕山城國宇治郡日岡の東に曠野あり、御廟野と稱して天智天皇の御陵である。

こぼれぐち　今日は河内へ行かうかと、こぼれぐちまで行つたれば（卯月紅葉）　**續く命が不思議ぞと、二人が涙こぼれ口、明けぬ間は暫しとて**（冥途飛脚）

「翻口」天王寺の東南なる河堀口を俗に「翻口（こぼれぐち）」と稱し、平野街道への出口に當る。

こまがた　駒形の船頭まで押すに押されぬ世は金銀（吉岡染）

〔駒形〕東京淺草區駒形町に當り駒形堂あり。元祿頃は物淋しく、鰻など飛び交うた。駒形渡は昔時、新吉原に至る通人稱客の船着場として、屋形舟・猪牙舟の船宿が多かつた。

こまがたごんげん　箱根兩所駒形權現、分身は白和龍王右鵲王左鵲王（會稽山）

〔駒形權現〕神社考に「伊豆箱根者、本社蒼火火出見尊也、又有二駒形權現一、白和龍王・右鵲王・左鵲王・及客人官」。

こもがい　小西彌十郎が不敵丸抜けがけの先乘せんと、こもがいためがけて走らせしが（三國志）

〔熊川〕朝鮮慶尚南道にあつて、釜山の西・金海の西南にある地名。熊川を「こもがい」といふは朝鮮の古訓（Komkai）に據つたのである。川上久國撰・高麗陣中作圖〈朝鮮征伐のあつた文祿頃の圖〉によれば、熊川に「コムデン」と振假名が附けてある。

こや　こやのあしぶき宿もなき（天神記）

〔昆陽〕攝津國河邊郡稻野村大字昆陽をいふ、伊丹町を去ること十餘丁。和名抄に「武庫郡兒屋卿」。後拾遺集・卷二、和泉式部の歌に、「神の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重ぶき」。

こゆるぎ　敷居一つをこゆるぎの、傳に附いても入られねば（松風）　**狩にいにけり裝束は、常に一際こゆるぎの、老繫したる冠に**（松風）

「越ゆるぎ」に歌枕「小餘綾（こよろぎ）」をいひかけたのである。小餘綾は相模國の郡名。

ごりやうはつしや（烏帽子折）

〔御靈八社〕京都の御靈は上四所、下四所あるよりいふ。

ころもかせやま

「かせやま」を見よ。

ころもがは　陸奥に聞えたる衣川にぞ着き給ふ（源義經）

〔衣川〕陸中國膽澤郡衣川村を流れ、北上川に合して海に注ぐ。

ころもてのもり（姥）

〔衣手森〕松尾と嵐山との中間にある森の名。

ころものせき（門出八島）

〔衣關〕陸中國磐井郡平泉村にあつた關所の名。現今は平泉村高館以西、上衣川に至る山阜を關山といふ、中尊寺あるによつて中尊寺村の稱がある。源頼朝時代の衣の關は蓋しこの關山・中尊寺の後方にあつたものであらう。

こんさんちや（三國志）

かかる地名は朝鮮にはない。

こんたいじ　さて金臺寺大蓮寺（曾根崎）

〔金臺寺〕攝陽群談・十二に「大坂西寺町（世俗下寺町）にあり、境内に大坂順禮二十八番の觀音堂あり」。

こんだう　こん金堂に講堂や（曾根崎）

〔金堂〕攝陽群談・十二に、「四天王寺の本堂、大坂順禮第二十二番、本尊如意輪觀音」。

こんだのはちまん　戀は譽田の八幡

に、起請誓紙の筆の罰、そなたを除けてと泣く涙（冥途飛脚）

〔巻田八幡〕大阪府南河内郡古市村大字巻田にあり、應神帝及び六神を祀る、境内清浄にして來拜者四時絶えない。

こんめいち　唐漢の武帝の時、昆明池と云ふ池に朝夕魚を釣る人あり、或時鯉を釣得しに、糸斷れて魚は波に入り云云（隅田川）

〔昆明池〕錦字箋に、「昆明池は雲南省雲南府にあり云々」。三秦記に、「昆明池は雲南省雲南府にあり云々」。三秦記に、「昆明池、昔有二人釣レ魚、綸絕而去、遂通二夢于漢武帝一、求レ去レ鈎、帝明日戲二于池一、見二大魚銜レ綸、取而放レ之、問二三日一、池邊得二明珠一雙一、帝曰豈非二魚之報一耶」。

こんらう　玉京・崑崗・藐姑射の山（松風）

〔崑崗〕神仙の居る所。書言故事に、「崑崙曰二閬風苑一、有二玉樓十二一立二九層一、左二瑤池一右二翠水一、環以二弱水九重一、非二鸞車羽輪一蓋不レ可レ到」。

さいこく　西國の御利生ヤ三十三所（重井筒）

〔西國〕次條を見よ。

西國三十三所（重井筒）

京都及その近國三十三ケ所の觀音を奉祀せる寺院の稱。これを巡禮するを西國巡禮といふ。巡禮歌は俗に花山院奉納の勅吟と言ひ傳へ、これ等三十三所觀音の靈場に存し、哀婉の調でこれを唱へる。

第一番　紀伊那智山青岸渡寺（那智如意輪堂）
本尊如意輪觀音
補陀落や岸うつ波は三熊野の那智の御山に響く瀧津瀬

第二番　紀伊紀三井山護國院金剛寶寺
——如意輪——
古郷をはるばるここに紀三井寺花の都も近くなるらむ

第三番　紀伊補陀落山施菩寺（粉河寺）
——十一面——
父母の惠も深き粉河寺佛のちかひ頼もしきかな

第四番　和泉葛尾山仙藥院施福寺（槇尾寺）
——千手——
深山路や檜原松原わけ往けば楓の尾寺に駒ぞいさめる

第五番　河内紫雲山三寶院剛琳寺（藤井寺）
——千手——
まゐるよりたのみをかくる藤井寺花のうてなに紫の雲

第六番　大和壺坂山南法華寺（壺坂寺）
——千手——
岩をたて水をたたへて壺坂の庭のいさごも淨土なるらむ

第七番　大和東光山眞珠院龍蓋寺（岡寺）
——如意輪——
今朝みれば龗岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光なりけり

第八番　大和豐山神藥院長谷寺（初瀬寺、泊瀬寺）
——十一面——
幾度も參るこころは泊瀬寺山も靈もふかき谷川

第九番　大和興福寺南圓堂
——不空絹索——
春の日は南圓堂にかがやきてみかさの山にはるる薄雲

第十番　山城妙見山三室戸寺
——千手——
よもすがら月をみむろとわけゆけば宇治の川瀬にたつは白浪

第十一番　山城深雪山上醍醐寺
——准胝——
逆緣もものらさですくふ願なれば巡禮堂は頼もしきかな

第十二番　近江岩間山正法寺（岩間寺）
——千手——
みなかみはいづくなるらん岩間寺岸うつ浪か松風の音

第十三番　近江石光山石山寺
——如意輪——
後の世を願ふ心はかろくともほとけのちかひ重き石山

第十四番　近江長等山園城寺（三井寺）
——如意輪——
いづくとも浪間の月は三井寺の鐘の響にあくるみづうみ

第十五番　京都觀音寺（今熊野觀音堂）
——十一面——
昔よりたつをもしらぬ今熊の佛の誓あらたなりけり

第十六番　京都普羽山清水寺——千手——
松風や音羽の瀧は清水のむすぶ心はすずしかるらむ

第十七番　京都補陀落山普門院六波羅蜜寺
——十一面——
おもくとも五つの罪はよもあらじ六波羅堂に參る身なれば

第十八番　京都六角堂頂法寺——如意輪——
わが思ふ心のうちは六つのかどだまろかれと祈るなりけり

第十九番　京都行願寺（革堂）
——千手——
花をみて今はのぞみもかうだうの庭の千草も盛りなりけり

第二十番　山城西山善峯寺（良峯寺）
——千手——
野をもすぎ山路に向ふあめのそらよし峯よりも麓をる夕立

第二十一番　丹波菩提寺（穴太寺）
——聖——
かかる世に生れあふみのあなうやと思はでたのめ十こゑ一こゑ

第二十二番　攝津補陀落山總持寺
——千手——
おしなべてたかきいやしきそうぢじの佛の誓たのまぬはなし

第二十三番　攝津應頂山菩提院勝尾寺
——千手——
おもくとも罪には法の勝尾寺佛をたのむ身こそやすけれ

第二十四番　攝津繖雲山中山寺
——千手——
野をもすぎ里をも行きて中山の寺へ參るは後の世のため

第二十五番　播磨徳勝山清水寺（新清水寺）
——千手——
あはれみやあまねきかどのしなじなになにをかあぶのここに清水

第二十六番　播磨法華山一乘寺（法華寺）
——千手——
はるは花夏は橘秋は菊いつもたへなる法の花山

第二十七番　播磨書寫山圓教寺

——如意輪——
はるばるとのぼれば書寫の山おろし松の響もみのりなるらむ

第二十八番　丹後世野山成相寺（成合寺）
——聖——
なみのおと松の響も成相に風ふききたるあまの橋立

第二十九番　丹後青葉山松尾寺
——馬頭——
そのかみは幾代へぬらむたよりをば千とせをここに松の尾の寺

第三十番　近江竹生島嚴金山寶嚴寺
——千手——
月ともに波間に浮ぶ竹生島船に寶をつむここちして

第三十一番　近江長尾神耶山長命寺
——十一面——
やちとせやなぎにながきいのち寺はこぶ歩のかざしなるらむ

第三十二番　近江繖山觀音寺
——千手——
あなたふとみちびきたまへ觀音寺遠き國よりはこぶ歩を

第三十三番　美濃谷汲山華嚴寺
——十一面——
よろづ代の誓をここにたのみおく水は苔よりいづる谷汲

今までは親とたのみしおひづるをぬぎて納むる美濃の谷汲

さいじ　（嵯峨天皇）
〔西寺〕山城國葛野郡七條村にあつた巨刹で、今その遺址が殘つてゐる。桓武天皇延曆十五年國家鎭護の爲、勅して東寺西寺を建立せられ、弘仁・天長の頃守敏僧都西寺に居て、東寺の空海と對立した。

さいしょがはら　思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私が爲の修羅出立（反魂香）
〔最勝河原〕十一行本「西所川原」とあれど、最勝河原と書くが正しい。最勝河原は京都三條の西、封疆の外にありて火葬場である。黑川道祐遺事・雍州府志、古蹟門上（愛宕郡）の條に、「最勝河原。在三條西封疆之外、良賤火葬之場也、相傳古最勝寺在二斯處一、今按諸三條河原一者乎、倭俗葬場謂二三昧一、自レ古有二綸旨及御教書下知狀一、職事勸レ之」。

さいだいじ　（女護島）
〔西大寺〕伏見村西大寺にあつて、南都七大寺の一。

さいてうざん　西條山は長尾の陣所、下米の宮は武田の備（川中島）
〔西條山〕信濃國埴科郡松代町より南にある山。

さいねんばう　青布子の西念坊案内なしにすつと通り、……宗味が刻鐘の開眼粗相な非時致します（寄庚申）
〔西念坊〕西念寺の僧。西念寺は大阪高津宮の東方、小橋火屋の北で、本覺寺と西岩寺との間にある。なほこの文は、西念寺に寄進する宗味鑄造の刻鐘開眼供養の案内を、その寺の納所坊主がいつて來たのである。

ざうづせん　峯は木深き象頭山麓に靈河派りて（釋迦）
〔象頭山〕梵語迦耶尸梨沙山といふ。中印度迦耶市の西方にある山で、その形象頭に似たるが故にこの名がある。釋尊の修行說法された所である。

さか　一口二口みな口どぢやうをどりこえ、坂へこすのもさい次第（丹波與作）
〔坂〕近江と伊勢との境にある鈴鹿の坂。

さがのおてら　（兼好）
〔嵯峨釋迦寺〕山城國葛野郡嵯峨村にある清涼寺をいふ。奥林子がここの文は謠曲・放下僧にある文に據つたのである。「ほふりんさがのおてら云々」を見よ。

さがのしやか　高きお山を時の間に麓に下るさがの釋迦（女殺）　如何にも如何にも嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作というてもだんない（生玉心中）
〔嵯峨の釋迦〕山城國葛野郡嵯峨村なる清涼寺をいふ、本尊は釋尊然の入朱將來する所にして、俗間に三國傳來の佛像として有名である。按ずるにこの佛像は、天竺十八年扶南國より梁に獻じ、更に我國に傳はつた。現今の像は、管て火災などの爲、頭部・手足の破損したるを補作したのだといふ。毘首羯磨（四一六頁）をも見よ。女殺油地獄のここの文は、下らの頭註より嵯峨の釋迦といひつづけた。

さかひちやう　淺草上野の花盛、又堺町木挽町のてんつくてんつくてんつくてんつくのぼう（丹波與作）　木挽町堺町の役者からつりをとる衣紋付（寄庚申）
〔堺町〕貞享元祿の頃、江戸日本橋區堺町（上堺町卽ち葺屋町をも含む）には、淨瑠璃又說教の芝居猿若を連ね、都座も市村座もありて、てんつくてんつくの囃賑しくあつた。木挽町には、對島五郎左衞門淨技し、後には山村座の建設を見る。實に堺町木挽町は、江戸に於ける劇場の所在地と定められ、以て天保年間に及んだ。

さかまち　ありやありや東の難波燒が坂町通ひ（生玉）
〔坂町〕坂町は伏見坂町にて、道頓堀芝居の南にある町筋。上等でない茶屋女が多かつたのである。

さかもと　坂本の山王へ日參遊ばし（鰯丸）
〔坂本〕近江國滋賀郡にあり、比叡山の東麓で湖水に臨む、この地に日吉山王の祠がある。

さかわ川　（扇八景）
〔酒匂川〕相模國足柄郡にある川の名。東海道名所記に、「酒匂川、富士のすそ、より流る常は步渡り、冬は土橋をかけらる、此川左のかた一町ばかりにして海に入るなり、追はぎ多し云々」。

さかをり　（振袖始）
〔酒折〕備前國岡山の石關町酒折神社のある地。

さぎさか　（女楠）
〔勾坂〕遲江國磐田郡岩田村・富岡村に亘れる地名。

さくらがは　波に花咲く櫻川（鎌田）
〔櫻川〕常陸國新治郡眞壁郡を流れる川。この

あたりは櫻の名所である。筑波山名跡志に、「櫻川は嶺邊明神の社地より監觸す云々」。「波に花咲く櫻川云々」を見よ。

さくらづか　（賀古教信）

〔櫻塚〕攝津國豐能郡豐中村にあつて岡町の附近。

さくらのばば　二の丸の櫻の馬場（鏡櫂三）

〔櫻馬場〕ここにいへるは、雲州松江城二の丸あたり、櫻樹生茂して馬を調練するに適した空地の稱。この稱のものは方々の城下の地にあつた。

さくらばし　櫻橋から中町下りぞめいたら（天網島）　花のふぶきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の（氷朔日）

〔櫻橋〕大阪堀川に架せる橋の名。曾根崎新地圖について見よ。心中天網島に、「橋の名さへ梅櫻」とあるも、梅田橋と櫻橋とをいうたのである。

さくらね　越中に櫻井（最明寺殿）

〔櫻井〕越中國下新川郡三日市町の邊を櫻井庄といふ。

さくらねのしゆく　心の花も咲きかくる、櫻井の宿に着きけるが（女楠）

〔櫻井の宿〕大阪府三島郡島本村大字櫻井にあり、西國街道の要路に當り、楠公父子訣別の處である。（大正二年一大碑を建てて、楠公父子訣別之所と書し、乃木大將（希典）の揮毫、竣功の日閑院宮殿下台臨ありて、御手づから楠樹を植ゑさせ給ふ。

ざこば　鯉にはあらでざこばの人（淀鯉）

〔雜喉場〕今の大阪市西區江戸堀下通、京町堀上通、京町堀通の各五丁目の西端、百間堀河畔一帶の地をいふ、延寶年間より魚市の立つ所。

ささ　ひけやひけや此車、えいさらささら、ささの葉にしでの旅路の後世の友（反魂香）　初音の里の我ささに露のしらゆふきりかけて、ひけやひけやこの車（小栗判官）

篠に小篠竹塚をきかせたのであらう。木曾路名勝圖會に「小篠竹塚。青墓にむかし照手といふ遊女あり、此墓なりとぞ」。

ささやきのはし　誠を呼きの橋の蜘蛛手に物思ふ格子叩くを（夕霧）

〔呼橋〕備後國にあるといふ。秋のねざめにある引歌に「熊野なる音無河に渡さばや、ささやきの橋忍び忍びに」。

さしてのいそ　（百日曾我）

〔指出磯〕甲斐郡甲府より東北三里ばかり、釜無川に沿うて小邨のあるあたりをいふ。

さしま　平親王が都と聞く猿島の郷へと急ぎけり（蠶物語）

〔猿島〕下野國（今は下總國に入る）猿島郡をいふ。平將門謀反を起して僞官を造り、大臣以下文武百司を置いた所である。

さだ　さだの煮賣を見る事も曲輪でならぬたのしめ野に（淀鯉）　風にひらひら枚方を過ぎ佐太を越え（女夫池）

〔佐太〕佐太は河内國北河内郡守口町の東北にあつて（今疎開村といひ、昔佐太郷といふ）佐太天神のある所である。煮賣は煮賣店で、即ち旅人が食事などちょつと支度して行く腰掛茶屋をいふ。河内名所圖會に「此所京街道にて茶店貸食屋（ちやかしめしや）あり」。ここの文に「たのしめ野」とあるは「誰の占野」「樂野（しめの）」「黐野（しめの）」を掛けたのである。「黐野」は地名部を見よ。

さど　里は三筋に町の名も、佐渡と越後のあひの手を（冥途飛脚）

〔佐渡〕大阪新町内にある佐渡屋町をいふ。蠶簞町の北隣り東西に通ずる町筋で、西なるを佐渡屋町、東なるを九軒町といふ。冥途飛脚、中卷に「橋がかけたや佐渡屋町、越後はて主人とて立寄る妓も氣兼ねせず」とある「通ふ千鳥の淡路町」をも見よ。

さの　雪の寒さのさのみやは、佐野のわたりに着き給ふ（最明寺殿）

〔佐野〕上野國群馬郡佐野村高崎から、山名・藤岡に至る通路に當り、烏川の岸にある。上僧日記に「烏川に至る昔の舟橋の跡とて、その船つなげる纜の木の大なるが一本立てり、今に舟にて渡る」。

ざまのおたび　諸願の種をうへ町の、座摩のお旅に二十二社拜み納むる袖神樂（卯月紅葉）

「座摩の御旅所」の略、天滿橋と天神橋との間の石町にあつて、座摩神社祭神の神幸し給ふ社。攝津名所圖會・四上に、「石町北彌兵衛町にあり、毎歲六月二十二日神輿を社内の神石に安座し神事執行有」と見えてゐる。

さめがね　何時醒が井の水深く、沈みて物を思へとや（小栗判官）

〔醒井〕近江國坂田郡醒井村をいふ。驛は冥土に接し息長川の南岸に沿ひ、磨針峠番場の北一里、柏原の宿より西五十町にある山驛である。

さよのなかやま　小夜の中山無間の鐘撞き當てた福福長者（博多）

〔小夜中山〕遠江國小笠・榛原兩郡の交界にある坂路で、東海道金谷と日坂との兩驛の間にある。この地にある曹洞宗・觀音寺の鐘を無間の鐘といひ、俗に「無間の鐘を撞けば金銀が湧出る」といふ。蓋し無間の鐘とは間斷なく撞き鳴らす鐘といふ意なるを、無間地獄及び無限の金（鐘と韻通じる）の意にとつた謎であらう。國花萬葉記卷八・遠江國の條に、「小夜の中山＝松立こめしひろき山也、山の中五十町、此山より右の方一里ばかりに高き山見ゆる、ここに觀音寺とて寶洞の小寺あり、古へ此寺に無間の鐘とて有し、いつの比何ものの云初しはしらず、世の福裕財德をねがふ者好みて此鐘をつくに、來世必らず無間地獄の業をうくるといへ共、現世にはたちまちうく自在の身となるといひ傳へて、最惡の輩は後來をおそれずとて、こふて此鐘をつくもの多かりしと也、明應の比此寺の住職此鐘をにくみ、世人顚倒の凶器顚趣のなかだちなりとて、かつは寺院の瑕瑾と思ひ、此鐘を取ていみしくもあたり成ふかき井のそこへうづまれしとかや」。「さよのなかやま年たけぬ云々」（四五四頁）、「むげんのかね」を見よ。

さらら　さらら山口一つ橋、渡して救ふ御願力（女殺）

〔讃良良〕往時河内國の郡名、交野と茨田の間

にあつて、住道、四條、甲可、田原、豊野、應屋川の六村あつて、野崎觀音、岡山、山口、一の橋などはこの郡内にあるが、明治二十九年攝郡となつて北河内郡の内に入る。

さるさはのいけ 道に待受け猿澤の池へ投入れ失ひ給はば、誰知る者も候はじ(三世相)

〔猿澤池〕奈良興福寺の南畔下、登大路の北側にある池、天竺の獨猿池に擬して造つたといふ。

さるしま

「さしま」を見よ。

さるはたのしろ (關八州)

〔猿島城〕相模國にあつて、名越の切通の北方朝猿島山の城をいふ。序云、平將門の據つた城は此處ではなくて猿島(さしま)(その條を見よ)である。

さんげんや 如何なる罪も三軒屋には消えて 三軒屋(難波九綱目所載)

浮世の榮華町(吉岡梁)

〔三軒屋〕今の大阪市西區三軒家上の町下の町に當る。

さんごくさかひのいたばし 橋本の宿はづれ三國境の板橋にこそ着きにけれ(淀鯉)

〔三國境板橋〕八幡の西南にありて京街道に當り、山城・河内・攝津の境界にある三國橋をいふ。

さんじふさんしよ

「さいごくさんじふさんしよ」「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

さんじふさんばん とうからの約束三十三番連立ちませう(卯月紅葉)

〔三十三番〕「大阪三十三所」を見よ。

さんじやうさま 所詮わしが死ぬるかかたはにして下されと、山上様へ願をかけたれば(生玉)

〔山上様〕大和國吉野郡にある山上ケ嶽は大峰山脈の北方に位し、吉野群山中第一の靈山である。天智天皇の御宇役小角(役行者)初めて大峰山脈の全嶺を踏破して苦修練行の際、この山上ケ嶽で感得した藏王大權現を小宇を建てて創祀し、聖武天皇の御宇行基菩薩本堂を修理し寶篋の經卷を埋め、醍醐天皇昌泰年間理源大師入峯本堂再建、後水尾天皇元和二年本堂大修理、東山天皇元祿四年修繕したるは梁間八間、桁行九間の大伽藍で、現存せるもの即ち是であつて、藏王權現並に役行者を祭る。嘗山は修驗道極致の靈場として未だに女人禁制で、毎年開山初たる五月八日より九月二十七日までは、兜巾篠懸に身を裝へる山伏姿の信者この靈峯を目指して登山するもの實に十數萬の夥しきに上る。

さんた 昨日の暮方三田から私が父親上られ(今宮)

〔三田〕攝津有馬郡の中央にある地名。

さんづのかは

語彙部(一六一頁)について見よ。

さんとめ さんとめ八郎(國性爺)

印度東境の地(San Thomas)である。和漢三才圖會に「佐牟止母、卽南天竺真臘爾之近國、人品亦同二于真臘一、未レ來二於日本一、其土產遷羅及中華人往往交易來二于日本一」。

さんや しゆじやか三谷もいかな事(淀鯉)

〔三谷〕山谷とも三野とも書いてある、江戸吉原遊廓の地をいふ。三谷の名稱については、淺茅が原の末なれば三野といひ、或は人煙稀で三戸のみあつたによつて三屋というたともいふ。堀あり三谷堀といふ、橋あり三谷橋といふ。このあたりは遊治郎が隅田川より來つてここに船を繋ぎ、吉原に至るまでの道に茶屋船宿軒を連ね、明治初年まで絃聲沸くが如かつた。

さんわう 今日は申の日、山王參りもあるべし(娘)

〔山王〕日吉山王權現をいひ、二十一社ある。比叡山の守護神にして近江國坂本村にある。祭典は毎年四月中の申の日に行はれる。

しあんばし りくぎを糺す芝崎に、思案橋を思ひ出す(今宮)

〔思案橋〕攝陽群談・七に、「思案橋。東橫堀川筋にあり、淡路町一丁目瓦町一丁目の間より東は內平野町に渉る處也」。

じうぞう 「じふさう」を見よ。

しがらぎ 伊吹まきもく木曾信樂の良材寄せられずといふことなく(隅田川)

〔信樂〕近江國甲賀郡東南山谷の地で、栗太郡田上谷と連りて大戸川の水源に當る。

しぎたつさは 鴫立澤の歸るさに、秃小三か誰やらが螢を取つて遊びなば(會稽山)

〔鴫立澤〕相模國中郡大磯より小磯に至る間にある叢林。(四五四頁)をも見よ。

しきなのうら 船は備後のしきなの浦汐待ちしてこそ居たりけれ(女護島)

〔數名浦〕備後國沼隈郡口無浦の別名。

しぎのびしやもん 霞みて見ゆる高嶺こそ信貴の毘沙門にて渡らせ給へ(女楠)

〔信貴毘沙門〕大和國生駒郡にあり、信貴山の東半腹に毘沙門堂あり、觀喜院朝護國孫子寺と稱す。楠正成の母ここに百日詣でて夢想を感じて正成を生んだといふ。

しきみがはら (大鏡)

〔播磨〕山城國葛野郡にある。雍州府志に「櫛が原、在二愛宕山西山麓一」と見え、名所圖會には、北麓になつてゐる。

四國遍路(饒速日天皇)

阿波に二十三所、土佐に十六所、伊豫に二十六所、讃岐に二十三所、合計八十八所の弘法大師の靈地を巡禮することを云ふ。巢林子の書ける筆順によつて其靈地の所在を記せば、

靈山寺(第一番)阿波國板野郡板東村大字板東。

極樂寺(第二番)同國板野郡板東村大字檜村。

金泉寺(第三番)同國板野郡板西村大字大寺。

黒谷寺(第四番)同國板野郡松坂村(舊名犬伏村)大字黒谷。

地藏寺(第五番)同國板野郡松坂村大字矢武。

十樂寺(第七番)同國板野郡福所村大字高尾。

立江寺(第一九番)同國那賀郡立江村大字立江。
鶴林寺(第二〇番)同國勝浦郡生比奈村。
鯖崎寺(第二四番)土佐國安藝郡津呂村室戸崎の南端。
津照寺(第二五番)同國同郡室戸村大字室津。
一の宮寺(第三〇番)同國土佐郡一宮村大字一宮。
清瀧寺(第三五番)同國高岡郡高岡町。
蹉跎寺(第三八番)同國幡多郡清松村大字伊佐。
寺山院(第三九番)同國同郡中村町。
佛木寺(第四二番)伊豫國北宇和郡成妙寺大字則。
菅生山(大寶寺)(第四四番)同國上浮穴郡菅生村。
淨瑠璃寺(第四六番)同國溫泉郡阪本村淨瑠璃寺。
石手寺(第五一番)同國同郡道後村大字石手。
三島(光明寺)(第五五番)同國越智郡宮浦村大字宮浦。
佐禮山(仙遊寺)(第五八番)同國同郡清水村佐禮山。
國分寺(第五九番)同國同郡櫻井村大字國分。
三角寺(第六五番)同國宇摩郡金田村字三角寺。
小松尾山(大興寺)(第六七番)讃岐國(今阿波)三豐郡辻村大字小松尾。
曼荼羅寺(第七二番)同國仲多度郡吉原村。
白峯寺(第八一番)同國綾歌郡松山村大字青海。
屋島寺(第八四番)同國木田郡屋島村大字屋島。
八栗寺(第八五番)同國木田郡牟禮村八栗山。
志度寺(第八六番)同國大川郡志度町。
大窪寺(第八八番)同國大川郡大窪村。

獅子が城　甘輝が在城獅子が城へは程もなし(國性爺)

支那浙江省杭縣に獅子峯といふがあるが、こんな處に甘輝の城があるべきでないから、恐らく假作の名であらう。甘輝は實在の人物で、鄭成功の股肱となり、その謀策に參じて功多く、大擧して南京を討り、瓜州を破り鎭江を取つて金陵に至つたが、清將梁化鳳に敗られて捕へられ、屈せないで殺された。時に永曆十三年。

ししくひやばし　序にて作りし惡心の切で、返報のくろ時は猪喰屋橋思ひ出す(今宮)

〔猪喰屋橋〕攝陽群談「七に、「完喰屋橋。立賣堀川筋にあり。立賣堀北傾三丁目四丁目の間より、同じく南側西之町と中之町の街に涉る處なり」。

ししこく　南海の火浣布・獅子國の馬肝石(國性爺)

〔獅子國〕印度の南端にある聖蘭島をいふ。(匈奴の分れた邯支單于の國をいふのではあるまい)。

四十八が瀨　柳が瀨憂き瀨つらき瀨の四十八が瀨(蘇鐵)

越中國を流れる黒部川の下流の平野に就くや、諸方に分流して數十の分派を成す、世に黒部の四十八が瀨といふ。

四十六所の神　四十六所の神垣に、和光の燈輝けば(日本武尊)

國花萬葉記卷八、遠州神社之部に「四十六所明神。社領八十三石、神主宮內」と。

七里半　若狹口七里半より切つて入れ(女夫池)

越前國敦賀郡愛發村と近江國高島郡鵜川村との間なる有乳山の坂路を七里半越といひ、近江の海津に出る道に當る。

しづはらやま　(雜俳)

〔靜原山〕山城國愛宕郡にあつて、八瀨から鞍馬へ越す峠で、今市原野中と合して靜市野村といふ。黒川道祐編・雍州府志・一、山川門・愛宕郡の條に、「靜原。在二大原草生西一、上賀茂葵祭所用之葵、今出レ自二此處一」。

しどてら　(大纏冠)

〔志度寺〕讃岐國三木郡志度村の海濱を志度の浦といふ、志度寺は其處にある補陀落山燈盛光院をいふ、本尊は十一面觀世音菩薩である。

しなのざか　旅の姿の品濃坂、白旗の宮伏し拜み(大纏虎)

〔品濃坂〕神奈川縣程ケ谷と戸塚との間にあつて、武藏と相模との國境に近く西にある。國花萬葉記、武藏の卷、程ケ谷より戸塚へ二里の條に「信濃坂」に作る。

しのはら　實盛が鬢を洗ひしはそれは篠原池の水(女楠)

〔篠原〕加賀國江沼郡篠原村をいふ。寶永二年五月齋藤別當實盛が手塚光盛に殺された所である。平家物語に、齋藤實盛の遺髮を此所の池水で洗つたら、白髮となつたことか見えてゐる。

しのびのをか　御代長久の岡山を歌には忍の岡とも詠み(女殺)

〔忍岡〕河內國北河內郡甲可村岡山をいふ。勅撰集・法印覺寬の歌に、岡山を忍の岡と詠んである。河內國名所鑑(延寶七年刊)卷五に、「岡山(忍びの岡と古歌によみしは此

處の事也と申傳へ侍る)、慶長十九年甲寅年依二大坂御陣一、五月五日秀忠此山惣本陣、此山に壽命長久の松の大木あり、見性寺山號は少林山と號す、本尊は聖觀音聖徳太子の御作なり、御長四尺六寸あり、(勅後撰)待人になどかたらはで郭公、ひとり忍びの岡に鳴くらむ(法印覺寛)」。「をかやま」を見よ。

しはうじ 「しわうじ」を見よ。

しぶかは 地頭守屋殿澁川に城を構へ反逆の思立ち(聖徳太子)

〔澁川〕河内國にあつた郡名で、物部守屋大連の別業のあつた所。この郡名は明治二十九年廢して中河内郡の一部となる。物部守屋大連の墳は中河内郡誕華村勝軍寺の東田圃の中にある。

じふごしやのちんじゆ 天王寺には十五社の鎭守を一社と伏拜み、扨十四ばん十五ばん(卯月紅葉)

〔十五社の鎭守〕攝陽群談・十一に、「十五神の社。四天王寺院中にあり、所祭十五座也、第一天照太神、第二住吉の神、第三廣田の神、第四熊野三所の神、第五三十川の神、第六白山比咩の神、第七龍守の神、第八生野の神、第九布留の神、第十大原の神、第十一春日の神、第十二稻荷の神、第十三松尾の神、第十四加茂の神、第十五八幡の神、以上十五神也」。

じふごだいじ (女護島)

〔十五大寺〕奈良十五大寺をいふ。拾芥抄に、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、新藥師寺、大后寺、不退寺、超證寺、京法華寺、招提寺、龍興寺、崇鎭寺、弘福寺の十六箇寺を擧げてある。

じふさう じふさう・國島・北南の長柄で男と言はれたる善次郎ぢや(二枚繪)

〔十三〕攝津西成郡中津村大字光立寺の渡津であつて、淀川の北岸に當る。

じふぜんじ 明明後日の御發足、十ぜんじの馬場先にて互に出逢ひ申さんと(十二段)

〔十禪寺〕山城國宇治郡四宮村にありて天台宗の寺。黒川道祐著・雍州府志、寺院門下、宇治郡の條に、「十禪寺。在二四宮村一、本尊聖觀音而聖徳太子所レ作也、明慶年中本院依レ有二靈告一再興之」。

しほじりたうげ 南は甲斐に續きて鹽尻峠、北は越後に隣つて鳥井が嶽(川中島)

〔鹽尻峠〕信濃國東筑摩・諏訪の二郡の交界にある坂路にして、立利火山脈と木曾山脈とに連れる山脈を横斷する中山道の一要路である。

しほみざか さやけき影を汲み入れて、月をやくかと潮見坂、二川越えて三河の國(今川了俊)

〔潮見坂〕遠江國濱名郡白須賀町の東南なる坂をいふ、南は太平洋に面す。

しほみざか 梢にかかる藤代や、岩代峠・汐見坂(反魂香)

〔汐見坂〕紀伊國西牟婁郡にあり、新宮と田邊との間の山深く道狹き難所の坂路を過ぎて、汐見峠に來つて始めて海汐を見るを得られるが故にこの名がある。

しまだ さすがに殘す髪かたち、島田の宿にぞ着き給ふ(大磯虎)

〔島田〕駿河國志太郡島田町の地をいふ、大井川の東北岸にして東海道の名驛。

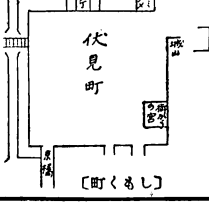
しまばら (氷朔日)

〔島原〕京都の遊女町。京都地圖について見よ。名所圖會に、「島原傾城町は朱雀野にあり、……傾城廓は萬里小路(今の柳馬場)二條の西方三町にて、……」。貞享三年刊、黒川道祐編、雍州府志、九、古蹟門下(葛野郡)に、「傾城町。朱雀西七條北、俗稱二遊女一專謂二傾城一言一笑則傾レ城傾レ國之謂也、始在二六條室町西井西洞院中道寺町一、寛永年中移二今處朱雀西一、方二町餘、其内有三條街衢一、故謂二三筋町一、而外面築レ磨掘レ溝、東一方有レ門、凡入レ夜則不レ許二妄出一入其内一、當斯時一也、肥前島原耶蘇徒蜂起、據二山傍一寨、設二壁壘一、進此遊女町粗似レ之、故世俗稱二島原一、中華青樓肆肄謂二不夜城一、然則城寨之號亦偶相當者乎、於レ今雖二高貴人一間稱二島原一、流風之所レ使、然乎、始六條外荒神河原口幷三條四條之樵木町下粟田口松坂五條及北野等有二遊女町一、近世島原外悉禁レ之」。

しめいのほら あれこそ日本天台山・四明の洞をうつさるる、麓に山王二十一社(藤輪)

〔四明洞〕天台山を見よ。謡曲・鐘平に、「扨あの比叡山は王城より艮に當つて候よのう、……又天台山と號するは龍且の四明の洞をうつせり」。

しめの 佐太の煮賣を見ることも廓(くるわ)でならぬたのしめのに、紅葉たけ



たけ鍋が茶屋(淀鯉)

〔點野〕河内國北河内郡佐太の東北にありて京街道に接する村である。語彙部「たのしめの」(二二三頁)をも見よ。

しもくまち 伏見に來ての淺香山さすが所も極樂を、願へと告ぐる撞木町(反魂香)

〔撞木町〕山城國伏見の遊廓町の名。

しもつら 上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民(蛙合戰)

豐後國北海部郡下北津留村のことか。

じやうど 市振・淨土・歌の秋(藤輪)

〔淨土〕越後國西頸城郡にあつて親不知と市振との間。「歌」といふ地も親不知の東にある。

しやうの 庄野に續く龜山は(田世長清)庄野のふとのお米が俵腰(丹波與作)

〔庄野〕伊勢國鈴鹿郡にあつて、今・莊野村といひ、舊東海道五十三次の一で鈴鹿川の北岸に當る。「ふと(肥滿の意)のお米が俵腰」といへるは、庄野の名物燒米俵の線によつたものである。井上通女撰・歸家日記(正德六年刊)中卷に「庄野といふ、ここに小さき俵をかしげに結びて、燒米すこし賣り入れて、わらはへのもてあそびに賣る、云々」。「ふとのおよ

ね」をも參照せよ。

じゃが　じゃが太郎兵衛（國性爺）ジャバ（Java）を云ふ。マライ語島の一で、今は和蘭領である。其首都バタビヤの舊名をジヤガタラ（Jacatra）と云ふより、同地方をジヤガタラと云ふ。この地を經て傳はつた馬鈴薯をジヤガタラ芋又は略してジヤガ芋といふ。

しゃくし　なばかしゃくしか室の泊か（松風）「さごし」（佐越）の誤、播磨國赤穗郡佐越村をいふ。

しゃむ　暹羅太郎（國性爺）シヤム（Siam）は適字で暹羅と書き、印度支那の一王國である。現今は東西から佛國や英國に壓せられて、領域が次第に減じた。

じゃやなぎ　御廟の橋のあぶなさも、後世の見せしめじや柳や（萬年草）

【蛇柳】高野山奥の院境内、一の橋二の橋の間で、右の方溪流のほとりにある柳樹をいふ。その狀大蛇に似る。俗說に蛇身が大師によつて神度し、化して柳になつたといふ。

しゃるいこく　當寺の本尊は聖德太子の前生、舍衞國にて作り給ひし十一面（賀古教信）

【舍衞國】舍衞は梵語室羅筏悉底（しゅらーばーすちー）の略で、闍門または祇道と譯し、迦毗羅衞城より西北五百里の地。

しゅくつしう　老をかへす良藥、しゅくつしうの反魂樹もこれにはいかで勝るべき（西王母）

【聚窟州】十州記に、「聚窟洲在二西海中州一。此土有二大樹一、似二此國槐一、名二反魂樹一云々」。

しゅくむら（宿村）語彙部一八五頁を見よ。

しゅじゃか　しゅじゃか三谷もいかなこと（淀鯉）

【朱雀】京都朱雀にある島原遊廓をいふ。堀河之水（元祿七年刊）卷下に「朱雀の色里、舊は柳町といふ、いにしへ六條にありし時の名なりとかや」。

じゅふくかく　無量無邊のじゅふくかく（女殺）

【聚福閣】福聚山慈眼寺の觀音堂をいうたのである。この寺は河内國北河内郡西條村野崎にあり、曹洞宗の寺で俗に野崎觀音といふ、本尊は十一面觀音である。別に樂師堂、阿彌陀堂、羅漢堂、鐘堂等がある。「じげんじしゅじやう」（五六九頁）をも見よ。

しゅみ　須彌大海にもまさりたる重忠公の御親切（虎が磨）まづ天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年終に朽ちぬ（西王母）

【須彌】須彌山のことで蘇迷盧山ともいふ。そめいろのやま」を見よ。須彌の四州とは須彌の四方にある國、即ち東弗婆提、南閻浮提、西瞿耶尼、北鬱單越をいふ。日本西王母のこの文は謠曲楊貴妃に、「先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」とあるに據つたのである。

じゅみやうのまつ「をかやま」を見よ。

しようぐんぢざう　或時は勢州に住居、又は濃州信州、折折は京東山、勝軍地藏の隱遁者に因み、詩文など作る由（藤壓歌）

【勝軍地藏】山城國愛宕郡白川村の東北に營えた瓜生山の上にある。石川丈山の舊栖詩仙堂は勝軍地藏の近くにある。

黒川道祐著、雍州府志、四、寺院門上（愛宕郡）の條下に云「勝軍地藏堂。在二上粟田白川村東北山上一、自二村中一有二十八町云坂路一、此堂屬二聖護院一、門主入峯之前日登二斯堂一、修二護摩七箇日一、曾根武天皇都二平安城一時、東山上納二王偶人一、爲二帝都之鎭護一。是號二將軍塚一、勝軍將軍以二其音同一、世人誤二此山一爲二將軍塚一、然將軍塚在二東山上一也、勝軍山上有二佐佐木承額之城址一」。

しようじやうてん（讀讃殿）語彙部一八八頁について見よ。

勝曼（しょうまん）**　振返り見る勝曼の愛染様に、愛敬を祈る芝居の子供衆や**（冥途飛脚）

あれあれ勝曼參りのよれ様達、駕籠が戻るといふ中に（氷朔日）

勝曼院を云ふ。大阪四天王寺西門の北西にあつて、本尊は愛染明王である。岡田俟志編、攝陽群談、卷十二、寺院の部に、「勝曼院。西門（四天王寺）より北西に隔り百步を過たり、愛染明王を安置す、太子此道場に於て勝曼經を講讃あり、因つて院名と成れり、毎年六月朔日明王の像を開、諸人群を成せり」。

「勝曼參り」は勝曼院の愛染明王に參詣することを云ふ、愛染參りとも稱す。毎年六月一日は勝曼院の開帳があるので參詣人が群集した。殊にこの日は遊廓の紋日（もんび）であるによつて、遊女は互に全盛を競うて著飾り、駕籠に乘つて參詣したものであつた。難波鶴（延寶七年刊）に「六月一日、勝曼參」。

しらいし　明け行く空は白石の、海や月夜と紛ふらん（國性爺後日）

【白石】白石島をいふ。瀨戸內海にある小島で備中國小田郡に屬す。

しらいしがしま（國性爺）

【白石島】大隅國大島郡鬼界十二島の一。長門本平家物語に、「俊寬をば白石島にぞ捨置ける。彼島には白鷺多くして白白し、水の流に至るまで波白く見えていさぎよければ、白石島とは云ひける也」。

しらがまち（曾根崎）

【白髮町】大阪の町名。今の新町南通り三丁目邊。大阪巡禮三十二番觀音堂はこの町内にある。攝陽群談、十二に、「大坂巡禮三十一番觀音堂。大坂市中白髮町にあり、云々」。

しらすが（丹波與作）

【白須賀】遠江國にある小邑。二川と新居との間にあつて東海道五十三次の一。

しらひげ（天智天皇）

【白髭】白鬚大明神は近江國滋賀郡打下濱（うちおろし）にあつて祭神は猿田彦命。松林の間に朱塗の大鳥居、高燈籠、桃山風の社殿がある。

しらみね　讃岐には松山・降り積む雪の白峯（隅田川）

【白峯】讃岐國綾歌郡松山村大字青海（あみ）にあつて、松山の高峯である。謠曲、鼓島天狗に「四州には白峯の相模坊」。

しわうじ　まづ筑紫には彦の山、深

き頼みにしわうじ（隅田川）
〔四王寺〕原本「しはうじ」とある。筑前國筑紫郡大野山（又云四王寺山）四王院をいふ。四王院は寶龜五年の勅建といふ、現今は山頂に草庵あるのみであるが、なほ四王院といふ。

しんいろざと 知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と販はしし（曾根崎）
〔新色里〕大阪堂島新地遊廓をいふ。「しんち」をも見よ。

しんうつぼ 柚島源治は新靱ぢやとおしやろ、それなぜに、鹽物町のしたたるたる、然も蠔には骨があるといの（今宮）
〔新靱〕新靱町は今の大阪西區靱中通に當る。新天満町、新靱町は鹽魚商頗る多かつた。

しんきよみづ かげもかがやく蠟燭のしん清水に（曾根崎）
〔新清水〕攝陽群談・十二に、「大坂順禮二十五番觀音堂、東生郡四天王寺村清水の地にあり、……在栖山清水寺と稱す（下略）」。難波九編目・三に、「天王寺より西安井の北なり、山號有栖川山といへり、（中略）洛陽清水寺の別院におはしませし靈像を此所に安置せるとなり、昔此所に地藏菩薩毘沙門天の堂閣左右にならびてましまします、洛陽清水の脇士に表し、此等をも新清水と號せり（下略）」。

しんぐう 新宮の宮居（反魂香）
〔新宮〕紀州熊野三所權現の一なる新宮權現をいふ。

しんくわうじ 信心深きしんくわう寺（曾根崎）
〔心光寺〕大阪高津下寺町にありて順禮二十六番の觀音堂のある寺。攝陽群談・十二に、「大坂西寺町にあり、境内に大坂順禮二十六番の觀音堂あり。」。

しんけ 勝間新家の綿車（三國志）
〔新家〕攝津國西成郡勝間村の東に當り、天下茶屋のある所。

しんごりやう 覺ならべし新御靈に（曾根崎）
〔新御靈〕難波九編目・三に、「新御靈社。祭神未考、北津村平野町にあり、俗說に鎌倉權五郎景正が靈なりと云傳ふるは非なり。」。攝陽群談・十二に、「大坂順禮打留觀音堂。西生郡津村町の地御靈神社境内にあり。」。

しんせいまち この心清町一町のたばねをする牢寄（博多）
〔廣盛町〕京都七本松通り今出川下る町名。

しんたん 震旦四百餘州唐の世第二の主太宗皇帝（大織冠）
〔震旦〕唐土をいふ。謠曲・兼平に、「天台山と號するは震旦の四明の洞をうつせり。」。

しんち 平兵衛殿と新地へ往いて方の借錢（二枚繪）（氷朔日）
〔新地〕大阪堂島新地遊廓。堂島新地は元祿元年に拓け、數年の後に遊廓も出來、難波小橋から田蓑橋あたりまで、美賣屋・色茶屋軒を連ね、南の濱筋から中町、北町、裏町の四筋に分れ、裏町は蜆川を隔てて、曾根崎新地に對してゐる。

しんち 南の風呂の浴衣より今この新地に戀衣（天網島） 新地の天王寺屋小菊殿（女殺）
〔新地〕大阪曾根崎新地遊廓。曾根崎新地は寶永五年に許可されて遊女町となつた。

しんまちばし 時分がら心中の下地か、又義太夫が口の端に、新町橋をかささぎの橋と語りて行く人も（淀鯉）
〔新町橋〕攝津名所圖會・四下に、「西堀北より十二目の橋なり、東は順慶町、西は惣城廓甕篠町の入口なれば、甕篠橋ともいふ、四時橋上に市店ありて賑し。」。四五二頁を見よ。

しんみち 横に切れ行く道筋の、これ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと（生玉）
〔新道〕大阪高津の生玉坂に行く道筋に當る。攝陽奇觀卷之六に、「生玉坂へ行新道□□□開きしゆゑ、生玉新道といふ、今の俗新道と斗り唱ふ。」。

しんめいぐう 心もさそや、神佛てらす鏡の神明宮（曾根崎）
〔神明宮〕天満西寺町の前、曾根崎村領の地にあつて、この神明宮内に祀れる十一面觀音堂は大阪順禮第三番札所。「大阪三十三所」を見よ。攝陽群談・十一に、「太神宮。西成郡曾根崎村にあり、所祭伊勢に同じ、（中略）大坂順禮觀音堂境内にあり。」。同・十二に、「大坂順禮三番、天満西寺町の前、曾根崎村領の地、神明宮社内にあり。」。

じんやうのえ 淨陽の江の生猩猩二匹（大織冠） それを過ぐれば淨陽の江、これ猩猩の住むところ（國性爺）
〔淨陽の江〕今、九江と稱し、支那江西省の開港場である。謠曲・猩猩に、「今日は淨陽の江に出でて、彼の猩猩を待たばやと存じ候。」。

すがたのいけ 髪の結ひぶりなりふり袖もすがたの池の水鏡（三世相）
〔菅田池〕大和國山邊郡二階堂村にある。和州舊跡幽考・卷六に、「菅田池、二階堂村の南菅田村にあり、俗こもが池といふ。」。

すざかののべ すざかの野邊の枯るる程歎き暮させ給ひしを（吉野忠信）
〔朱雀野邊〕朱雀は「しゆじやく」「しゆじやか」「すざか」といひ、舊朱雀門朱雀大路（京都二條城西千本通に當る）の村郊であつて、現今は葛野郡朱雀野村と大内村とに入る。

すなば 色に擲つ金銀は土か砂場の西口や（淀鯉）
〔砂場〕大阪新町遊廓の入口であつて、西の大門のある所。攝津名所圖會・四下に、「砂場。新町西口南の町の地名なり。」。

すは 諏訪へ踊見がい行く行違ひに（博多）
〔諏訪〕肥前國長崎市西山鄕にある神社。諏訪の祭禮は長崎の古名物の一で、九月七日に大波止場假屋の御旅所に渡御式があつて、年番町の子女綺羅を盡して着飾り、劍戟幟蓋等の寶物を捧げ驅しき行列である、九日は還御の日である、殊に七日九日の兩日は踊場も盛である。「からこをとり」をも見よ。

すは 鹿島・三島・諏訪・八幡・愛宕（加增曾我）

〔諏訪〕信濃國諏訪郡にある神社、祭神は健御名方命。

すべいで ぺんがら・あんぼん・すべいで・ぼるねら・なんどいふ外國（國性爺後日）

スエーデン（英 Sweden, 蘭 Zweden）を云ふ。新井君美撰・采覧異言に、「和呼スエウデ、又云スベイデ。東南濱海、西北與諸嶺京地連接、其人類三和蘭一方物與第那瑪爾加一同」。新井君美撰・五事略に「すべいで（日本を去る事一萬三千三百八十里程）、土宜、鋼・鐵、石火矢、錠、船の錨、麻宇、ちやん、材木」。

須磨の一木の松 須磨の一木の松が枝に（松風）

謡曲・松風に、「愛らぬ色の松一木、緑の秋を殘すことのあはれさよ」と見え、また「ある浪邊に一木の松の候を人に尋ねて候へば、松風村雨の舊蹟とかや申候程に」と見えてゐる。

すみぞめ（鑓權三）

〔墨染〕山城國紀伊郡伏見町の北部欣淨寺のあるあたりの里をいふ。次條を見よ。

墨染の櫻の寺 雪にも同じ墨染の櫻の寺の入相に、宿はなけれど里の名は伏見に行暮れ給ひけり（烏帽子折）

山城國紀伊郡伏見にある墨染寺（欣淨寺のこと）をいふ。黒川道祐撰、雍州府志・五、寺院門（紀伊郡）の條に、「墨染寺。在二同所一（伏見）、日蓮宗也。相傳繼染櫻古在二所一。予嘗仁明天皇崩時、遍昭之所レ詠、深草之野邊櫻志心有者、今年計墨染櫻佐計之詠歌、皆指二深草之櫻一而言之、非二必謂一本一也、自レ有二此歌後、此邊曰二墨染一、此寺偶在二其内一、故稱レ之者也」。

すみやま 此邊は醍醐炭山、百姓一揆怖物（三國志）

〔炭山〕山城國にありて、宇治の御室戸山の東北に當る。

すりばりのたうげ すれつ縺れつ磨針の峠遙に見下せば、今こそ秋に近江路の（艸狩）

〔磨針峠〕近江國坂田郡南筥浦村に屬す、峠内に番場宿がある。

すゑのまつやま 容儀帶佩心ばせ十人並を打遥して、末の松山二葉より幾代をこめし中なりし（源氏經）

〔末松山〕本居宣長は、末といふ所の松山なるべしといひてゐるが、されど今は末の松山といふ所、陸中國二戸附近波打峠といふ坂路をいふ。古歌に「しら波の末の松山越すかとぞ見る」（古今集）、「浪越ゆる頃とも知らず末の松山」（源氏物語）、「末の松山浪越さじとは」（百人一首）など見えて、末の松山には、浪越すといふ語を連ねたるものと多い。されば源義經將棊經のここの文も「十人並」に「波」をかけて「波を打越す末の松山」と、陸奥の地名を入れ、松の縁より「二葉より幾代をこめし」と續きつづけたる、例の巢林子の妙筆にして、靈腕髣髴として驚あるを覺える。

すん すん吉九郎（國性爺）

ウンスン（カルタ）のスンを取つていうた口拍子であらう。國名としては思ひ當らぬ。

〔松江〕「あきかぜに艤飼る云々」を見よ。

せいあんじ ちやうあん寺よりせいあん寺（曾根崎）

〔蓼安寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡八町目中寺町東側にあり、境内に大坂順禮十五番觀音堂あり」。「大坂三十三所」を見よ。

せいがうすゐ 西江水の一吸と、日を驚かす計りなり（鎌田）

〔西江水〕西湖のこと。「せいこ」を見よ。鎌田兵衛名所盃のここの文は、その前文に「こぼれ近江の水うみを手に慳けし如くなり」といひ、そしてここにその筆法をかへて「西江水の一吸」というたのである。

せいかんじ なう四つ五つ五文字は歌の中山清閑寺（鰹九）

〔清閑寺〕洛東歌中山の徑路に當り、清水寺の東南にあり、今知積院に屬す。黒川道祐著・雍州府志・寺院門上（愛宕郡）の條に、清閑寺。在二清水山之南播州刺史佐伯公行之所二創建一也、今眞言宗僧守之」。

巢林子のここの文、歌の中の句は五文字なる故に、五文字は歌の中より歌の中山とつづけ、清閑寺は歌の中山にあれば、清閑寺とつづけたのである。

せいぐわんじ 爰こそ彌陀の誓願寺、一七日の大法事めでたかりける（三世相）

〔誓願寺〕京都三條南新京極西にあり、始め都にありて惠隱僧都の開基、桓武天皇遷都後、城州深草の里に遷して、淨土宗に改め、中世に至つて今の地に遷された。

せいこ 風に日覺す西湖の八景、我が八陣の平沙の落雁、漁村の夕陽魚鱗鶴翼、遠浦の歸帆船軍、瀟湘の夜軍も（唐船噺）

〔西湖〕支那浙江省杭縣城西にあつて三面山を環らし、西湖十景と稱して風景明媚の所である。唐船噺今國性爺に「西湖の八景」といへるは、瀟湘八景（瀟湘の夜の雨）を見ること混同した誤であつて、平沙落雁、漁村夕陽、遠浦歸帆、瀟湘夜雨は瀟湘八景中のものである。

せうしやう 「瀟湘の夜の雨」を見よ。

せうぢ 商賣は袖にして、小路隱れの家出のと、聞く度毎にこの伯母が胸には釘を打つ如く（卯月艸）

〔小路〕普時大阪には淀屋小路、浮世小路、衣張小路、お前小路の四小路があつた。これ等の小路には小色茶屋類のものが建ち並んでゐた。殊に浮世小路は新町遊ひの籠龍の立場であつたし、立君も出没し、手代の隱れ宿も多かつた。さればここに「小路隱れ」といへるは、浮世小路に身を隱して色遊びすることをいうたのである。「うき・せうぢ」を見よ。

せき せきにせきより龜山に（丹波與作）

〔關〕伊勢國鈴鹿郡にあつて、坂下と龜山との間。東海道五十三次の一。

せきてら されば關寺の兒達も、是れを佛の關伽桶や（鰹九） 先へ心の關寺に身の羨への恥しき、今の小町屋物七は博多小女郎がならし竹（博多）

〔關寺〕昔、近江國滋賀郡逢坂山にあつたが今は無く、清水町及び關寺町のあたりは昔の關寺の境域かといふ。博多小女郎波枕の二の文は、心のせくを關寺にひかけ、關寺より今の小町屋とつづけ、昔時小野小町が老い衰へて關寺のほとりに住んだこと謠曲、關寺小町などに見えてゐる、以て惚七の末路をきかせたる巣林子の妙筆である。

せきどのゐん　都を隔つる山崎や、關戸の院にぞ着きにける（雪女）

〔關戸院〕山城乙訓郡大山崎の南に在りて古の關址の地。黒川道祐著、雍州府志・九、古蹟門下・乙訓郡の條に、「關戸。在二大山崎南一、俗言、古斯處武一關戸一非歟、又征二商賈一故有二關戸一、古一代主上讓二位後、構二院於斯處一、故有二關戸院之號一、今處處有二數所內裏路等之名一云云」。

せきのしみづ　逢坂の關の清水と聞えしは江州一の名水なり（鰒丸）

〔關清水〕近江國滋賀郡逢坂山の中にある。昔關の清水といはれて歌に詠まれた所は、今はその所定かでないが、大略清水町のあたりといふ。

せきのぢざう　夕ぐれはいそぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏（丹波與作）　伊勢もはやとまらぬ

〔關の地藏〕鈴鹿峠の東麓關宿（伊勢國鈴鹿郡關中町）九關山寶藏寺（通稱關の地藏院）にあつて、岩窟内に三尺七寸の木彫、藥師の坐像で、行基菩薩の作。この寺は眞言宗で仁和寺の末寺であるが、昔は天台宗であつた。東海道名所圖會卷二に、「九關山寶藏寺地藏院、關驛の中間にあり、本尊地藏尊僧正行基菩薩の作云云」。丹波與作に「色こそ道の關の地藏」とあるは、「關の地藏は親よりまし云云」を見よ。また丹波與作に「關の地藏を誓にかけて」とあるは、「そなた櫛田の濁中云云」を見よ。

せきへき　風景聳えし高山は、赤壁とて昔東坡が配所ぞや（國性爺）

〔赤壁〕支那湖北省武昌府嘉魚縣の西七十里、揚子江岸にある赤壁山（蘇東坡が黄州に貶せられ、赤壁に遊んで前赤壁賦、後赤壁賦を作つた勝地は、湖北省黄州府城の西北漢川門外にあつて、赤鼻山ともいひ、今東坡の祠があるといふ）。圖經に「赤壁在二嘉魚縣一、蘇軾指二黄州赤鼻山一爲二赤壁一誤矣」。

せつせん　上求菩提下化衆生をまなぶ雪山の修行（井筒）

〔雪山〕北天竺にあるヒマラヤをいふ。ヒマラヤは雪山の義である。釋尊は雪山に登つて毘羅梵志仙に仕へて雌行された。阿含經に、「此閻浮提雪山北面、頂上有二香山一」。無量壽經鈔註に、「雪山者南州北邊有二九黒山一、黒山之北有二大雪山一、山色白、故譬二白雪一也」。

せと

語彙部「せとの染飯」を見よ。

せとのみしま　此間打つづき夢見惡しく候程に、せとの三島へ參詣仕候（用文章）

〔瀨戸三島〕瀨戸の三島明神をいふ、武藏國久良岐郡金澤にある。

ぜにざ　西に錢座の名のみにて（長町女腹切）

〔錢座〕京都七條柳原町にあつて、大佛の西に當る。

せみのをかは（集玅）（弘徽殿）

〔瀨見小川〕山城國愛宕郡下鴨村の東を流れて糺森の南に至り、賀茂川に入る細流をいふ。

せりふ　山樵も何を思ひに八瀨大原、戀をせりふの里人が（集玅）

〔芹生〕山城國愛宕郡大原の西方、草生・井出の里の古名。ここの文は芹生に雅詞をいひかけたのである。「雅詞」はその條を見よ。

せれふ　せれふしづ原八瀨大原（三國志）

「せりふ」（芹生）をいふ。その條を見よ。

せんぐわんまつ　こうの阿彌陀の影頼む、其誓願の詞の緣、千貫松にぞ着にける（丹波與作）

〔千貫松〕伊勢國河藝郡高野尾の東、豐國（とよくに）にある鏡掛松をいふ。女大名丹前能・五に、「十二三のこめろと見えしがたばこのみのみ、鏡かけ松とはどこぞいなといへば、彌龍の男指さし、あの松をこそ云なり、むかしより中比迄の道者、太神宮へ參る數鏡一文二文掛置き、いつとなく千貫つもればとて、今は千貫松といへり、いづれ海道の名木、是より津までは今少し、云云」。

せんじゆね（女護島）

〔千手井〕比叡山の西谷三所の名水の一で、俗に辨慶水と云ひ、如何なる旱魃でも水涸れないといふ。

ぜんだうじ　脩善導寺りつとうじ（曾根崎）

〔善導寺〕攝陽群談十二に、「大坂天滿東寺町にあり、境内に大坂巡禮八番觀音堂あり」。

せんだのきのはし　此脇差はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見えぬ沙汰（女殺）

〔梅檀木橋〕攝陽群談・七に、「梅檀（せんだん）の木橋。大和川筋にあり、此所蘆波橋の下より流水二つに別（わか）れて、中之島の南北にあり、南を表川といひ、北を裏川と稱す、其表川筋を指て土佐堀川筋と云ふの處也、南は北濱二町目と過書（とうしよ）町世俗會所（かいしよ）町の中間にあり、北は土中之島町の頭に渉る道路也」。蘆波九籟目、上四十九の國參照のこと。

せんにち　お名殘惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬこと、其千日が迷惑と、木綿付鳥に別れ行く（冥途飛脚）　すぐに引立て引出す、果は千日千人聞き（女殺）

〔千日〕大阪南區蘆波河原町千日をいふ、今は繁華繁閙の地なれど、往時は葬人の刑場墓地で髑髏鬼火青く、千日寺の鐘聲陰慘を極めた。

せんふうばう　宜風坊の北、あらたに栽うる所千金の吟、二葉より馨しく（天神記）

〔宜風坊〕手安京左京永昌坊と淨風坊との間にして、即ち四條大路と五條大路との間にある。宜風坊の北は嘗ての生れた地である。「宜風坊の北あらたに栽うる云云」を見よ。

せんぼんまつ　土地の名さへ大時雨、染むる甲斐なきつれなさの、千本松にぞ着きにける（虎が曆）

〔千本松〕駿河國駿東郡千本松原。

せんりがたけ　出合ふ所は唐土に隠れなき千里が竹にて相待つべし（國性爺）

〔千里が竹〕千里茫茫たる竹藪をいふ。諺に「虎は千里の藪に棲む」など云ふより假作した地名。

そうじやうがだに　巌峨峨たる僧正が谷の木の葉をばつと吹立て（十二段）

〔僧正が谷〕山城國愛宕郡鞍馬山西北にある。黒川道祐著、雍州府志に「僧正カ谷。在二鞍馬山西北一。相傳、斯山大天狗僧正房、於二斯處一傳二劍術於源牛若一、故斯谷岩面多有二劍撃之痕一云、今見レ之石面條目、自似二刀劍之疵痕一。凡石有二數品一、方解石以二鐵鎚一破レ之、則大小各其形爲レ方、洛北鳴瀧砥石破レ之、則悉爲レ片、斯谷石亦自然有二條目一、是地氣之所レ使レ然也、何爲二劍撃之痕一乎」。

そが　直に打てば一里半、廻れば三里、曾我・中村歩ませ行くも身はここに（加増曾我）

〔曾我〕相模國足柄郡下曾我村をいふ。

そでしのうら　（振袖始）

〔袖師浦〕出雲國八束郡竹矢村大字島濱の中の海に面せる海濱をいふ。檜嶋談に「袖師とは出雲郷の海邊馬形といふあたりなりと指點して人教へぬ」。

そでのうら　袖の浦の靜屋敷（最明寺殿）

〔袖浦〕相州鎌倉稻村が崎の西に連る海濱をいひ、形袖の如きによつて名付くといふ。鬱の屋敷はここにあつたのではないが、鬱の舞の袖の縁によつてかくいつたのである。

そでふるやま　天武天皇袖振山にて奏でさせ給ひつる、その韓玉の乙女子が歌の調子に候と（三世相）

〔袖振山〕大和國吉野郡吉野山にあり、天女舞樂の故事ある地。本朝月令に、「五節舞者淨御原天皇（天武天皇）之所レ製也、相傳天皇幸二吉野宮一、日暮遥レ望有レ興、彼國之間、前山之下、雲氣忽起、髣髴如二高唐神女一、髣髴應レ曲而舞、〔中入天曙、他人無レ見、髣レ袖五變、故謂二五節一云云」。

そとがはま　（日本武尊）

〔外ケ濱〕陸奥國東津輕郡に屬する青森灣西沿岸一帶の稱。

そとのふどう　頼む佛の御名とへば、我をば外の不動様（心中萬年草）

〔外不動〕高野山兒が瀧の上にある。通念集に「本尊阿遮羅明王は昔覺鑁上人の作らせ給ふといへり」と見えてゐる。

そとばたに　心細しやそとばたに、ここな塚はと引留め問へば（萬年草）

〔卒塔婆谷〕紀州高野山刈萱堂の附近。

そねざき　風しんしんたる曾根崎の森にぞ辿り着きにける（曾根崎）　**扨六番は曾根崎の宮の木立も、いつごろよりか名立てがましき天滿屋おはつ、よそにきくさへ身にしじみ川**（卯月紅葉）

〔曾根崎〕曾根崎にある天神の社を曾根崎の宮といふ。〔曾根崎〕、寶永元年刊。心中大鑑所載）その森を曾根崎の森といふ。「扨六番は曾根崎の宮」とあれども、浪花寺社巡二十二社廻りの條には、「九番曾根崎村天神社」と見えてゐる。「しんち」、「大阪三十三所」をも見よ。

そのはら

〔園原〕信濃國下伊那郡智里村の古驛路にあたり、旅人救濟の伏屋を設けて、行人を休息せしめた處といふ。「ありとは見えてそのはらや云云」を見よ。

そめいせん　是は去年の取木にて、名も高き屋に劣らぬ色をそめい山、此方の花境は三國一富士や（浦島）

〔蘇迷山〕「そめいやせん」、〔蘇迷盧山〕の略。次條及び「めいろ」をも見よ。

そめいろのやま　一日養育の御恩はそめいろの山よりなほ高しとこそ承はる（卯月調色）

〔蘇迷盧山〕須彌山をいふ。其高さ八萬由旬、大海中にあつて金輪の底の上に據り、最頂に帝釋天王が居るといふ。「しゆみ」をも見よ。

そめがは　袖は櫻に染川や、筆も及ばぬ繪に書きて（國性爺）

〔染川〕筑前國筑紫郡にある川で、御笠川の水源をなし遠初川ともいふ。

だいかくじ　さとらぬ身さへ大覺寺（曾根崎）

〔大覺寺〕攝陽群談・十二に「大坂西寺町（世俗下寺町）にあり、境内に大坂順禮廿七番の觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

だいきやうじ　東はいかに大鏡寺（曾根崎）

〔大鏡寺〕攝陽群談・十二に「大坂天滿東寺町にあり、境内に大坂巡禮六番觀音堂あり」。

たいすふ　これよりたいす府へ渡らんと（國性爺）

〔泰州府〕今の浙江臨海縣。〔國性爺合戰〕に見える地名には作者假作のものが多いから、悉くは記さない）。

だいちやうじ　南無あみ島の大長寺（天網島）

〔大長寺〕網島にありて、淨土宗の寺院。大阪圖につきて見よ。攝陽群談卷第十二・寺院の部に「大長寺。東生郡網島町にあり、淨土宗門黒谷金戒光明寺末院なり」。

だいぶつじま　篠塚次郎左を見る時は大佛島を思出す（今宮）

〔大佛島〕安治川と古川との間、富島町をいふ。攝陽群談・卷五、島の部に「大佛島。西成郡安治川にあり、始新堀と稱す、元祿戊寅年依二公命一、市店と成て富島と改稱あり、此島貞享の始南都大佛殿建立大勸進、沙門淨生院公慶

上人此島に於て小室を結び從僧（無伯）を置て、西國方より入津の諸船及京大坂堺近郷近里を勸む、擅越之輩毎月手ゝ是會合して、其功力を盡て法施を集む、時人號て大佛島と稱す、市店と成るの後、東生郡上鹽町の側に遷移す、誠に故緣の所不應なり」。篠塚次郎左衛門は正德頃大阪の俳優で大男であり、其藝も實惡に長じたれば、南都大佛の大きいのと、實惡の藝を見ては佛の功力を願ふ意をもふくめて、大佛島を思出すというたのである。

だいぶつてんのくわんじんしよ　命の捨場ぞと大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりにけり（重井甸）

愛は奈良の東大寺大佛殿の勸進所（賓庚申）

〔大佛殿勸進所〕大阪生玉の馬場先にあつたもので、高津上鹽町即ち現今の生玉神社から東北、谷町九丁目夕顏寺の南接地あたり。この勸進所は貞享の初め南都大佛殿再建勸進の爲に、大佛島に勸進所を建てたが、その地市店となつたので、元祿年間この地に移轉した、その時は上鹽町はまだ田圃であつた。「だいぶつじま」をも併せ見よ。

だいほうじ　此度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも（賓庚申）

〔大寶寺〕大阪生玉寺町にあつて淨土宗の寺院。攝陽群談卷十二、寺院の部に、「大寶寺。同所（生玉寺町）次にあり、無量山阿彌陀院と號す、開山無譽國阿上人、本尊彌陀（三尺五寸）安陀彌の所造也、淨土宗門知恩院末寺なり」。

たいまやま　わたらば中やたい麻山、佛法最初の法隆寺（三世相）　霞絕え絕え當麻山（吉岡染）

〔當麻山〕大和國北葛城郡なる當麻寺をいふ、曼荼羅寺とも稱し中將姫の古跡である。「わたらば中やたい麻山」は、古今集・秋下部の歌の、「たつた川紅葉みだれて流るめり、渡らばにしきなかや絕えなむ」の中の句に、當麻山をいひかけたのである。

だいゆうじ　一番に天滿の大融寺、この御寺の名も古りし昔の人も、氣の融の大臣の君が、鹽竈の浦を都に堀江漕ぐ、潮汲み舟の跡絕えず（會根崎）

〔大融寺〕西成郡北野村にあつて、佳木山と號し、弘法大師の開基で嶢峨天皇の勅願寺である。源融が承和年間鐘樓七堂を建立したによつて、其謂をとつて大融寺といふ。本堂の本尊は千手觀世音で、大阪巡禮第一番の札所である。會根崎心中のここの文は、第一番の札所大融寺をいうて、其寺に緣故ある融大臣をいひ、「氣の通るお融にかけた。氣の通るとは粹な意）融左大臣が河原院を京都の六條川原に造り、毎月朝三十石を難波より汲み運んで池に入れ、海の魚貝等をすましめ、陸奥鹽竈の浦をうつして海士の鹽屋に煙々立てて、鄕遊のたよりとされたといふ。「都に」と京都をいひ、「堀江」と難波の地をいひ、「潮汲み舟」といへるも、この故事に據つたのであつて、「舟の跡絕えず」と大阪の繁盛にいひつづけたのである。

たいれい　われ台嶺の雲を淺ぎ（用文章）

〔台嶺〕解纜部、「台嶺の雲を淺ぎ云云」を見よ。

だいれんじ　さて金胎寺大蓮寺（會根崎）

〔大蓮寺〕攝陽群談十二に、「大坂西寺町（世俗下寺町）にあり、境内に大坂順禮二十九番の觀音堂あり」。

たうのはま　それかと人にたうの濱（鰹嶋天皇）

問ふに唐濱をいひかけたのである。唐濱は堺濱とも書き、土佐國安藝郡安田村にある。この地に四國遍路（その條を見よ）第二十七番竹林山神峯寺がある。此邊の山谷に石蛤貝がある。

だうみやうじ　字陀の郡を立出でて願の道も明けき道明寺へと修行あるく（吉岡染）

〔道明寺〕大阪府南河內郡道明寺にある、眞言宗の尼寺で本尊十一面觀世音は菅公の作だといふ。この寺は往古菅公の舅覃峯尼住し、菅公も屢來詣された。現在の寺號は僧長・秀吉の再建にかかり、境內幽靜淨閑である。

たうりん　桃林・赤壁・かれ金山（唐船噺）

〔桃林〕尙書武成篇に「歸馬于華山之陽。放牛于桃林之野」とあつて、蔡註に「桃林、今華陰縣潼關也」とある。

たかがをか　（會稽山）

〔鷹岡〕駿河國富士郡の村。

たかくわんおん　竹筒でも致しまして關寺が高觀音へお供して（反魂香）

〔高觀音〕近江國關寺をいふ。近江國逢賀郡大津の西南、逢坂山の北麓の上にある。

たかさご　名も塔伽沙古島、これ福徳の領内にて元の名は大冤國（唐船噺）

〔冤〕〔憲〕憲濱の異稱。華夷通商考卷三に「大冤（たいくわん）＝或憲濱、又二名アリ東憲（とうれい）、塔伽沙谷（たかさこ）」憲濱鄭氏紀事卷之上に、「憲濱與外沙堤名爲崑身、自三大崑身一至二七崑身一、起伐相望、狀如二龍蛇一、復有二北線尾臨耳門一爲二憲濱門戶一、我朝之往賀二販其地一者、占二據北線尾一、呼二其地一爲二塔伽沙古一、實高砂」。

たかしのはま　難波の浦の春風に高師の濱や住吉の（鎌田）

〔高師濱〕和泉國泉北郡にありて、堺市の南、濱寺臨海の松原をいふ。

たかしま　佐佐木源氏の旗頭高島の屋形とて（反魂香）

〔高島〕近江國にある郡名。

たかしやま　去年十月高師山のお狩場（賓庚申）

〔高師山〕三河國渥美郡と遠江國濱名郡とに跨る丘陵にして、二川と白須賀との間にあつて、古來海道の名勝地として知られてゐる。

たかだち　忠衡が人を遣はし高館を追拂うてのけんすと（源義經）

〔高館〕衣川館ともいふ、陸中國今の平泉驛の北凡六町、金鷄山東北に連る丘上にあつた、今は北上川近く流れてゐるけれども、その昔は遙東を流れてゐたのである。

たかたのてら　早明方のお八つの太鼓の撥は高田の寺（丹波與作）

〔高田寺〕伊勢國河藝郡一身田村（いっしんでん）にあつて專

山停車場から一丁、眞宗高田派の本山であつて專修寺といふ。宗祖見眞大師の開基、本尊は聖德大師の作。一刀三禮阿彌陀佛である、もと下野國芳賀郡大内庄柳島にあつたのを寛正六年にこの地に移した。第十四代尭秀上人堂宇を再建したもの即ち現在の堂宇である。

たかつき　島上郡高槻の家の子（女殺）

〔高槻〕攝州島上郡にある城下の町。高槻の家の子とは、當時の高槻城主永井飛驒守眞清の家臣なるをいふ。

たかとりやま　手に据ゑて見んたか取山（天智天皇）

〔高取山〕大和國高市郡の南境に峙つ山で、一名優韓山といふ。

たかのがは　さされ小あゆののぼりのぼるや高野川、西に清瀧鳴瀧山（雜好）

〔高野川〕大原八瀬の里を過ぎ、叡山の麓を流れて高野村に出で、紙河原にて加茂川に合ふ。雍州府志一、山川門・愛宕郡の條に「高野川。水源出自若狹國、歷三大原八瀨一、過叡山麓一、出高野村、依鰲三高野川一、斯川於三紙社南一合流、故紙社謂三河合一也。

たかまのやま　現在親をよそにのみ、高間の山の櫻染め（加增實我）

山郭公餘所に見て、高間の山をや過ぎぬらん（國性爺後日）

〔高間山〕高天山とも書く、大和國南葛城郡葛城村高間をいひ、葛城山の上方に當る。この地古來櫻の名所にして、風雅集・卷二、春中部、前中納言匡房の歌にも「白雲の八重立つ峯と見えつるは、高間の山の花盛りかも」。拾遺集・夏部、「なけやなけ高間の山の郭公、このさみだれに聲た惜しみそ」。

たかやす（井筒）〈三世相〉

〔高安〕大阪府下中河内郡高安村一帶の地は古の高安の里である。在原業平の高安通ひは伊勢物語などにも出でて名高く、また歌枕の名所である。

たかやすの大明神　高からず安からず、中を取つて河内の國高安の大明神（女殺）

高直と安直とを高安大明神にいひかけていうたのである。「高安大明神」は河内國中河内郡南高安村にある。

たからでら　寶寺かや槌屋のおかね、打出し突出し新造禿（千疋犬）

〔寶寺〕山城國乙訓郡山崎の寶積寺をいふ。鬼林子のここの文は、寶寺の什寶に打出の小槌あるによつて、金を打出す縁で「槌屋のお金打出し突出し」といひ、突出女郎をかけて新造禿といひつづけたのである。都名所圖會卷四に、「寶寺は觀音寺の南にあり、補陀洛山寶積寺といふ、……、當寺の什寶に打出の小槌あり、聖武帝の御宇鎭神捧げしなり」。

たかをやま　太秦戸無瀨高尾山（雜好）

〔高尾山〕山城國葛野郡にある。

たくろく　背黃帝たくろくの野戰を表しまか大將某と名づけ（源義經）

〔涿鹿〕支那太古時代黃帝嬪氏が蚩尤と戰つて之を滅した地。

たけだ　伏見・竹田の賤があきなふ餅求めて（西王母）

〔竹田〕山城國紀伊郡竹田村。

たけのうちたうげ　我から狹き浮世の道、竹の內峠袖濡れて、岩屋越とて石道や（冥途飛脚）

〔竹內峠〕河內國河內郡駒谷村大字飛鳥から二上山の南を越えて、大和國北葛城郡に出る山路。

たけのした（女楠）

〔竹下〕駿河國駿東郡足柄村の大字、足柄峠の西口で、酒匂川の上流に臨み、小山停車場の西南一里ばかり。

たけべ　近江に建部（日本武尊）

〔建部〕近江國栗太郡勢田村字神領にある建部神社（今官幣中社）。

たさゑもんばし（重井筒）

〔太左衛門橋〕大阪道頓堀に架せる橋。この橋筋にも色茶屋があつたのである。

ただす　折つて手向の賀茂ただす（賀古教信七墓廻）

ただすの森（弘徽殿）

〔紙〕山城國愛宕郡下賀茂社を紙宮といひ、其森を紙杜といふ。雍州府志に、「下賀茂社。謂二紙宮一、或作二只洲一、高野川與二賀茂川一於二此社南一合流、故或稱二河合神一、又稱二糺社一、或謂所二祭丹塗矢一、然賀所二祭大巳貴神一也」。

たちの　武藏に穗坂小野の牧、甲斐にたち野（源義經）

延喜左馬寮式に「武藏國。石川牧、由比牧、小川牧、立野牧」と見えてゐる。鬼林子が「甲斐にたち野」といへるは、武藏の立野の牧を思ひ違ひしたのであらう。

たちの　それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出來揃ひ（歌念佛）

〔立野〕現今は龍野といひ、播磨國揖保郡にあつて山陽鐵路に當る町。

たちばなでら（聖德太子）

〔橘寺〕大和國高市郡にあつて聖德太子の像を安置す。寺傳に聖德太子この殿で誕生されたといふ。

橘の小島が崎（鰒九）

宇治川岸にこの名の所があつた。源平盛衰記、高綱宇治河を渡す條に、「橘より引下りて、橘小島に馬を控へ、ここは水は早けれども、遲淺なり、渡せ渡せ」。

たつたがは　濃き紅や薄紅葉、龍田川と疑はる（加增實我）

〔龍田川〕大和國平群郡にあつて、源を北生駒村に發し大和川に注ぐ。文武天皇この川の紅葉を詠じ給ひてより、龍田川の紅葉の歌古歌に多い。「ならの葉の帝の御目には云々」を見よ。

たつたん　李踏天が引入れにて韃靼夷の奴となり（國性爺）

〔韃靼〕俗に滿洲を韃靼ともいひ、その人を韃靼人とも稱した。（詳しう云へば、韃靼は明の北にある大國（大靼今の蒙古の地）であつて、元の亡んだ時その宗族漠北に走り、元の國號を去つて韃靼と稱した。可汗本雅失里（ぼんしり）は明及び瓦剌（うらつ）に攻められて斃へたが、達延汗（たつえんかん）立つに及んで國力強くなつて明を苦しめ、清興るや、其諸部皆臣隨した。昔秣鞨と稱したもの

は清の興起した滿洲の祖先と同人種であるから、江戸時代には韃靼も靺鞨も滿洲も同じものに云はれてゐた。

たどのうら　漸う辿り多度の浦、身の毛亂せし大島毛（隅田川）

〔多度浦〕讃岐國多度郡の北邊海に面する濱遊をいふ。多度郡は明治三十二年那賀郡と合併して仙多度郡といふ。

たねがしま　（國性爺後日）

〔種子島〕大隅國佐多岬の南東にあつて、大隅群島中で最東最大な島。

たはらもと　生國は大和田原本、幼少で二親に離れ（双蝶蝶日）

〔田原本〕大和國磯城郡田原本町。

たふのさは　塔の澤とはあれやらん（虎が磨）

〔塔澤〕相模國足柄郡湯本村にある。

たへまやま

「たいまやま」を見よ。

たまがは　木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵付けず死にたや（萬年草）

〔玉川〕紀州高野山の奥の御廟橋の下を流れる川をいひ、俗に瀉水であるといふ。風雅集・卷十六・雜中部の弘法大師の歌に、「高野の奥の院へ參る道に、玉川といふ河の水上に毒蟲の多かりければ、この流れを飲むまじき由を示し置きて後ゝゝ侍りける」と詞書あつて、「忘れても汲みやしつらむ旅人の、高野の奥の玉川の水」。

たまさはむら　煌く露の玉澤村、闇はあやなし梅澤村（會稽山）

〔玉澤村〕伊豆國田方郡錦田村の大字で、箱根山西の幽谷で三島町の東一里にある。

玉島川（たましまがは）　玉島川にあらねども小鮎さばしるせぜらきに（大磯虎）

〔玉島川〕肥前國松浦郡にある。神功紀に「夏四月北到二火前國松浦縣一、而進二食於玉島里小河之側一、……因以號二其河一曰二梅豆邏一、今謂二松浦訛也、是以其國女人每當二四月上旬一、以レ鉤投二河中一捕二年魚一、於レ今不レ絶、唯男夫雖レ釣不レ能レ獲レ魚」。「玉島川にあらねども云云」をも見よ。

たまつくり　つらぬく汗の玉造（曾根崎）　あをのくかほにあたる日を、そでてかざしの玉造、稻荷のみやゐこもまた（卯月紅葉）

〔玉造〕大阪城南の郷名、ここに稻荷社ありて倉稻魂神（うかのみたまのかみ）を祭る。城内に大阪順禮第十番の觀音堂がある。攝河泉名勝に「大阪城の南方の郷名、神代の昔玉祖命此地にて玉を造られしよりの名とも、又聖德太子の四天王寺を營まれし時ここにて瓦を造られしよりの名ともいふ。攝陽群談・十一・十二に、「玉造稻荷官。大阪城の南玉造にあり、祭神倉稻魂神、此社地に大坂順禮第十番の觀音堂あり」。

たまみづ　玉水のあたりに着きにけり（雪女）　六郎左衞門高貞やうやうに切りぬけ、玉水のあなたなる筧がもとに着きしかど（三世相）　玉水近き山城の、村は上田に家富みて（賽庚申）

〔玉水〕山城國綴喜郡井手村にあり、奈良街道の一驛で、玉水の井とて有名なる井があつた。

たみののしま　（生玉）

〔田蓑島〕「雨に着る田蓑の島」を見よ。

たむのみね　（大織冠）

〔多武峯〕大和國磯城郡にあり、談山神社ありて鎌足公の墓ある記る。境内に有名なる十三重塔あり、社殿麗はしく風景絶佳にして隅西の日光の稱がある。社殿の後の山を登り行けば奥の院と稱して鎌足公の墓所である。多武峯（とうのみね）とは談山の峯の義にして、中大兄皇子が鎌足公と入鹿誅滅のことをこの所にて談合し給うたによつて起れる名。

たるゐ　刈穗の庵の夕雫、垂井の宿はこれとかや（小栗判官）

〔垂井〕美濃國不破郡にありて、今垂井町といふ。

だんどくせん　（鐘迦）（弘徽殿）（吉岡染）

〔檀特山〕印度にある山で釋多落迦山の訛。西域記に「釋多落迦、舊曰二檀特山一訛也」。悉達太子十九歳にして出家し檀特山に入られた。

ぢうぐわんじ　十七番にぢうぐわん寺（曾根崎）

〔重願寺〕攝陽群談・十二に、「重願寺。谷町筋八町目寺町にあり、境内に大坂順禮十七番觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ちか　唐土船を松浦川、港もちかの浦風に（國性爺）

〔値賀〕肥前國東松浦郡の村名。

ちくしやうもん　法の如く畜生門の刑に行はれば、雨は早速降り申さん（以呂波）

〔畜生門〕京都東寺にあつた土穴の門をいひ、南大門から二十間程東にあつた。好色一代男卷八、一盃たらいで繼里の條に「今日は東寺の觀影供……、畜生門の邊に暮うたせ」。畜生門の刑は、往昔東寺で破戒僧等に行つた刑罰である。この以呂波物語に「抑も畜生門の流刑と申すは、科人の衣裳を剝ぎ、別火にて燒葉て、額に犬といふ文字を書き、東の土門を開いて追ひ拂ふ掟なり」とある。北村季吟撰・寶藏記封卷二に、「東寺南大門二十間ばかり東の穴門を畜生門といへり、衆徒もし非法のふるまひあるものは、袈裟衣を剝ぎて此門より追放す、佛弟子として破戒無慚のありさま畜生同等といふ心なるべし」。

ちごがたき　今宵散り行く初櫻、稚兒が瀧とぞ涙ぐむ（萬年草）

〔稚兒瀧〕高野山中・花折坂の下一丁餘、一條の瀧斜に懸壁に懸つてゐる。

ちごがだけ　望みは高き百餘丈兒が嶽（嵯峨天皇）

〔兒が嶽〕國花萬葉記卷十四上、「讃岐國佛閣之部、八十一番白峯寺の條に「此寺に兒が嶽と云て百餘丈の嶽あり」。

ちぢわむら　ちぢわ村の數右衞門と蔕旗に書き記す（蛙合戰）

〔千千石村〕肥前國南高來郡にある村名、千千石灘の灘頭である。

ちどのしま　南に高く霞かかるはちどの島なり（國性爺）

鬼界十二島の一なるちどりの島のことか。舞

之本・流黄が島に、つしまは十二島、はじめは白石が島、ちどりが島、硫黄が島云云」。

ちどりがふち（嬬）

〔千鳥淵〕山城國葛野郡嵐山の麓、大堰川渡月橋の上手。

ちもり　傾城奉公に身を賣つて、即ちちもりの色里に小磯と申し候由（三國志）

〔乳守〕堺港南半町の東にあつて、南北に通ずる街の名で、遊廓がある。

ちやうあんじ　菩提の種やうへ寺町のちやうあん寺（曾根崎）

〔長安寺〕攝陽群談・十二に、「東生郡八町目中寺町西側にあり、境内に大坂巡禮十四番觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ちやうかうだう（女護島）

〔長講堂〕嘉應元年後白河法皇の御建立律宗で、舊六條殿内にあつた、後に土御門に移し、現今は京都下京區下寺町にあつて淨土宗。

ちやうふくじ　鶏も二番に長福寺（曾根崎）

〔長福寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿西寺町にあり、境内に大坂巡禮五番觀音堂あり」。序に云、攝陽群談、及び攝陽九綱目の二書共に、長福寺の觀音堂を大阪巡禮五番とすれど、曾根崎心中の觀音廻りのここの文には、二番となつてある。「大阪三十三所」を見よ。

ちやうぐちう　ちやぐちう左衛門（國性爺）

〔漳州〕支那福建省に屬し、今の龍溪縣はその舊地。華夷通商考（寶永五年刊）卷二に「漳州」に「チヤグチウ」と傍訓してある。

ちやぼ　占城次郎（國性爺）

チアンパ（Champa）を云ひ、漢字で占城と書き、現今の佛領印度支那交趾ノ首府サイゴン附近の地をいふ。

ちやるなん　ちやるなん四郎（國性爺）

印度のチヤウル（刹丁兒）國をきかせたものか。茶字篇といふ名はこれから起つたのである。

ちゆうざんじ　「なかやまでら」を見よ。

ちりふ　みやへあがれば池鯉鮒へ四里（丹波與作）

〔池鯉鮒〕三河國碧海郡にあつて鳴海と岡崎との間。東海道五十三次の一。

ちよのふるみち　向ふは千代の古道に、續きておろす嵐山（三世相）　**治まる千代の古道や、嵯峨の天皇のしろしめす安國**（嵯峨天皇）

〔千代古道〕山城國葛野郡嵯峨にある名所。雍州府志・古蹟門下、葛野郡の條に「千代の古道＝在二澁取池西南一、是則自レ京所レ赴二于嵯峨一而是道路二上道、傍レ北所レ行也、隣原定家卿千代古道跡登米氏之詠歌、人所二遍識一也」。

つうてんの紅葉（女夫池）

〔通天紅葉〕京都東南にある東福寺は、東に惠日山を負ひ溪の兩邊楓樹が多い、此處を通天といふ。秋季の末滿山の紅葉溪に映じて風景絶佳である。

つきかげ　月影の阿佛屋敷（最明寺殿）

〔月影〕相州鎌倉極樂寺の境内の西二三丁離れて月影が谷がある。この奥に阿佛尼の屋敷跡がある。十六夜日記に「東にて住む處は月影が谷とぞいふなる、浦近き山もとにて風いと荒し、山寺の傍なれば、のどかにすごくて浪の音松風絶えず」。

つきのわ　然らば某月の輪山の樵路より先を拂つて御供せん（三國志）

〔月輪〕山城國愛宕・泉涌寺城及び東福寺の東方なる山谷の名。

つくばね

「筑波嶺の峯より云々」（四四五頁）を見よ。

つくま　髪染むる藥なと仰せに任せ腰元達、思ひつくまの鋪墨を油に溶きて揉み附け（井筒）

〔筑摩〕近江國坂田郡筑摩に祀れる神で、文德實錄に、「仁壽二年二月授二近江國筑摩神從五位下一」と見えてゐる。往昔四月一日に祭禮を行つた。伊勢物語の歌に「近江なる筑摩のまつりとくせなんつれなき人の鍋の歟見ん」とあつて、新羅に「鉢の神の祭には、女の一生のあひだあへる男の數ほど、鍋をかづきてわたるといふことのあればなりけり」と見えてゐる。巢林子のここの文は、思ひ附くに筑摩をいひかけ、筑摩祭に被く鍋に附着せる油烟を油で溶いて揉み附けるとの意。

つげのがはら（井筒）

〔都介野原〕諸國名所に原とも書いてある、今の大和國山邊郡都介野村の原。

土山の田村堂（つちやま）　心は鬼神と出たれども、土山の田村堂でつい平らげてのけらるる（丹波與作）

土山は近江國甲賀郡にある。東海道名所圖會卷二に、「田村明神祠。土山の驛の東にあり、驛中東の方の生土神とす」。近松のこの文は、謠曲・田村に「鬼神の上に亂れ落つれば、ことごとく矢先にかかつて鬼神は殘らず討たれにけり」、とあるを應用したのである。「三十三匁が賣おいて云云」（四一一頁）をも見よ。

鼓が瀧（國性爺）

國花萬葉記卷十四下、肥前國中名所之部に「鼓の瀧。古來より和歌に讀まれたるは、かならず此國の瀧の名なり」。

つつみのちやや　たつた今堤の茶屋で大阪へ戻り駕籠の咄で聞いた（宵庚申）

〔堤茶屋〕淀川堤の水茶屋。

つづらやま　つづら山には辻放下（大織冠）

〔九折山〕奈良の若草山を云ふ。大和名所圖會に「若岬山。三笠山の北にならびたる山也、延寶記曰、ここを皆人つづらを山といふは九折（つづら）といふ事にや」。

つなしきのてんじん（天神記）

〔綱敷天神〕筑前國博多郡綱場天神をいふ。

つののまつばら　角の松原蔭暗く、暮れぬさきよりまづ暮れて（天神記）

〔角松原〕攝津國武庫郡津門村にある。

つむらのしんごりやう　夢を津村の新御靈（卯月紅葉）

〔津村新御靈〕大阪二十二社の一。攝津名所圖會・四上に、「御靈宮。船場平野町西龜井町、南は津村町の間にあり」。祭神三座＝天照太神、八幡宮、鎌倉權五郎景政。境内に大阪三

十三番札所觀音堂がある。巢林子のここの文は、夢うつつといふ熟語の夢うつが夢をつゐに其昔似てゐるから、夢を津村にいひつけたのである。

つるがはし　冬年も鶴が橋のお婆婆へ大きな鏡に目黒添へてすゑられた（タ鬚）

〔鶴橋〕今大阪の東郊奈良行電車の鶴橋驛あたり。

つるさき　機織やその藤袴破るなと、鳴くか茨のつるさきに、野飼の駒のやさしくも（用明天皇・二枚綸）

〔鶴崎〕豊後國大分郡にあつて、大分市の東二里十町、大野川口に當り、今鶴崎町といふ。巢林子のここの文は、茨が蔓のやうに延びるから、茨の蔓というて鶴崎にいひかけ、この少し後の文に「べう」（別府温泉であつて、べふゐ犬の鳴聲べうにかけた）といへるも、何れも玉世姫の父眞野の長者の居る豊後の地名を書き込んだのである。

つゑつきざか　杖突坂・小谷・大谷打過ぎて（博多）

〔杖突坂〕伊勢國三重郡内部村にある山路。

てうせんじ　紋に揚羽のてうせん寺（曾根崎）

〔超泉寺〕攝陽群談 十二に「大坂天滿東寺町にあり。境内に大坂巡禮七番觀音堂あり」。巢林子のここの文は、揚羽の蝶を超泉寺にいひかけたのである。

てごしがはら　今は夜ごめに引きかへて、てごしがはらはほの暗く（今川了俊）

〔手越河原〕駿河國安倍川の西岸に當り、往時は海道の一驛であつた。

てつかいがたけ　我が爲の鐵杤が嶽鴨越（川中島）

〔鐵杤嶽〕攝津國武庫郡六甲山脈の一にして、源義經が下りて一の谷に攻入りたる鵯越の險がある。攝陽群談 巻三 山の部に「鐵杤峰。俗傳云、鐵杤仙は吐し氣現二我相一仙境を出でて暫く此峰に遊膄す。因て鐵杤の名あり、或は勇猛剛力の樵夫鐵杤を以て山に入り、歌駄の薪を荷ふ、時の人彼を號て鐵杤と稱す」。

てつるせん　金剛須彌山・てつるせん、峰の嵐に落葉して（加增賀我）

〔鐵圍山〕須彌山の外方を繞る鐵山。俱舍論・十一に、「於二金輪上一有二九大山一、妙高山王處レ中而住、餘八周匝遶二妙高山一、於二八山中一前七名、内、第七山外有二大洲等一、此外復有二鐵輪圍山一、周市如レ輪、圍二一世界一」。

てつわう　**寺・御幸・鉄屋・富・柳・堺町・間の東は玉敷の、御垣にかこふ五つ緒の車、烏丸・両が室・衣・新・釜・西・小川、油・醒が井・堀川の**（攝津波鹿）

京都駈通りの町名を順にいうたのである。寺は寺町、御幸は御幸町、鉄屋は鍛屋町、富は富小路、柳は柳馬場通、間は間町、東は東洞院、車は車屋町、両は両替町、室は室町、衣は衣棚町、新は新町、釜は釜座、西は西洞院、小川は小川町、油は油小路、醒が井町と堀川通。

玉敷の御垣にかこふ五つ緒の車といへるは、車に車屋町をきかせたにて、他は文飾である。「五つ緒の車」につきてはその條を見よ。

てんがい　てんがい、般若坂（女護島）

〔鰲磯〕奈良東大寺西門の邊をいふ。坊目考に「尋尊僧正七大寺巡禮記曰、天平之朝、瑪瑙礎碓在二東大寺食堂西屋一、是高麗國所レ貢也、謂二其西門一曰二鰲磯一云云」。

天下茶屋　この所に茶店をしつらひ天下茶屋と名付け、往來の旅人に一服の茶を與へ、今日の悦びを末代諸人にあやからせよと御誂あろ（三國志）

攝津國東成郡今宮より住吉に通ずる路にある。攝陽群談 巻十、古地舊屋の部に「天下茶屋＝西成郡勝間村の東の新家にあり、豊臣秀吉公堺政所入御の時、此茶店に於て休息し給ひてより世に天下茶屋と稱す、今人地名の如くせり」。

てんじんのもり　神の昔も念力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ着きにける（女楠）

〔天神森〕河内國河内郡道明寺村土師神社（道明寺天滿宮）のある森をさす。明治十年明治天皇大和行幸の際、畏くも駐蹕あらせられ給うた所。

てんじんばし　福徳に天滿神の名をすぐに、天神橋と行通ふ（天網島）

〔天神橋〕攝陽群談 七に、「大和川筋天滿橋の西にあり、南は京橋六丁目、北は天滿十一町目に渉り、西成郡南長柄に出る處也」。

てんたいざん　魂は震旦の天台山に逍遙ある（最明寺鰹）　あれこそ日本天台山、四明の洞をうつさるる、旃に山王二十一社（蘐齋胎内捃）

〔天台山〕支那浙江省台州天台縣の西にあり、隋の智者大師この山に天台宗を唱へた、よりて智者大師を天台大師と呼び、その宗門を天台宗といふ。我國にては傳教大師唐より天台宗を傳へて比叡山に弘敷す、よりて比叡山をまた天台山と稱す。

てんぢくのやま　轉軸の山おろし（萬年草）

〔轉軸山〕天竺山とも書き、弘法大師廟の背後に三峯ある中の西にある山。

でんぼ　八つの太鼓がでんでんでんぼ、あとがやとやの伊丹へいけ田（氷朔日）

傳法であらう。大阪府下西成郡傳法町あたりの地をさす。

てんまばし　この世を捨てて行く身には、聞くも恐ろし天滿橋（天網島）

〔天滿橋〕大阪天神橋の東に架せる橋で、谷町筋に當る。ここの文は、天滿に天魔をいひかけたのである。

てんもくざん　天目山の森の蔭、高坂彈正原五郎左右に別れ（川中島）

〔天目山〕甲斐國東八代郡の東北隅なる山で、南は笹子嶺に連り初鹿野山の支峯である。

とうじ　瓜實顔の旦那殿、東寺から出た人さうな（丹波與作）　東寺の水菜を一走り取寄せ（蝶蛾天皇）

〔東寺〕京都東寺あたりは往時瓜の名産地なれば、瓜實顔の縁で「東寺から出た人さうな」

と言うたのである。雍州府志（貞享三年刊）六に「甜瓜。倭俗寡真之、所所有之、然東寺邊其味爲勝、世稱「東寺眞桑」。水菜（京菜のこと）もこの地の名物である。雍州府志・六に、「水菜。東寺九條邊專種之、元不用糞磽、而引入流水於畦間耳、故稱「水入菜」。

東大寺大佛殿の勸進所（菅屋甲）

「だいぶつでんのくわんじんしょ」を見よ。

どうてい　洞庭の秋の月（百合若）

〔洞庭〕洞庭湖は支那湖南省にあって、長さ二百里、廣さ百里、華陽、南縣、安鄉、漢壽、況江、湘陰の各縣が之を環ってゐる。方輿勝覽、岳州洞庭湖の註に「在巴陵西、西吞赤沙、南連青草、橫亘七八百里、日月出入於其中」。洞庭の秋の月は瀟湘八景の一である。「瀟湘（せうしやう）の夜の雨」を見よ。

とがくしやま　餘吾將軍平の維茂、戸隱山の下紅葉色に引かれて梓弓やたけ心をくみて知る、所は山路の菊の酒何かは苦しかるべき、一樹の緣の假枕夢とも分かぬ鬼女の形（五人兄弟）

〔戸隱山〕信濃國水内郡にあり、裾花川の源に當る。謠曲・紅葉狩に、平維茂戸隱山で上臈の酒宴せるに遇ひ、共に酒に醉うたが、忽ち今まで女であった者が鬼神と變じたので、維盛これを退治することを作ってある。狩我五人兄弟のここの文は謠曲・紅葉狩に據ったもので、「所は山路の菊の酒何かは苦しかるべき」とあるも謠曲、紅葉狩にある文である。

ときはのさと（大靈）

〔常盤里〕京都府下葛岡の西南、今の太秦村に屬し常盤谷をいふ。

ときはのさと（加增曾我）

〔常盤里〕信濃國下水内郡にあって飯山町の北。

ときはまち　常盤町の從弟が所に預けて置き（胥庚申）

〔常盤町〕伏見立賣町を延寶八年に常盤町と改稱した。大阪東區伏見兩替町と鐵屋町との間にあって東西に通じ、昔は一丁目から四丁目まであった。

とくあんつづみ　ついでを頼みの乘合船は借切るよりも得菴堤、共に舳を漕付けて（女殺）

〔得菴堤〕鮫川の上流寂屋川の北、得菴村の堤防をいふ。ここの文は「借切るよりも德」を「得菴堤」にいひかけたのである。「をかやま」の條に載せた地圖に就いて見よ。

とくねぎ　李郎耶兄弟追付き奉り、とくれぎの城攻め取られ（三國志）

後漢三才圖會卷六十四、朝鮮地圖に「東萊」とあって、「トクネギ」と傍訓してある。東萊は慶尚南道にあって釜山の北。

とこのしま（女護島）

〔理髮島〕周防國都濃郡富田町の南にある島。

とこのやま（小栗判官）

〔床山〕鳥籠山とも書き、近江國犬上郡にある。木曾路名所圖會卷一に「鳥籠山＝いさや川の上にあり、俗に鍋尻山とも云ふ。

とどきのふち　汝は急ぎ若を連行き、松川の奥とどきの淵へ沈めにかけよ（伊豆日記）

「まつかは」（松川）を見よ。

とどろきのごぼう（田世景清）

〔轟の御坊〕京都清水寺にある坊名。黒川道祐著、雍州府志・卷四、寺院門上（愛宕郡）の條に、「清水寺。寶龜十一年坂上田村丸草＝創伽藍、安置八尺千手觀音。大同年中諸堂成、延鎭爲＝開基＝云云、目代謂＝慈心院＝、俗俗監吏謂＝目代＝、僧家借＝其名＝而稱＝之、慈心院始在＝轟橋前＝、故或曰＝轟坊＝云云」。

とどろきのはし　轟の橋　とどろかす（天智天皇）

〔轟橋〕奈良東大寺興福寺の間にあって、雲井坂の南。大和名所圖會卷二、添上郡の條に「轟橋＝東大興福兩寺の中間、押明の門の南にあり」。國花萬葉記・卷三、大和國添上郡の條に「轟の橋＝東大興福兩寺の中間押明の門の南邊に有、同ならびに雲ゐ坂」。

とどろきばし　轟橋の松影より鷹の羽の鏑印（持統天皇）

「とどろきのはし」を見よ。

となせ　太秦戸無瀨高尾山（雜部）

〔戸無瀨〕山城國葛野郡嵐山の下なる淺瀨をいふ。

とびた　どうで野枝が飛田ものと（舞根駒）　**たばぶれながら行く道の、跡は飛田に立つ煙、夢か現か亡き人の**（三國志）

〔飛田〕鳥邊野または鳶田とも書いてある、大阪府西成郡今宮村にありて大阪七墓の一である。四天王寺史に「鳥邊野、處在＝今宮村之南、天王寺之墓所、太子所封也」。蘆分船（延寶三年刊）卷二に、「飛田。火葬の煙絶えやらず、白骨は地よりも高く淚の雨はしきりに、古塚の草葉の露と消えにし人々を數へ見れば誰あり二殘るべき」。攝陽群談・卷九、塚の部に「鳶田墓所。東生郡今の鳶田地にあり、四天王寺邊に近里の諸人死を葬の處也」。

とぶひの（大織冠）（出世景清）

〔飛火野〕奈良縣添上郡春日野の北向荒神の所を云ふ。舊迹幽考に「飛火野。東大寺の前に北向荒神と云ふ社あり、その所を云ふ」と見えてゐる。

とほざとをの　とほざとをのや阿部野の原（三國志）

〔遠里小野〕攝津國東成郡鯰江村（すまのえ）の大字。萬葉集に「住吉の遠里小野の眞榊もて」とある地で、今ヲリヲノと訓む。

とまり　さぞな呼子の浦過ぎて、誰にとまりの磯なれば（國性爺）

〔泊〕筑前國糸島郡前原村大字泊。

とみのをがは　川音水はしる富の小川を打越えて、斑鳩の御所へぞ參りける（聖德太子）

〔富小川〕大和國生駒郡の北境、北倭村高山より發し、南に流れて佐保川に合す。この川鳥見（とみ）の地を流れるを以て富小川と稱す。斑鳩（いかるが）を流れる川。

外山（とやま）（井筒）

「秋經」を見よ。

とよくの　足も輕輕しもひろき、とよく野とこそ樂しみし（丹波與作）

〔豐國野〕伊勢國河藝郡高野尾村の東、篪田と

り板本に至る間にある。此處は鏡掛松があつて太神宮の遙拜所である。

とよらのてら 雲をめぐらす車坂、豐浦の寺は霜降りて（大織冠）

〔豐浦寺〕大和國高市郡飛鳥村にあつた寺で元興寺のこと。

とりかひ 天晴駿足御馬ざふ、いづれの牧より曳かれしぞや、みづの御牧か鳥飼か（源義經）

〔鳥飼〕攝津國三島郡鳥飼村味生村の地は往昔の牧野である。

とりべやま あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ち去らで、住み果てぬ世の定めなや（雅好）

〔鳥部山〕東山なる阿彌陀峯の麓にあつた火葬場の地。文化增補の京羽二重大全卷四に「鳥部山。愛宕郡蓮花王院の東にあり云云」。徒然草・第七段に、「あだしのの露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物の哀れもなからむ」。

とりるがだけ 南は甲斐に續きて關尻峠、北は越後に隣つて鳥井が嶽（川中島）

〔鳥居嶽〕信濃國西筑摩郡にある山にして、木曾川奈良井川の分水嶺である。

とをざとおの

「とほざとをの」の見よ。

とをち 龍田の川の卯の花や、十市の里の夏衣（雜田）

〔十市〕大和國磯城郡にある。もと「とほち」と云ふ。和名抄に「止保知」とある。

とんきん 東京兵衞（國性爺）

〔東京〕トンキン（Tongking）は印度支那の最東北の平野を占める王國で、古の交趾の地に當り、現今は佛國の保護國である。

どんぐりのつじ どん團栗の辻を出づれば建仁寺（女腹切）

〔團栗辻〕國花萬葉記卷一、山城洛外之町の部に、「どんぐりの辻子。けんにん寺町さがるてにて、西へ官川町・右がき丁へ出る。京羽津根卷二、洛中辻子の條に、「頓栗辻子（どんぐりのつじ）＝建仁寺町四條下西へ宮川筋石垣町へ出る所、この頓栗の辻子中程南行所新道といふ」。京都地圖なども見よ。

とんだばやし 泣くか笑ふか富田林の群鴉（冥途飛脚）

〔富田林〕河內國南河內郡にある町名で、大阪を距る約九里。東高野街道の驛次である。

ないけうばう 其日も既に午の刻限昨日の頃ぞといふ間もなく、内教坊の後より嘶き出づる惡馬の相形（關八州）

〔内教坊〕茶園の南、左近衞の北、大宿直の東にある坊で、女樂及び踏歌を調習する處である。百寮訓要抄に、「内教坊。女の舞人の候所也、今も踏歌の舞妓などは内教坊より參る、女の舞樂せさする所なり」。

ながいけ 漲り渡す長池や（雪女）夜は長池の水の泡、水の淀みに我としても（淀鯉）

〔長池〕山城國久世郡にあつた驛名で大和街道に當る。昔は驛の附近に長池と稱する池があつた。羅白鼇撰・山州名跡志卷十六、久世郡の條に、「長池。池の形南北三町餘、東西二町許云云、今埋て田となす」。

なががは 戀の中川なかむかし、御方違の御幸町（大原問答）

〔中川〕東に賀茂川、西に桂川が流れ、その中間にある京極川を中川といふ。巢林子のこの文は光源氏の君が方違に中川なる空蟬の家に行き、空蟬と繼伸となつたといふ故事によつたもので、このことは源氏物語帚木の卷に見えてゐる。

ながはし 月は早渡ぞめして中橋や（重井筒）

〔中橋〕今は相合橋といへど昔は中橋といつた。心中重井筒の作られた時は新築中と見えて、心中重井筒の中卷に「なんと中橋架けた、欄干渡すばかり、春は町中渡りぞめ」と見えてゐる。

ながほり 是よりすぐに長堀まで參れば（冥途飛脚）

〔長堀〕大阪新町遊廓の南手の川。

なかまち 神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や（氷朔日）變る瀨枕沈む淵、思ひ二つの中町や（二枚繪）

櫻橋から中町あたりぞめいたら、どこぞでは紙屑ふみにじつてくりよ（心中天網島）　中町の方が騷がしう（氷朔日）

〔中町〕堂島新地の中町をいふ。堂島新地は元祿七年に開拓されて程なく遊女町となり、南の濱筋から、中町、北町、裏町の四つの通り筋がある。なほ大阪地圖（元祿頃）に就いて見よ。

なかむら 直に打てば一里半、廻れば三里曾我中村（加增曾我）

〔中村〕相模國足柄郡中村縣。

なかやまでら 欲生我國の提灯に不取正覺の興を照して、中山寺へと送りしは宛ら安養寶國に生れつべしと（賀古教信）

〔中山寺〕攝津國川邊郡の中央なる中山（長尾山とも云ふ）の南麓にある有名な寺。賀古教信七墓廻第三に「抑當寺（中山寺）の本尊は、聖德太子の前生舍衞國にて作り給ひし十一面、觀世菩薩の兩尊諸尊、巍巍たる靈地なり」と云へるは、伽藍開基記に「紫雲山中山寺、用明天皇二年開基……、殿中安二十一面觀音三像、蓋本國觀音三十三所之一也、其中尊乃太子先世生舍衞國時所鐫、每二鐫而三禮者而靈應特甚、左右二尊卽本國名匠運慶湛慶奉敕命而造、至今儼然處于殿上」と見え、攝陽群談にも伽藍開基記のこの文が引かれてゐる。

ながら その名は言はじ名を問へば、父はながらの田地持（二枚繪）

〔長柄〕攝津國西成郡豐崎村にあつて天滿の北、淀川の中津川に分流する所に當る。「その名は言はじ云云」（四七七頁）「ながらのはしばしら」（四七九頁）、を見よ。

ながゐのさと 人日づつみの長居の里、浮名流すな河内路に（天智天皇）

〔長居里〕攝津國住吉大明神の南、松の並木道に沿ふ里。攝陽群談卷九、里の部に「長居里

＝住吉郡住吉村ニアリ、能因法師歌枕攝津國ノ名所ニ比ス」。

なぎさのゐん　禁野を過ぎてなぎさの院（輯九）

〔渚院〕河内國北河内郡牧野村大字枚方の古の渚院のあった所であらう。伊勢物語に「今狩する交野の渚の院の櫻殊に面白し」。名所圖會に「渚院は今觀音堂となす、堂前に五本櫻とて枯朽して僅に存せり、歌に渚寂と詠ず」。

なこそのせき（門出八島）

〔勿來關〕磐城國石城郡にありて、現今其址は鐵道常磐線勿來驛より十五丁の距離にある。

なごやがやつ（最明寺殿）

〔名古谷谷〕相模國鎌倉郡にある。

なすの（門出八島）

〔那須野〕下野國那須郡中央の曠原の汎名。

なち　岸打つ波は補陀落や那智は千手觀世音（反魂香）

〔那智〕紀州熊野三所權現の一にして、千手觀世音を安置し、西國三十三所第一番の札所である。

なとりがは　呼ばれて粋の名取川、今は手代と埋木の、生醬油の袖したたるき（曾根崎）

〔名取川〕陸前國名取郡を流れる川の名であって、この所から埋木を産す。觀聞志、名取川の條に「世稱ス埋木灰ニ者、幾三河中沈木用之、其色紫赤、於三歌詠一亦賞三吟之一者多」。曾根崎心中のここの文は、名取川と云うたから、次に埋木と云うたのである。歌謠部「我が繼路は絲なき三味ゃ云々」（五一九頁）をも見よ。

ななせがは　都に通ふ鳥羽暖、其片里の七瀬川（女夫池）

〔七瀬川〕山城國紀伊郡深草の西南に在る。

ななせのよど　幼遊も暗じく、七瀬の淀に行く水も、昔の影や隱れん坊（國性爺）

〔七瀬淀〕肥前國東松浦郡玉島の小川七瀬の淀のことであらう。萬葉集・卷五・雜歌部に「松浦川七瀬の淀はよどむとも、我はよどまじ君をし待たむ」、とある松浦川も玉島の小川をさすものだといふ。

七つのみち　七つの道四つの海（三國志）

〔七道〕北海道の設置されない以前、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道をいふ。

ななのやしろ　どう取の祈は四三五六社大明神、八かう七の社（女殺）

〔七社〕近江國滋賀郡比叡山なる日吉神社を山王七の社と云ふ。二十二社式に「大宮三輪同體、二宮國常立、聖眞子八幡、八王子國狹槌尊、客人菊理姫白山、十禪師天津彦彦火瓊瓊杵尊、稻荷、三宮豐聰耳尊、已上七社」。

ななばか（賀古教信）

〔七墓〕攝津國にある七墓即ち、長柄、蒲（かもを）、小橋（はせ）、梅田、千日、高津、飛田の七墓地をいふ。（七墓制は後後までも流行しだんだんに弊害を生じたので、天保十三年の御觸に、毎年千日參り七墓制と稱し、男女の混じ夜間鉦鼓を打つて參詣するを禁じたことが見えてゐる。）

なにはこばし　あれ見や難波小橋から舟入橋の濱傳ひ（天網島）

〔難波小橋〕攝陽群談・七に「蜆川の頭にあり、此所は淀大川筋難波橋の下、（もと）大江橋の上手より北に曲り西に下る處也、東西共に堂島新地一丁目の渉にあり」。

なにはのごばう　これは難波の御坊の御普請の奉加銀、今此處に有合せた（冥途飛脚）

〔難波御坊〕大阪東區北久太郎町四丁目にあろ、大谷派本願寺別院にして世に難波御堂或は裏御堂または南御堂といふ、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛である。

なにはばし　世は何事も難波橋、よしとあしとの堺筋、中に立つたる賤が身は、不便と思へ備後町（氷朔日）

〔難波橋〕淀川に架せる橋で、天神橋の西。（大阪地圖を見よ。ここの文意は、世は何事も何やかやと世評にのるといふを難波橋にいひかけ、善評惡評の境界（堺筋にかけた。堺筋は大阪地圖を見よ）の中に立つ與兵衛が身は不便と思へといふのであって、不便と同韵備後町にいひつづけ、備後町はお龜與兵衛の家のあった北久太郎町と堺筋との中間にあるによって、中に立つたといひ、お龜與兵衛が情死せうとして通った町である。

なは　夜さの泊はどこ泊ぞ、なばかしやくしか室が泊か（松風）

〔那波〕播磨國赤穗郡那波村をいふ、今山陽線鐵道停車場がある。

なべがちやや　紅葉たけたけなべが茶屋（淀鯉）

〔邊茶屋〕河内國北河内郡枚方の神遙山の茶屋をいふ。井原西鶴撰、一目玉鉾に「枚方＝此所舟改の番所、山に御茶屋あり」とありて、その圖を載せてある。

なまづがは　なまづ川よりゆらゆらと野崎參りの屋形船（女殺）

〔鮫川〕大阪網島と片町との間を流れる川。（大阪圖を見よ）。昔時大阪より野崎觀音に參詣する者、多くは鮫川より船を浮べて川を上つた。攝陽群談卷三・川の部に、「鮫江川。東生郡大阪市店の東にあり、南は片町東町、北は野田町といふ、所傳、漁者是に網す、鮫魚多きに因れり」。

ならびのをか　太秦戸無瀨高尾山雙の岡（兼好）

〔雙岡〕山城國葛野郡妙心寺の西にある。

なるたきがは（娥）

〔鳴瀧川〕宇多川の上流で、般若寺の南にある急湍をいふ。

なるたきやま　高野川西に清瀧鳴瀧山（兼好）

〔鳴瀧山〕山城國葛野郡にある。

なるを　とどろとどろと遠く鳴尾の海かと聞けば（今宮）なるをざき（三國志）

〔鳴尾〕攝津國武庫郡武庫川口の砂嘴で、昔は湾邊であったが、年々沼沙堆積して洲をなし、現今は海まで二十四丁ある。

なれあひ　丹後の名所が見せましたい、なれ合切戸天の橋立（浦島）

〔成合〕丹後國與謝郡府中村の北、世谷山なる

成合宇の風景を指す、橋立を下瞰し與謝の國樽を望み、風景絶佳である。

なんきん　花を見せたる南京の時代ぞ盛り盛んなる（國性爺）

〔南京〕もと金陵と云うた地で、明の太祖ここに都した、成祖の永樂十九年北平に都を遷してこれを北京と稱してより、爾來金陵を南京と云ふ。思宗の崇禎十七年北京は清の爲に陷落したので、今南京を以て首都としたのである。

なんぐう　美濃に南宮（日本武尊）

〔南宮〕美濃國の西部にある南宮山（南麓は養老郡牧田村、東北は不破郡官代村）にある南宮神社（今國幣中社）。

なんざん（聖德太子）

〔南山〕周の都豐鎬の南なる終南山をいふ。「のこんの菊籬のもと云云」（五二四頁）を見よ。

なんせんぶしう（以呂波）

〔南瞻部洲〕南閻浮提の新譯であって、吾人の住する世界の總稱。

なんだいもん（女護島）

〔南大門〕奈良東大寺南大門。

なんばのいまみや　見たや見せたや難波橋、難波の今宮これからは（卯月紅葉）

〔難波今宮〕今宮の北にある廣田社をいふ、祭神天照大神荒魂。浪花寺社巡二十二社廻りの條に、「十五番、今宮森廣田社」。

なんぬんだう（女護島）

〔南圓堂〕弘仁四年藤原冬嗣の建立で、奈良興福寺にある。本尊は不空絹索觀音で、西國巡禮札所第九番である。圓堂といへど、實は八角の堂である。

にくわつだう（女護島）

〔二月堂〕東大寺にあって絹索院といひ、天平勝寶年の勅諚によっての造營で、安置の佛像は今國寶となってゐる。

にしのおほてら　絲よりかけて白露を玉にもぬける柊の柳とつられたる西の大寺これかとよ（大織冠）

〔西大寺〕今大和國生駒郡伏見村西大寺といふ所にあり、稱德天皇の創建にかかる。「いとよりかけて白露を云云」（四三五頁）をも見よ。

西の京　醫者の名もぎえんのもの、始めは西の京の道へんと申す醫者の藥で、どうへんにあった所を、昨日から三條の元喜と申す醫者でめつきり元氣が見えました（浄瑠璃）

奈良右京域内の地。（現在の奈良市は左京の地。）（近松のこの文に「三條」とあるも奈良の町名。また「どうへん」は同篇で、同卽ち同樣の義で、病氣容體相變らず快方に向はないことの意にいうたのである。季瓊日錄・延德二年二月十六日の條に「禮部之返答亦同樣也」と見え、太平記卷二十四、依三山門訴訟公卿衆議の條に「山門訴申何篇哉」とある、何篇も何の義で、何の調れの點である）。

西の洞院　重れて家根でさかつたら、四つ足括つて西の洞院へ流してくりよ（大經師）

京都の町名（京都地圖を見よ）。「西の洞院へ流してくりよ」は、厄拂の詞の「打拂うて西の海へさらりさらり」の口調に據ったのである。

にしのみや　宿を惠美順の神垣や、西の宮にぞ着き給ふ（松風）

〔西宮〕「あしたたぬ神の昔の西の宮」の條を見よ。

にしのをか　有明かたぶく西の岡、樫原の土民の軒（嵯峨天皇）

〔西岡〕山城國乙訓郡の別稱。樫原は丹波街道に當る。

にじふにしやまうで　ふるきみやこやなにはがた、二十二社まうでいそがん（卯月紅葉）

〔二十二社詣〕大阪内の二十二社に詣づること。卯月の紅葉の二十二社及び其參拜の順序は、浪花寺社巡又は難波九繩目等に揭げる所と異同がある。卯月の紅葉のは卽ち、一番―川崎權現。二番―天滿の天滿宮。三番―堀川戎。四番―北野天神社。五番―北野神明宮。六番―曾根崎天神。七番―津村の新御靈。八番―座摩大明神。九番―博勞町仁德天皇の宮。十番―三津八幡。十一番―難波の今宮。十二番―安居天神。十三番―天王寺十五社。十四番、十五番―牛頭天王（天王寺南門と東門とにある）。十六番―生玉社。十七番―北向八幡。十八番―高津社。十九番―朝日神明。二十番―玉造稻荷社。二十一番―内平野町神明宮。二十二番―座摩の御旅所。

浪花寺社巡、難波九繩目ともに、朝日神明よりはじまりて高津社に終る、又川崎の大權現、天王寺の牛頭天王及び座摩の御旅所を除きて、玉造の森の宮、難波村祇園社及び安倍野海道口の崇峻天皇を加ふ。

にのくちむら　もとは大和新口村勝木孫右衞門といふ大百姓の一人子（冥途飛脚）

〔新口村〕大和國葛城郡多村新口にして、三輪町の西一里餘。

にのせむら（嵯峨天皇）

〔二瀨村〕山城國愛宕郡にありて、市原の北で、鞍馬道に當る。

にほのうみ（歸九）

〔潟波海〕中世頃より近江の琵琶湖をいふ。

にほんづつみ　日本堤の茶屋の嬶が二度する返事も一度になり（吉岡染）

〔日本堤〕東京淺草區聖天町の北端から西北に約十三町、下谷區三の輪町に終る、所謂土手八町の稱ある所で、吉原遊廓大門前は略その半にある。この堤、舊人遊客の通路として有名である。

にやくいちわうし　三熊野の九十九所の王子王子、若一王子とたたせ給ふ（孕常盤）

〔若一王子〕紀伊國牟婁郡熊野權現の攝社九十九所の王子中、第一位にあるもの。國花萬葉記・卷十四上、紀伊國中神社部、熊野權現の條に「若一王子。本地施無畏大士と號して、日本第一大靈驗三所權現といふ。若一王子は南部神道にて天照大神に充てたものともいふ。

によいがだけ（三國志）

〔如意嶽〕俗に大ノ字山といひ、比叡山と相對して一山脈をなし、京都東山三十六峯の首峯。

によごのしま　女子の島の夢話、男見たるも斯くやらん（孕常盤）

〔女子島〕女護島とも書いてある、女のみ住ん

でゐるといふ想像の島。按じるに女護島は八丈島をいつたものであらう、海南風俗志に、「鍋雀譚には八丈島を古は女護島といへり、今も男あれども女子多くして且容色ありといへりとなり」。巣林子も女護島を想像の島としたもので、その作・源義経将棊経に、「是より東九萬里の海上を超え、浄瑠璃世界女護島といふ山に至りしに云云」と書いてゐる。

によにんだう　五障の雲に埋ろる女人堂にぞ着きにける（萬年草）

〔女人堂〕紀州高野山花折坂を登りつめた處にある堂をいふ、これより高野山金剛峰寺境内となる。高野山は明治五年三月までは五障深き女人禁制の山法であつたが故に、維新までは登詣の女人總てこの堂まで登つて通夜したり（卯月紅葉）

にんとくてうのみやどころ　仁徳帝の宮所　仁徳帝の宮所拝み巡

攝津名所圖會・四上に、「上雛波仁徳天皇皐宮。上雛波即ち、世人博勞稻荷と稱するは誤なり、鳥居の額仁徳天皇宮、祭神鷦鷯聖帝」。浪花寺社巡・二十二社廻りの條に、「十二番。博勞町・仁徳天皇」。

ぬまづ　花の蒲焼名物の、鰻のはだへぬまづの宿（丹波與作）

〔沼津〕駿河國駿東郡沼津の宿及びその西方新田は鰻の蒲焼名物である。東海道中膝栗毛に、「新田と云へる速場にいたる、爰は鰻名物にて家毎にあふぎたつる蒲焼の匂に、二人は鼻のさきをひこつかし云云」。

ねごろやま

〔根來山〕若狭國遠敷郡にあつて、音無川の源をなし、その奥に大地山あつて、江州朽木谷に跨り、その峻嶺國界となつてゐる。

ねぢいは　あはれ佛の御母も女の罪のねぢ岩や（萬年草）

〔捻岩〕高野大門口の路傍にある岩。俗に弘法大師の母が女人の結界を恨んでこの岩を捻ぢたのでこの名があるといふ。

ねものがたり（小栗判官）

〔寝物語〕美濃と近江との境で、柏の東方の寒物語の里。

のえ　どうでのえか飛田ものと、誠しやかにいひ散す（曾根崎）

〔野枝〕大阪にある墓地で、刑場のあつた處。好色萬金丹巻二に、「雛波津の墓所ここのみにもあらず、小泊瀬・飛田・野枝・曾根崎云々」。

のがみのしゆく　班女は美濃の國野上の宿の傾城のなりあがり（隅田川）

〔野上宿〕美濃國不破郡關が原驛の東で、中山道垂井の間にあつて、中世は名邑で遊女も多く居たが、今は寒村となる。

のざき　なまづ川よりゆらゆらと、野崎參りの屋形船（女殺）

〔野崎〕野崎觀音をいふ。野崎觀音堂は河内國北河内郡西條村大字野崎にある慈眼寺をいふ。本尊は行基菩薩手刻の三尺五寸の十一面觀音にして著名の靈像である。堂宇宏壯にして飯盛山系の半腹に位し、攝津の山水一眸の下にありて春櫻秋楓の美を聚め、四時參詣者多く、野崎參りといふ。三十三所觀音堂あり、禰勒閣といふ。城内にお染久松の墓及び江口の君塚がある。女殺油地獄の中に「無量無邊の聚禰閣」とあるはこの觀音堂を云ふ。

のちせやま　契りは此の世後瀬山（隣摩歌）

國花萬葉記・大隅名所之部に「後瀬山」。

野中の一つ井戸　世は何の讐ぞや、逢ひそめて早三歳、影ばかりの契りにて、夫は野中の一つ井戸、名は後の世の形見かや（萬年草）

「影」といひて、「野中の一つ井戸」とあるから、姿見の井戸をきかせたものである。姿見の井戸は高野山奥の院中の橋の附近汗かき地蔵の東側にあつて、參詣人この井戸に姿を映し、其の影の水の映らない時は、三年の内に生命が危いといふ俗説がある。巣林子のここの文意は、世の無常を何に譬へんぞや、逢ひそめて早くも三歳を經過し、如夢幻泡影のはかない夫婦の契りであつて、夫婦同居したことゝもなく、夫は野中の一つ井戸のやうに寺に一人暮しをなし、情死しての後の名は此の世の形見として殘ることであらうとの意。

ののみや（大覺）

〔野宮〕嵯峨二尊院の南、小倉山の東南、森の中にある。

ばうのつ　こやつが宿はばうの津にあるげな（隣摩歌）

〔坊津〕薩摩國川邊郡西南方村に屬し、古來有名な港であつたが、慶長年中長崎を外人來朝の地と定めてより、繁華は漸次彼の地に移つたれど今なほ船舶の出入が多い。

萩（國性爺後日）

長門國阿武郡にある町。「所も萩の唐錦・故郷の空に翻す」（四七九頁）を見よ。

ばくらう　夢をさまさんばくらうの、ここも稻荷の神やしろ（曾根崎）

〔博勞〕博勞町をいふ、大阪巡禮三十二番觀音は此町の稻荷の社地内にある。ここの文は親に博勞をいひかけたのである。「ばく」をも見よ。

羽黒山（はぐろさん）

羽前國東田川郡にある山。山上に羽黒山神社あり、昔時東北修驗道場の第一で、峯酒山門に入るを許されなかつた爲、隱密に飲む酒の隱語に「陸知らず」といふ。

はこさき　箱崎の松とし聞かば我も急がん（國性爺）

〔箱崎〕筑前國粕屋郡にありて福岡灣に臨み、箱崎八幡宮がある、そのあたりの松林を千代の松原といふ。箱崎宮は官幣中社で應神天皇を祀り、仲哀天皇神功皇后を合祀す。

はしひめ　此社は嫉妬を守る橋姫の丑の時詣これなんめり（蟬丸）

〔橋姫〕山城國久世郡なる橋姫社をいふ。黒川道祐撰・雍州府志・三、神社門下、久世郡の條に、「橋姫。是姫太神而在二宇治橋西一、因號二橋姫一、一說昔有二姫婦一藤手貫布禰神一、求二生

爲レ鬼、而頂戴二鐵輪一、口含二炬火一、毎レ深更一詣二貴布禰一、遂生爲二厲鬼一、是爲二宇治橋姫一、未レ知二然否一。

はしもと 氣を奪はれ性根をとられ、起きつ轉んづ足たたず、橋本の宿はづれ、三國境の板橋にこそ着きにけれ(淀鯉)

〔橋本〕八幡の西南にある驛名、京より河内・大阪に至る街道に當る。山州名跡志・卷十三、鏡喜郡の條に「橋本。在二八幡山西南一、在二人家東西一、中有二大路一、河内及大阪街道也、人家地町數十一町あり、此所を號二橋本一、往昔山崎より所レ渡橋あつて、此所渡口なるを以て也、今號二中町一所其橋東爪也」。

はしらもと 淀柱本の邊まで參りしに(閑八州)

〔柱本〕攝津國三島郡三島江の南西にあつて淀川に臨む。攝陽群談卷一下、島上郡の條に、柱本村と見えてゐる。

はしりねのせき山 逃足早くはしりねの關山より日は暮れて(三國志)

〔走井の關山〕走井は近江國滋賀郡逢阪の關の清水をいふ。和訓栞に「はしりね＝相阪の關の清水といふ是也」。關山は逢阪の關山である。國花萬葉記卷十、江州國郡名所之部の條に「相坂の關＝名蹟、あふ坂の關山」。

はたえだや 市原・二の瀬・はたえだや(雜妙)

〔幡枝〕山城國愛宕郡岩倉村にあり、みぞろ池の北に當る。

はちけんや そりや提灯よ釣鐘よ、八つ過ぎぢや八軒屋、河内よ堺よ川口よと(卯月紅葉)

數も限らぬ家家をいかに名付けて八軒屋、誰とふし見の下り舟(天網島)

〔八軒屋〕天滿橋南詰から天神橋に至る間にある渡場で、京・伏見通ひの船乗り場である。攝津名所圖會大成卷二に「八軒屋舳岸＝古名を十日宿といふ、古よりの舟着なり、天和三年開板の大阪圖にも十日宿八けん屋とあり、浪花奇談云、八軒屋は古へ川に添ひて家八軒ならびありし、其頃は渡側に家なくして、外に類もなき故に八軒屋と號せしとなり、旅籠八軒あるによりて八軒屋と名づくると云ふは臆斷なり、……、則ちこの地は京師上下の埠頭にして、其通船を三十石と號す、……、當津より城州伏見に至る其流凡そ十里、淀川を往返す、胡に大阪に乘りてタに着く、これを晝船といふ、夕に乘りて朝に至るを夜船といふ、伏見より下るも亦然り、荷物及び旅客を乘せて通行す」。

はつかしのもり (酒呑童子)

〔羽束師森〕山城國乙訓郡羽束郷にある森。巢林子作、曾根崎心中に「所體くづをれ、アアはづかしの森で裳裾がはらはらは」とあるは「恥かし」に「羽束師の森」をいひかけたまでで此地に關係ない。

はつけんや 「はちけんや」を見よ。

はつせやま かれも霞むや初瀬山(冥途飛脚)

〔初瀬山〕大和國磯城郡初瀬村にあり、山中に長谷寺の大伽藍がある。

ばつだいが 醫療術をつくせども、こやばつだいがの定業にて扁鵲も匙をなげうてり(今川了俊)

〔跋堤河〕印度拘尸那揭羅城の南方を流れる川で、釋尊は跋提河畔・沙羅樹下に寂然として入滅された。

はつねがはら 扨御前を下向あり、初音が原をうつて通る(伊豆日記)

比翼の鳥のはつねが原、はや秋ちかく野はなまめきて(大磯虎)

〔初音原〕伊豆國田方郡錦田村大字塚原をいふ。

はとのみね 道明らけき鳩の峯、正八幡の鎭座なる、我氏の神軍神(雪女)

〔鳩峯〕山城國綴喜郡男山の高頂をいひ、海拔一四〇米突あり、山上に官幣大社石清水八幡宮あり、祭神は應神天皇である。古來朝廷の尊信淺からず、弓矢神として武家の尊崇極めて深い。

はなみづのはし 我を送りし朝の霜、白無垢に單帶してよるの雪、花水の橋に鳴く鳥(扇八景)

〔花水橋〕相模國淘綾郡の東部を流れる花水川に架せる橋で、長さ二十五間ある。新篇風土記に、花水の橋は千種日記に「花水の橋を渡る、昔この川の上に櫻多ありて、花散る頃は爰に流れ來り侍る」とある。寶永六年水路を改め、古川は小流となつた。

花屋が辻 これ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと(生玉)

大阪高津宮の附近種樹屋吉助の花園ある辻をいふ。攝津名所圖會大成卷四、種樹屋吉助の花園を記して「前隷には和漢の名木を多く植ゑたり……、庭中には諸の草木を多く貯へ四時に花の絕ゆる事なく云云」と見えてゐる。

はなれざか 幾重越しても信濃路はまだ谷峰の大井山、人里遠く離れ坂、ちくまの川に渡し呼ぶ聲も(最明寺殿)

〔離坂〕香掛と鰍井澤との間。謠曲・鉢の木に、「吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞうき世を離れ坂、墨の衣の雫川」。

はなをりざか 手向の梅の花折坂(萬年草)

〔花折坂〕高野山女人堂の下にありて、稚兒が淵から一丁餘登つた所にある。昔時秦詣人は此所で花を折つて大師に手向けたといふ。現今は古杉老檜繁茂して幽寂を極む。

はばかりのせき 解題部「はばかりのせきたび」を見よ。

はますぢや 近江屋出でて濱筋(二枚絵)

〔濱筋〕大阪堂島の濱筋。

はまのまち 寺の旦那に濱の町といふ所、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番(籬摩歌)

〔濱町〕大隅國姶良郡西國分村にある濱の市をいひ、昔の海驛である。

はまのみや 飛鳥の社・濱の宮・王子

王子は九十九所(反魂香)

〔濱宮〕紀州那賀川の海に注ぐ所にあつて、渚

の森といひ、昔は王子權現と稱し、境内に若宮がある。

はまのみや 遙に出でし濱の宮、鳥居通りの流鏑馬馬場（鑁樞三）

〔濱宮〕出雲國松江の北海岸愛宕神社のある濱邊をいうたのであらう。

はやひ 速日の岸高千穗の嶽（薩摩歌）

〔速日〕日向の名所。速日峯は日向國東白杵郡の西方にある山。國花萬葉記卷十四、日向國名所之部に「はや日の峯。日本紀に天孫降臨の所也と云」。

はらなこく はらな國のはくだ王（鎌田）

〔波羅奈國〕波羅奈斯國の略、中印度にあつた國名で、今のベナレスの地に當る。

はりよう 巴陵の水轉た流れて留まらぬ（隅田川）

〔巴陵〕支那湖南岳陽縣にある。有名な洞庭湖はこの所にある。

はんにやざか てんがい般若坂の棚逆茂木押破り（女護島） 我等は般若坂まで見送り奉らん（三世相）

〔般若坂〕林宗甫曰、和州舊蹟幽考・卷三、添上郡の條に、「奈良坂・般若路の二つの道定かならず、今の大路の其東に伊賀とう道路あり、もし是らにや」と見えてある。蓋し般若寺のあたりの坂をいうたのである。

はんにやじ 奈良の都般若寺の傍に暫く忍び居たりける（以呂波）

〔般若寺〕大和國奈良坂の南にある寺院。

ばんば （艷容）

〔番場〕今は馬場ともいふ、近江國坂田郡南箕輪村に當り、曆針峠にある山驛である。溫故錄に「番場宿は開創の跡にて當時番衞の人人居れり、故に番場の名起れり」。

ひうちがじやう よそめにさこそ山伏の、うつ石の燧が城とかや（嫁菩）

〔燧城〕越前國南條郡湯の尾村大字燧の城。

ひきがやつ 比企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次（最明寺鰹）

〔比企谷〕鎌倉妙本寺のある谷をいふ。

ひくまのいけ 引間の池の池水に曉ごとに祈願の聲（三國志）

〔引間池〕引間は引馬とも書き、遠州濱松をいふ。十六夜日記、二十二日の條に「今宵はひくまの宿といふ所にとどまる、此所のおほかたの名をば、濱松とぞいひし」と見えてある。

ひくまのをか 百烏太夫と申すめのとを具し、春の頃より都に上り、檜隈の岡に屋形をしつらひ（用明天皇）

〔檜隈岡〕大和國高市郡にある。

ひこのやま 天狗達をどつと譽めて招いた、まづ筑紫には彦の山（隅田川）

〔彦山〕豐前豐後筑前の三國に渡れる山。謠曲・鞍馬天狗に、「まづ彌勒の天狗は誰誰ぞ、筑紫には彦山の豐前坊」。

ひすなんざん （三國志）

かかる地名も山名も朝鮮にはない。蓋し巢林子が唐音まがひの造語であらう。

ひたかのさと （嫗山姥）

〔火高里〕尾張國愛知郡火高の里。

ひとつばし 讀良々山口一つ橋、渡して救ふ御願力（女殺）

〔一つ橋〕岡山（その條を見よ）の南にあつて、野崎觀音は一つ橋の北東に當り、參詣者を乘せて大阪間往復船の發着場で掛茶屋等がある。

一つ屋 在所一つ屋の叔母の娘（生玉）

大阪天王寺附近にある地名。

樋の上 樋の上の切荒布、花の都へこんな物お恥かしやと差出す（女殺切） 大坂の名物ひの上の切荒布、嵩高なばかりで錢安なれど（卯月調色）

大阪道頓堀清津橋西詰の地を「樋の上」といふ。此處に名代の昆布屋があつた。この店から賣出す切荒布を樋の上の切荒布といつて大阪の名物であつた。南水漫遊・初の五、鐵屋まん頭の條に「その頃この邊の名物には塀筋菩薩が筆、樋の上の昆布云云」、とありて道頓堀の名物が擧げてある。

ひのをかたうげ （三國志）（反魂香）

〔日岡峠〕山城國宇治郡にありて、山科から京都粟田口に通ずる坂路。

ひばりやま 救ひ取られて紫の、雲に入るてふ雲雀山（吉岡染）

〔雲雀山〕大和國宇陀郡宇賀志村にある山。中將姫が繼母の讒によつて捨てられたといふはこの山である。

ひびきのなだ 名所は音に聲の灘鐘が岬（女護島）

〔響灘〕筑前國遠賀郡の北、長門國豐浦郡の西方にある灘、西は玄界灘に連り、北は川尻御崎の邊に至る。

ひむろ （以呂波）

〔氷室〕山城國愛宕郡大宮村城山の北に當る。

ひむろのやしろ 氷室の社伏し拜み（天智天皇）

〔氷室社〕奈良飛火野北向荒神の西。大和名所圖會卷一、添上郡南都之部に「氷室社＝冥文記曰、北向荒神より西にあり、云云」。

ひめじま なれも焦るる ひめ島や（用明天皇） 濡れた姿の姫島（女護島）

〔姫島〕豐後國東國東郡伊美村の北にある島で、豐後から關防灘に入る船の常航路に當る。

ひめのはくさん 加賀に比咩の白山（日本武尊）

〔比咩白山〕加賀國能美郡白山上の比咩神社。

ひらかた 風にひらひら方を過ぎ、佐太を越え（女夫池）

〔枚方〕河内國北河内郡にある町で、淀川に沿ひ京阪街道に當る。

ひらきき 誰ひらききの神の氏子の神歌や（薩摩歌）

〔枚聞〕枚聞神社をいふ。薩摩の一の宮、揖田彦神を祀り、薩摩國揖宿郡瀧尻村大字十町にある。國花萬葉記・薩摩國神社之部に、「枚聞神社＝又號二和多都美明神一、祭神揖田彦命、當國一ノ宮」。

ひらの （雛鮮）

〔平野〕平野社は山城國葛野郡にある。黒川道祐編・雍州府志・三、神社門下・葛野郡の條に、「平野社。在二天滿宮西野一、所レ祭之神四座、第一殿名二今木社一、源氏祖神而日本武尊也、第二名二久度社一、是平氏神而仲哀天皇也、第三名二

ふるあけの古開社、高階氏祖神而仁徳天皇也、第四名三比咩神、大江氏祖神而天照大神也、第五乃四姫之攝社也、貞観元年十一月九日始行三祭祀、寛弘元年四月十日有臨時祭、勅使奉幣如賀茂、又有三春日社任部社、共攝社也」。

ひらの　（冥途飛脚）

〔平野〕攝津國東成郡平野郷町で今は鐵道車驛がある。

ひらをかのみや　父鎌足は河内の國ひらをかの宮、天津兒屋根の御神に一七日の御參籠（大鏡冠）

〔枚岡宮〕河内國中河内郡枚岡村大字出雲井にあり、官幣大社にして藤原氏の高祖天津兒屋根大神及び比賣神を祀り、鹿島・香取の二神を配祀してある。現在の社殿は文政年間の遺構に係る。

ひるこのおんやしろ　天の岩戸の暗き世も此處はひるこの御社（烏帽子折）

〔蛭子神社〕「暗き」に對して「ひるこ」といひかけたのである。蛭子の神社は攝津國武庫郡西宮神社をいふ。日本書紀通證に、「諸尊册尊爲二天神一生二蛭兒一、雖二已三歲一脚猶不レ立、故載二之於天磐櫲樟船一而順風故棄、白井宗因曰、蛭子神前西宮所二祭之一神、世所謂西宮夷是也」。平家物語・卷卷に、「蛭子は三年まで足立たぬ尊とて御座ければ、天石櫲樟船に乘せ奉り大海が原に推し出して流され給ひしが、攝津國に流れ寄りて海を領する神となりて夷三郎と顯はれ給ひて西宮におはします」。

ひれふるやま　典據部四七三頁を見よ。

ひろさは　波に色ある廣澤の岸の紅葉を露ながら（松風）

〔廣澤〕山城國葛野郡嵯峨村の東にある廣澤池をいふ。

ふかくさやま　古へ人の浮名立つ、戀の百夜の深草山、あまぎる雪に雲暗く（烏帽子折）

〔深草山〕山城國紀伊郡深草村にある山の名。ここの文は、往昔深草四位の少將が小野小町に懸想して百夜まで通ふことを約し、今一夜となつて死んだといふ故事をとり、深草の少將を深草山にいひかへたのである。

ふかやの宿　深谷の宿の深深と（最明寺殿）

〔深谷宿〕武藏國大里郡の小邑であつて、現今高崎線鐵道驛がある。

ふくしま　櫻山庄左衞門・福島ぢやとおしやる、心はの、小體なれども張詰めて舞臺一ばい、嵩もありし藝に身もある、口中のしよりしよりしたる雀鮨（今宮）

〔福島〕大阪の堀川の北、曾根崎の西南に當り、上福島村・下福村をいふ。雀鮨はこの地の名物である。「櫻山庄左衞門」「雀鮨」をも見よ。

ふくしま　にぎにぎふくふく福島の、賤の妹背の妹は籾磨ろ（最明寺殿）

〔福島〕信濃國西筑摩郡福島村邑で、木曾谷の村落、上松から二里半。

ふくはら　これより福原の新都へ上らんに三日はかかるべし（伊豆日記）

〔福原〕攝津國神戸市の内、兵庫岡方及び武庫郡林田村の内、長田尻等の地であつたといふ。治承四年六月二日安德天皇福原に遷都されたが、久しからずして再び京都にかへらせ給はれた、當時の内裡は武庫郡林田村長田の東、輪田の西野であるといふ。

ふくやま、風ふく山の渡守、我思ひはしらずげに舟も潮も引く方に（隣摩歌）

〔福山〕大隅國姶良郡の海岸にある海驛。

ふくろゐ　袋井の里過ぎ行けば三香野橋（今川了俊）

〔袋井〕遠江國磐田郡にある小都邑。

ふざんかい　日本の兵船數萬艘ふざんかいの磯近く寄すると聞く（三國志）

〔釜山浦〕朝鮮慶尚道にある都會。浦の朝鮮音Kai-である。

ふしみざか　色の勤めの憂き節の、峠を越えて伏見坂、戀のないにもならひとて（生玉）

〔伏見坂〕大阪伏見坂町をいふ、道頓堀の立慶町通りの芝居の裏手である。雛渡九綱目に、「元祿十一年に新地と成とあれば、色茶屋の此處に出來たのも其頃からであらう。

ふたがは　吉田ふた川しらすがちよいと越えて（丹波與作）

〔二川〕參河國渥美郡にあつて吉田と白須賀との間、東海道五十三次の一。

ふたかみじま　（國性爺）

〔二神島〕肥前國北松浦郡大島村の北六海里にある島。

ふたごやま　（扇八景）

〔二子山〕相模國足柄郡にあつて、箱根中央火山の東南端なる山で、雙峰相竝が。

ふたつゐど　今宵限りとほりづめや、命二つを二つ井戸、深い緣とて死にたいも（今宮）

〔二つ井戸〕攝津名所圖會四下に、「二つ井。道頓堀の東堀留町にあり、清泉にして此邊民家の用水とす」。近松のこの文は、二つ井戸が堀留町の角詰にあつたので堀詰といつて、堀に「拗り」をいひかけたのである。

ふたのせ　市原・二の瀨・はた枝や（雜芽）

〔二の瀨〕靜原より鞍馬道に出る所で、補陀落山の西北にある。

ふぢえ　浪のうねうね生茂る藤江の里の朝風に（浦島）

〔藤江〕播磨國明石郡林崎村にある。

ふぢえだ　しなへやしなへ藤枝の、藤の下風かぜにもつるる黑髮の（大磯虎）

〔藤枝〕駿河國志太郡藤枝町。

ふぢがやつ　藤が谷の大伴屋敷（最明寺殿）

〔藤谷〕鎌倉淨光明寺の傍にある。

ふぢさは　浮世の羈絆さんざりの、餐も飢ろる藤澤や、御寺をさして急ぎける（小栗判官）

〔藤澤〕相模國高座郡藤澤の邑をいふ。藤澤の御寺は卽ち藤澤にある清淨光寺をいふ。

ふぢしろ　梢にかかる藤代や（反魂香）

〔藤代〕紀伊國にある浦の名。名木の藤あり故に藤代といふ、又老松あり俗に箒捨松といふ。

ふぢつ　大勢は目に立つて、所所の渡海の番所・國の笞恐れあり、夫婦密に藤津の浦より出船すべし（國性爺）

〔藤津〕肥前國藤津郡の海邊をいふ。

ふぢと　佐佐木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法（女夫池）

〔藤戸〕備前國兒島郡にある渡邊で、渡あり藤戸の渡といふ。長門本・平家物語に、「備前備中兩國の境西河智河尻藤戸の渡と云所に押寄せて」。「佐佐木が藤戸の浦人を殺せし云云」を見よ。

藤の棚（ふぢだな）　しめてまつはれ藤の棚（曾根崎）

大阪谷町にありて、順禮十六番觀音堂のあるところ。蔗分船・卷二に、「今は昔このあたりに一子をもてるあり、此子十三歳の折から如何なる宿世にやありけん、此所に池ありしが此池水に溺れ空しくなりにけり、……則彼子の塚をつき其標に一本の藤を植ゑけるとも、其藤今は枝葉繁茂して藤の棚といへり、……堂の本尊は長谷寺の觀世音を近きに安置しけると也」。攝陽群談・十二に、「大阪順禮十六番觀音堂、大坂の津谷町の地にあり、……堂前に大樹あり、花の頃藤群を成せり、世俗藤の棚と稱して地名とす」。「しめてまつはれ藤の棚」をも見よ。

ふぢのもり　藤の森の先ぢや（鎌權三）

〔藤森〕山城國宇治郡にあつて、御香宮から北六七丁。

ふぢのを（蟬丸）

〔藤尾〕近江の國志賀郡にある。

ふちゆう　ふちゆう江尻にすつとん（丹波與作）

〔府中〕今の靜岡のこと、東海道五十三次の一。

ふぢるでら　しなへよしなへ藤井寺（吉野忠信）　里の裏道畦道をすぢりもぢりて藤井寺（冥途飛脚）

〔藤井寺〕河內國南河內郡長野村なる剛琳寺をいふ。眞言宗で、西國三十三所第五番の靈場である。

ふつ　上つら・下つら、ふつ・かつき、浦村里の土民（蛙合戰）

〔布津〕肥前國南高來郡にある村名。

ふどう　かかや子供が不動參り、氣替慥に請取りました、不動參りに待ちまする（冥途飛脚）

〔不動〕北野稻荷山の南の眞言宗の不動尊をいふ。「不動參り」とは不動寺に參詣すること。

ふどうざか　情のきづな縛の繩、不動坂にもさし懸り（萬年草）

〔不動坂〕神谷から女人堂に至る途中十七町餘にある峻坂で、四十八まがりあるが故に一名いろは坂ともいふ。ここの文は、不動尊の持つ繩を縛の繩といふにより、情の絆に縛られることを縛の繩といふて、不動坂の名にいひつづけたのである。

ふないりばし　難波小橋から舟入橋の濱傳ひ（天網島）

〔舟入橋〕これは橋名ではなく、川から藏屋敷へ舟を通すやうに流れを引入れて、其流れの上に架けた橋をいうたのである。

ふなをかやま　いかに岩村源五、かれていひしは合點か、舟岡山へひつたてよ（娥）　ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に（女楠）

〔舟岡山〕山城國愛宕郡千本の東北で、刑場・火葬所・墓地のあつた所。元祿三年六月刊・眞實伊勢物語・卷三、幽靈の形見の條に、「舟岡山に送りて煙とぞなしける」。元祿三年二月刊・名所都鳥・卷三に、「舟岡（愛宕郡）。都のうちにも日に幾人か鳥部舟岡と聲きたる無常所也、紫野大德寺より南に當る、松のくろみたる岡なり、一條よりはいかにも十町ばかりあるべし」。

船によせたる里の名（ふねによせたるさとのな）　船によせたる里の名の、橋の夕暮來て見れば（鎌權三）

山城國紀伊郡伏見町の南なる京橋あたりの地を、昔は船戸と稱したから、かく云うたのである。

ふはのせきや　葦きも習はぬ苫葦の、苫二三枚足らざれば、鬼王は茅刈りて、覆へど風にふうはふは、不破の關屋の庇かと、葦さしてこそ休みけれ（扇八景）

〔不破關屋〕關屋は關の番所をいふ。不破の關址は現今・美濃國不破郡關原村大字松尾の大木戸坂にありて、昔時は三關の一であつた。曾我扇八景のここの文、風にふはふはするを不破の關とつづけ、不破の關の荒廢に及んだことは古歌にも見ゆれば、「不破の關屋の庇かと」いうたのである。新後撰集・卷四、信實の歌に、「秋風に不破の關屋のあれまくも、惜しからぬまで月ぞもりくる」。

ふもん　ふもんりんざう多寶塔引摺堂萬塔院（聖德太子）

〔普門〕普門院をいふ。大阪四天王寺にありて、普賢菩薩・傳教大師像を安置し、法華三昧堂にして椎寺とも稱し、傳教大師の建立する所である。

ふるいち　今日の今見て今の間に、馴染は日數ふる市の、里を南に橫折れて（聖德太子）

〔古市〕大和國添上郡東里村の大字にして、古の八島鄕の首里。

ふるかはのべのかみすぎ　十市のをのの初時雨、古河の邊の神杉よ、すぎし昔の春を語らん（三世相）

〔古川邊神杉〕古川は初瀨川のこと。初瀨川は古代よりいひはやされた川なれば、古川といふ。大和國城上郡を流る。神杉は二本杉をいひ、嘗て古川の邊にあつて古來著名である。古今集・旋頭歌、題しらず、「はつせ川ふるかはの邊にふた本ある杉、年をへてまたもあひ見むふたもとある杉」。林宗甫撰・和州舊跡幽考・卷十三、城上郡の條に、「古河野邊。二本の杉は一昔許にやなりけん、絕果て古河野邊の名のみ殘れり」。

ふるのみやしろ　（大繼冠）

〔布留御社〕大和國山邊郡丹波市町にある。

へうたんまち　九軒阿波座ののらがらす、月夜はなほか闇の夜も瓢箪町を腰付けに（淀鯉）

〔瓢箪町〕大阪新町遊廓の裏中の筋の町名。攝津名所圖會・四下、「其砌（寛永年間新町遊廓のたちし砌）木村次郎といふ伏見浪人の顧によつて、官より花巷の長をつとめさせらる、此者瓢箪の御馬印を拜領して常に玄關に飾りし故、通り筋を瓢箪町といひ、居宅の町を木次郎と呼ぶ」。瓢箪町はその最初は現今の伏見町四丁目五丁目邊にあつたが、同町の住人木村次郎舉先して新地に移轉したので一名木次郎町ともいひ、又新町通りともいうたのが遂に全部を總稱して新町といふことになつた。本書所載の大阪圖を見よ。

べきら　汨羅の潭も水あせて沈みも果てず、ながらふる帶刀太郎廣房は（祇苻劒本地）　汨羅に沈んで江魚の腹中に葬らる（雪女）

「汨羅」は江の名。一統志に、「汨羅江名、在湘陰縣北十里、源出豫章、流經湘陰二分二水、一南流曰汨水、一經古羅城二曰羅水、至屈潭復合、故曰汨羅、西流入湘」。巢林子のこの文は、楚の屈原讒に遭ひ江南に遷されて世を嘆じ、汨羅に投じて死んだことあるによつて書いたのである。十八史略・卷之一に、「初屈平爲懷王所任、以讒見疏、作離騷、以自怨、至頃襄王時、又以讒遷江南、遂投汨羅、以死」。巢林子作文武五人男に、「此度頽綱に世を棄はれ、身を汨羅に沈めんとせし處に」とあるも、屈平が汨羅に投身した故事によつたのである。

へそむら　磨針峠の氣が細うては勝たれぬと、へそ村の上で分別しか（丹波與作）

〔絳村〕近江國栗太郡にある村名、草津と守山との間の近松のこの文は勝に絳村をいひかく。

べにがやつ　今ぞ風雅の道までも色をあげたる紅が谷（最明寺殿）

〔紅谷〕鎌倉の補陀落寺の東の谷をいふ、土俗に紅が谷といへども辨が谷又は別が谷の轉訛である。

べるあんだう　遼東大王都を日本に切取られ、べるあんだうに落ちのび給へば（三國志）

朝鮮八道の一なる平安道（Phyong-an）のことであらう。

べんがら　べんがら・あんぼん・すべいで（國性爺後日）

北東印度ベンガル州（Bengala）を云ひ、昔はベンガラ（Bengala）といふ。

べんけいやまのまち　（女腹切）

〔辨慶山町〕六月十四日京都祇園會に辨慶山を出す町で、即ち下京區蛸藥師通り烏丸西入町である。堀河之水（元祿七年刊）夏の部に祇園會のことを記せる文中に、「橋辨慶山＝四條坊門室町の東、烏丸の西にあり出る鼻山也、源義經武藏坊辨慶五條の橋上にて武藝を挑みるすがたをうつせる山なるべし」。

べんざいてん　無常の風も立騷ぐ、辨財天の鰐口の（生玉）

〔辨財天〕大阪生玉社境内・門前北側にあつて、毎年正月七日冨會がある。

へんみやうゐん　ここに高津の遍明院（曾根崎）

〔遍明院〕東高津野中の觀音をいふ。難波九綱目・三に、「東高津の野中、すこし人家をはなれ九折を登りて南向にあり」。攝津名所圖會・三に、「野中觀音。東高津野中にあり、遍明院と號す」。攝陽群談・十二に、「東生郡南平野町村の東にあり、境内に大阪巡禮十三番の觀音堂あり」。「大阪三十三所」を見よ。

ほうのつ　「ほうのつ」を見よ。

ぼうふざん　「ぼうふさん」（五五七頁）を見よ。

ほうらい　三萬里の蓬萊指顧の中、凡て兜卒に到るが如く（浦島）

〔蓬萊〕海中にあつて神仙の居る山。史記・封禪書に、「蓬萊・方丈・瀛洲の三神山は渤海中にありて、人を去ること遠からず、諸僊人及び不死の藥皆在りと見えてゐる。漢書・郊祀志に、「蓬萊・方丈・瀛洲・三神山在渤、金銀爲宮闕」。

ほうらいじ　餘り嬉しき事ありて、三河國ほうらいじ峯の藥師へ參るなり（五人兄弟）

〔臨來寺〕「みねのやくし」を見よ。

ほさか　武藏に穗坂小野の牧（源義經）

〔穗坂〕甲斐國穗坂は馬の産地。拾芥抄中、年中行事部に「八月十七日幸甲斐穗坂馬」と見えてゐる。巢林子が「武藏に穗坂」といへるは、甲斐の思ひ違ひであらう。

ほしだに・かがみいし　（嶺峨天皇）

〔星谷・鏡石〕四國遍路（その條を見よ）第十九番立江寺と第二十番鶴林寺との間に、星谷岩屋寺があつて、其處に鏡石がある。和漢三才圖會、立江寺の條に、「此間有三岩木村取星寺正安寺、涉二桂川一星谷岩屋寺有二鏡石一、慈眼寺有二卒都婆石一、船内藻等、最靈場也」。

星月夜の淺井　（相模入道）

相州鎌倉十井の一で星の井ともいふ。鎌倉町坂の下市街の西端、極樂寺切通にかからうとする右方にある。

ぼだいじ　珠數につながん菩提寺や（曾根崎）

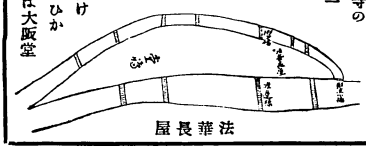
〔菩提寺〕攝陽群談十二に、「生玉中寺町にあり、境内に大坂順禮十九番觀音堂あり」と見えてゐる。

ほつけじ　玉の臺に法の花、法華寺にこそつかれけれ（三世相）

〔法華寺〕大和國添上郡佐保村大字法華寺にある。明治三十一年にこの寺の十一面觀世音の木造立像一軀國寶となる。

ほつけながや　青葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てて、神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や（氷朔日）

〔法華長屋〕衆の暗聲の「ほけきやう」に「法華長屋」をいひかけたのである。法華長屋は大阪堂



島新地内にあつて渡邊橋筋の東に當る。大坂町鑑に、船大工町・中町・渡邊橋筋以東は法華庄次郎屋敷と見えてゐる。左圖は難波九綱目に據つた堂島新地の略圖で、これに法華長屋の位置を書入れたのである。

ほふかいじ　あだの悋氣や法界寺（曾根崎）

〔法界寺〕攝陽群談・十二に、「法界寺。西成郡天滿西寺町にあり、境内に大阪巡禮二番觀音堂あり」。攝陽群談、難波九綱目共に、法界寺の觀音堂を大阪巡禮二番とし、長福寺の觀音堂を五番としてある。されども曾根崎心中の文では、長福寺の觀音堂を二番、法界寺の觀音堂を五番としてある。大阪三十三所を見よ。

ほふぢうじ　拜み巡りて法住寺（曾根崎）

〔法住寺〕攝陽群談・十二に、「法住寺。大阪天滿西寺町にあり、境内に大阪巡禮四番觀音堂あり」。

ほふりゆうじ　去年は和州法隆寺・聖德太子の千百年忌（女殺）

〔法隆寺〕大和國生駒郡法隆寺村にあつて、今は法相宗の大本山である。推古天皇の御宇に、天皇及び厩戸皇太子が用明天皇の遺願を果す爲に建立された。東院は上宮王院と號し、聖德太子斑鳩宮の舊址である。金堂・中門・夢殿・五重塔は我國不造建築の最古の物とされてゐる。「去年」とあるは、享保五年庚子の年に當り、法隆寺で聖德太子千百年忌の大法會が行はれた。

ほふりん　御室法輪嵯峨の御寺（樂好）

〔法輪〕山城國葛野郡嵯峨渡月橋の南で嵐山の東部にある寺院。典據部「ほふりんさがのおてら云云」（四一四頁）を見よ。

ほりえ　誰か堀江で水高き、矢を射る如き川の瀬を、戻橋とは付けぬらん（酒呑童子）

〔堀江〕京都の堀川をいふ、北は一條戻橋から京都の西部を南に貫流せる川。

ほりえがは（堀川渡鼓）

〔堀江川〕往時は大阪道頓堀川を堀江川と稱した。

ほりかはのはし　落つる涙に堀川の、橋も水にやひたるらん（天網島）

〔堀川橋〕攝陽群談・七に、「天滿堀川、天滿小橋の次にあり、東西共に堀川町と稱するの渉り也」。

ほりづめ　「ふたつみど」を見よ。

ほるなん　ほるなん五郎（國性爺）

「ほるなん」といふ國はないが、この音に近いのは「ふなん」か。扶南は今の邊羅あたりにあつた昔の國の名。

ほるねら　べんがら・あんぼん・すべて・ぼるねらなんどいふ外國（國性爺後日）

Borneo をいふ。新井君美撰・五事略に、「ぼるねを。島也、日本を去ること三千九百里程。元祿年間桂昌院（玉の方）が寺院を修補した。

ほんせいじ　生玉の本誓寺そと伏し拜む（曾根崎）

〔本誓寺〕攝陽群談・十二に、「生玉中寺町にあり、境内に大阪順禮十八番觀音堂あり」。

ほんてんままち　本天滿町河内屋德兵衞（女殺）

〔本天滿町〕今の大阪東區伏見町二三丁目邊。

ぼんとちやう　前には戀の底深き、淵に憂き身をぼんとちやう（女腹切）

〔先斗町〕現今も遊女多き京都の町名（三條橋より四條橋に至る西川岸）である（京都地圖を見よ）。この町名は古くは天和二年刊の好色一代男（西鶴撰）にも見えてゐる。その名の起りは差し骨牌の側先のある繪札の稱より町名にもなつたのである。遊女に關する語の中には骨牌より來れるものが他にも往往ある。その「先斗」と書くは、劒の先即ち點を意味し、これを「ぼんと」と訓むは、葡萄牙語 Ponto（英語 Point）の音によつたものである。

ほんのうじ　旅館は例の如く清水か本能寺、ひつ續いて攻上り（三國志）

〔本能寺〕織田信長が明智光秀に弑せられた寺で、京都六角の南油小路の東にあり、東西一丁、南北二丁の巨刹であつたが、今は本能寺の町名を殘せるばかりである。

まかだこく　摩訶陀國に邪を防ぎて祇園を構へ（賀古教信）

〔摩訶陀國〕古代中印度にあつた國名。西域記に、「摩竭陀舊曰摩訶陀、又曰摩竭提、皆訛也」。

まきのしま　「白妙へに晒布ほすてふ纖の島」（五一二頁）を見よ。

まきもく　伊吹まきもく木曾信樂の良材寄せられずといふ事なく（隅田川）**吹下す風や霞をまきもくの、檜原が隈に鶯えしは**（以呂波）

大和國磯城郡纒向山をいふ。

まくずがはら　花一時も今しばし眞葛が原に着き給ふ（弘徽殿）

〔眞葛原〕京都御山公園の地をいふ、この地昔は薄茂る山野であつた。

まつえだ　上野に松枝（最明寺殿）

〔松枝〕上野國碓氷郡松井田をいひ、中山道の驛次で、安中と坂本との間にある。名跡志に、「松井田、一に松枝と書し一驛なり」。

まつがさき　まつがさきより二の瀨に續く、二の瀨續きの市原や（三國志）

〔松崎〕山城國愛宕郡下鴨村の北半里許、今松が崎村といふ。雍州府志・山川門・愛宕郡の條に、「松カ崎。在同所（小川）南、此山背北向東南、故斯處春初櫻花開早、一說古氷室在此邊也」。

まつかは　汝は急ぎ若を連行き松川の奥とどきの淵へ沈めにかけよ（伊豆日記）

〔松川〕伊豆國田方郡にある。秋山章編・豆州志稿・卷六に、「松原川、源東蓋の峯より發す、泉川と云、又一源柏嶺下より發し、山中にして泉川に入る、十足荻村の西を過ぎ、鎌田に至てとどきが淵あり、又の名蜘蛛淵・鬼ガ淵・兒カ淵、源武衞の子千鶴を沈めし所也、蘇我

物語に見ゆ、又松カ枝ノ淵あり、岡村に至て大川と云、松原にて松原川と云、昔は總て松川と稱す、その海に入る所を大川口と呼ぶ、纔に船を入るべし」。

まつちやま 君と寢る夜を眞乳山、我は夫もなき渡る葦邊のたづを玉鶴と（聖徳太子）

〔眞乳山〕大和國宇智郡牧野村大字木之原にある。

松と櫻欄との連理の森 これこそ曾根崎天神の松と櫻欄との連理の森、書集めたる言の葉の餘所に聞きしも今は又（二枚繪）

曾根崎の森にあつて、天滿屋お初と德兵衛が情死した所である。巢林子作「曾根崎心中」道行血死期の霜の條に「涙の緒の結び松、櫻欄の一瞬の相生を連理の契に擬へ、露の憂身の置き處、サア此處に極めんと、上着の帶をとく丘衛も、初も涙の染小袖云云」と見えてゐる。地名部「そねざきの森」を見よ。

まつのを（雜好）

〔松尾〕山城國葛野郡松尾村大字上山田の南なる松尾神社をいふ。

まつばがやつ 松葉が谷の佐竹屋敷は城之介泰盛（最明寺殿）

〔松葉谷〕鎌倉安國寺のある處をいふ。

まつほのうら 來ぬ人をまつほの浦の夕凪に（卯月紅葉）

〔松帆浦〕淡路國津名郡にある濱邊。「來ぬ人をまつほ」（四六四頁）を見よ。

まつもと（大原問答）

〔松本〕現今は大津市内の町となつてゐる。

まつらがは 唐土船を松浦川、港もちかの浦風に（國性爺）

〔松浦川〕肥前國松浦郡東松浦を流れる川の名。

まつをやま 無念ながらも小六郎、春姫をかき負ひて松尾山にさしかかり、津の國路へぞ逃げのびける（三世相）

〔松尾山〕山城國葛野郡嵐山の南にある山の名。黒川道祐編「雍州府志」一、山川門・葛野郡の條に、「松ノ尾山。在二嵐山南一。松尾明神社在二山下一」。

まののかやはら 眞野の萱原遙々と余吾の海面見下せば（謠曲）

〔眞野萱原〕近江國滋賀郡眞野村の萱原をいひ、堅田の北方。古歌に「鶉鳴く眞野の入江の濱風に、尾花なみよる秋の夕暮」。

まぶちなはて 馬洲畷を遙々と横ぎる嵐さらさらさら（小栗判官）

〔馬洲畷〕馬洲は近江國蒲生郡鏡山村の西、雪野山の北。

まりこがは 駒の蹴上の鞠子川、衣紋流のア曲もなや（會稽山）

〔鞠子川〕丸子川とも書く、相模國にある酒匂川の古名。

まれいざん 月をさらすかさらさらさら更に人音まれい山（釋迦）

稀に萩刺耶山をかけて「まれいざん」というたのである。萩刺耶山は天竺にある。大唐西域記・巻十に、「國南濱海有二萩刺耶山一、崇崖峻嶺、洞谷深澗云云」。

まんだふゐん 萬塔院にともす火は（曾根崎）

〔萬塔院〕攝陽群談・十二に、「萬塔院。四天王寺のうち、十五社の西にあり、千手觀音・四天王・賓頭盧等を安置す、大阪順禮第二十四番」。

みあれのもり みあれの森に酒宴の幕（雜好）

〔御生森〕山城國愛宕郡御生社の森をいふ。花鳥餘情に「みあれは玉依姫の別雷神を生み給ふ所をいふにや、御生とも書く」。

みえいだう 廻り廻りて室町の絲屋組屋鬻ぎ女に、御影堂の扇折ほれ身をくだきかせげども（百日曾我）

見しはかへらで面影の、なほなつかしみ御影堂、きどのがあふぎ召すまいか（百日曾我）

〔御影堂〕京都五條通り寺町の西にありて新善光寺といふ、寺中に尼多く住み、扇を作つて業とした。鹽尻に平敦盛の遺家が尼となつて御影堂に住み扇折を始めた由を記してある。雍州府志・七・服器部に、「今良賤常用之扇、小川井所々有レ之、然不レ及二御影堂之製一也、其寺僧尼共造レ之」。御影堂で製する扇は京都の名産で、何何阿彌と稱する坊舍十五あつたが、明治以後衰廢して今は御影堂扇といふものなく、僅に二三坊を留めてゐるのみである。

みかたがはら 野菊桔梗はおも枯れて色をあらそふ花軍、味方が原の夕景色（今川了俊）

〔味方原〕遠江國濱名郡濱松の北方、引佐郡にわたる原野をいふ。

みかのはら（井筒）

〔瓶原〕山城國相樂郡瓶原村。「みかの原わきて流るる泉川」（四五五頁）を見よ。

みくさがはら 名所教へて敵妙が、御手引く道の力草、みくさ河原に着き給ふ（日本武尊）

〔三草河原〕播磨國加東郡上鴨田村三草山の南溪なる河原をいふ。

みくに 敦賀では遠山、三國での名は勝山（反魂香）

〔三國〕越前國坂井郡三國町。古來北國有名の港で、三國の遊女は其名高かつた。

みくにさかひの板橋 三國さかひの板橋にこそ着きにけれ（謡曲）

雍州府志に、「三國橋。在二洞峠麓西南一、是則山城河内攝津之境界也」。洞峠は八幡の南、山城河内兩國の境にある。

みさか 木曾のみさかの谷風（最明寺殿）

〔御坂〕信濃國下伊那郡と美濃國惠那郡との界嶺。

みしま 伊勢・石清水・賀茂・春日・鹿島・三島（加增曾我）三島の神主忠明は源氏について由緣ありと（伊豆日記）

〔三島〕伊豆國田方郡三島村にある三島明神をいふ。祭神は大山祇命であるともいふ。鎌倉以後武士の尊崇厚く、武士の起請文には引合ひに出された明神である。

みすぢ 澪標難波に咲くやこの花

の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手を（冥途飛脚）　極彩色の越後町、三筋に三つの春立てば（鶯門松）

〔三筋〕大阪新町遊廓をいふ。新町遊廓は其實四筋町〔佐渡屋町、瓢箪町、佐渡島町（越後町）〕吉原町〕であるが、その中吉原町を除いて三筋というのである。蓋し吉原町は下劣な青樓町であるから、繁華な新町遊廓に加へなんだのである。「四筋の町」及び本講附録の元祿頃大阪地圖につきて見よ。冥途飛脚のこの文は、三筋に三絃をきかせて、越後（その條を見よ）と淡路町との間の道を間の手といふて、三絃の縁語合の手（歌聲暫く中絶する時三絃のみを彈じる手）をいひかけたのである。

みすぢまち　里は都の未申なり、通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西の洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口（反魂香）

〔三筋町〕京都島原の傾城町をいふ、三條の街衢であつたから三筋町といつたのである。この町寛永以前には六條室町西井に西の洞院中道寺町にあつた。「しまばら」を見よ。

みすのさと　市之進は御香の宮、甚平は三洲の里、毎日そんじやうそこそこと（鰹節三）

〔三洲里〕山城國紀伊郡にありて伏見町の西南に當り、三洲天王宮のあたりをいふ。雍州府志三、神社門下（紀伊郡）の條に云「三洲天王宮。在伏見、祭牛頭天王一者也、一說天武天皇也」。

みせんのだけ　袂の色の嚴島、彌仙の嶽に照る月の（國性爺後日）

〔彌仙嶽〕安藝國佐伯郡嚴島に在りて北嶺なる彌山をいふ。

みぞろいけ　（三國志）（閑八州）

〔御泥池〕山城國愛宕郡上賀茂村の東に當り、京都より鞍馬に通ふ路畔にあつて、周廻十八町あるといふ。

みだう　朝鮮人の饗應御堂へも雇はれ（賣庚申）

〔御堂〕大阪東區北久太郎町四丁目大谷派本願寺別院をいふ。天和二年朝鮮使來聘の時この寺旅館に當てられ、その後享保四年朝鮮人來朝した時にも旅館に當てられた。

みたらしがは　賀茂のみたらし川瀬のなみ、およぎつく程氣もせかれ（女夫池）

〔御手洗川〕下賀茂明神の側を流れてゐる川。謠曲、加茂に、「御手洗や清き心に澄む水の賀茂の河原に出づるなり」。

みたらひ　阿伏兎（あぶと）、御手洗（女護島）

〔御手洗〕安藝國豐田郡大崎下島を昔は御手洗島といひ、島の東端に御手洗町がある。神功皇后が三韓征伐の途次御船を繫ぎ、御手を洗ひ給うた所といふ。

みつ　直下にみつの難波の里（淀鯉）

〔三津〕大阪をいふ。蔓分船（延寶三年刊）第一に「三つの浦といふこと、蔓津・汐津・難波津といふ人あり、又御津ともいへども、此說いづれか是なることを知らず、予思ふに御津とは、仁德の皇居の津なれば御の字を添へたるか、數津・高津・難波津といふ、是等に從ふべきか」。巢林子のここの文は、「直下に見つ」に三津をいひかけて、難波の里とつづけたのである。

みつけ　なじみ見つけのとまりと聞けば（丹波與作）

〔見付〕遠江國にありて濱松と袋井との間。東海道五十三次の一。

みつてら　三十番にみつ寺の大慈大悲を頼みにて（曾根崎）

〔三津寺〕大阪三津寺町にあつて、古義眞言宗で本尊は行基作の十一面觀世音。攝陽郡談・十二に「大坂巡禮三十番三津寺、西成郡大坂の市中三津寺町にあり」。

みつてらのしやうはちまん　仁德帝の宮所拜み巡りて十番に、數も願もみつ寺の正八幡に早つきぬ（卯月紅葉）

〔三津寺正八幡〕今大阪市南區佐野屋橋筋の角にあり、御津宮ともいふ、島の内の鄉社。攝陽群談・十一に、「大坂三津寺町にあり、所レ祭應神天皇也云々」。浪花寺社巡、二十二社廻りの條に云「十三番。島之内三津八幡」。

みづのみまき　みづの御牧の放れ駒、實に音に聞く津の國の（鎌田）

みづの御牧か鳥飼か、信濃に桐原望月か（源義經）

〔美豆御牧〕山城國久世郡綴喜郡の中にある。（もと木津川の兩岸に亘つてゐたが、今は東北岸を御牧村というて久世郡に入り、美豆は淀町に接して綴喜郡に入る。古は馬寮の御牧で放飼の地。

みどりばし　あとおい松のみどり橋（天網島）

〔綠橋〕大阪靱川に架せる橋。本書の大阪圖につきて見よ。巢林子作・心中双は次の朔日に、「梅田のみどり曾根崎の」とある「みどり」はこの綠橋をいうたのである。

みなくち　一口二口みな口どやう跳り越え（丹波與作）　買うてたもれみなくちの、葛小笠に露もりて（田世長清）

〔水口〕近江國甲賀郡にある舊驛路で、今水口村といふ。泥鰌はこの地の名物である。東海道名所記（貞享五年刊）に、水口の宿で泥鰌汁を食うたことが載せてある。葛小笠もこの地の名産である。但貞享頃は既に流行せぬやうになつたと見えて、好色旅日記（貞享四年刊）卷三に、水口の町のことをいうて、「一昔以前はやるつづらがき今は見ぐるし」と見えてある。

南の風呂（みなみのふろ）　新地に戀衣（天網島）

島の内（大阪南區道頓堀）の風呂屋をいふ。「風呂」を見よ。

みねのやくし　姫君は峯の藥師の申し子にて（十二段）　折しも今日は寅の日の峯の藥師の御緣日（孕常盤）

〔峯藥師〕三河國設樂郡にある鳳來寺をいふ、本尊は藥師瑠璃光如來。

みはら　淺間三原那須野の原あさづまのかりくらより（世繼曾我）

〔三原〕信濃國佐久郡にある。

みぶでら 乳兄弟の清瀧は庭に枯木の猿縛、壬生寺の入相も姿の花や散らすらん(弘徽殿)

〔壬生寺〕山城國葛野郡大内村壬生にありて眞言宗の寺院である。寶隆三昧院と號す、寛弘二年勅願寺となり、承暦元年地藏院の號を受け、正應年間圓覺上人寺院を再興して融通念佛會を修す、これを壬生大念佛といふ。上人この時教化の方便として一種の猿樂を始めた、これを壬生狂言といふ、爾來毎年四月に行ふ。花洛細見圖に「壬生にて念佛を申し踊る事、先に必ず猿の繩渡りをなす」。案内者(寛文年間刊)三月十四日の條に「壬生念佛。今日始りて二十四日までこれあり、桶取、猿の狂言など侍り、地藏堂の外陣西の方に舞臺をしつらひ、圓座わらうだの大きなる鰐口をつり、白き布にて頬冠したる男大なる撞木にてこれを打つ、また男二人頬冠して鳥鐘を鳴らす、拍子は簓摘拍子にて、はははあみだはあみだ佛と唱ふれば、壬生中の子ども舞臺にあつまりて聲を調取り念佛する、その間に狂言あり、きればこれは狂言とは云ふべからずや、言葉を出し物言ふにこそあらめ、物言はず唯仕形ばかりの事なり、舞といふべきやと或人申されし、桶取の舞、猿の舞、八尾の地藏の舞などいふべきにこそ」。

みみづか 駕籠よ駕籠よと呼ばれども、無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて(女腹切) 今日本に耳塚ありとは唐土までも隠れなし(國性爺後日)

〔耳塚〕京都東山方廣寺大佛殿の門前にある、征韓の役に敵の耳鼻を斬つて送つたのをここに埋めたといふ。雍州府志(貞享三年刊)陵墓門・愛宕郡の條に「耳塚。在同(東山方廣寺)大佛殿樞門之外、豊臣秀吉公朝鮮征伐時、軍士毎得一韓人首級、厭三海陸運漕之煩勞、斬二耳鼻一、贈二日本一、秀吉公悉令レ納二埋斯所一、建二塔於一堆墳上一、是號二耳塚一」。出來齋京土產(延寶五年刊)巻三に「大佛殿の門前に塚あり、上に五輪を居たり、これを耳塚と名づく、文祿元年豊臣太閤秀吉公高麗國を責打給ふ、小西攝津守・加藤肥後守を大將として數萬騎をつかはさる、遼東の李子を生捕り軍兵多く討取り、其首を日本に渡さんことは大造なれば、ただ其耳ばかりをそぎて討取る異國人の數を記し、桶に入れて日本に送り上す、卽ち此所に埋みて耳塚と名づくとなり」。

みむろやま いざ立寄りて御室山、麓の尾花打枯れて(大織冠)

〔三室山〕大和國平群郡龍田川の西岸、神南村の背後にある。

みめうのはし 渡らぬ先に渡られぬ御廟の橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や(萬年草)

〔細蘚橋〕大師廟の前なる玉川に架せる橋をいふ。橋板三十七枚ありて金剛界會の三十七尊の種子を書いてある。此橋を渡るは三十七尊の三昧に結緣するもので、罪障ある者は渡ることができないと言傳へた。

みもすそがは みもすそ川の濁る世に住むかひなき身なれども(井筒)

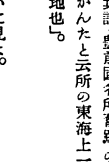
〔細螢瀧川〕伊勢大神宮の前を流れる五十鈴川、一名細螢瀧川俗に大川といふ。倭姫世紀に「命河瞭にして細螢蘇長く磯れ侍るを洗ひ給へり、從レ其以來號二細螢須曾河一也」。細螢蘇の意より天皇の御系統に喩へていふ。

みや 宮へあがればちりふへ四里の(丹波與作)

〔宮〕熱田宮の略、尾張の國にありて桑名と鳴海との間、東海道五十三次の一。

みやうじやうがちやや 明星が茶屋で飲み干すやうな大ぐさり(丹波與作)

〔明星茶屋〕伊勢國多氣郡明星村の茶屋で、伊勢參宮街道に當る。西鶴織留・巻之四に「明星が茶屋こそをかしけれ、いつとても振袖の女赤根染の裏付けたる木綿着物を黒茶にちらし形付かぬは一人もなし、扨日本に袋の女程自粉を付ける所又もなし」。伊勢講井參宮儀式(貞享四年刊)巻三に「明星が茶屋。參宮の人に清め〔店に出せる明星が茶屋の看板〕の茶をすすむる也、所のいひ傳へには、明星あまくだりここの水を清めあたへたるゆゑ、清めの水にて茶を煎じすすむといへり」とありて、插圖に、店に「明星が茶屋」の看板を出し、腰を掛けた旅人に女が茶をすすめてゐるのが載せてある。



みやぎの 宮城野の萩の露とそ消えにけり(源義經)

〔宮城野〕陸前國宮城郡にありて、仙臺の東の平原で古來萩の名所である。

みやこのふじ 我立つ杣や都の富士、西坂本にそ入り給ふ(女楠) 都の富士を動かさず、ここに引寄せ日がかりの(關九州)

〔都富士〕比叡山をいふ。雍州府志(貞享三年刊)に「比叡山。斯山王城之艮岳也、其山至高、及春有二殘雪一、自レ古稱二都富士一」。

みやじま 年とてもまあ二年下宮島へも身を仕切り(冥途飛脚)

〔宮島〕安藝國嚴島町の別稱。ここの文に「下官島へも身を仕切り」とあるは、上方から下の宮島へも身を仕切替して田舍娘となる意。(竹本筑後掾正本古刊本に「まあ二年下」と「宮島へも」との間に句切の點あるは、謠ふ上の音節であつて、文章上の句讀點ではない)。

みるがうら 手に取りて見るが浦(國性爺後日)

手に取りて見るに見の島の浦をいひかけたのであらう。國花萬葉記・豊前國名所舊跡の條に「見の島=當國かんたと云所の東海上一里許なり、無双の景地也」。

みわ

〔三輪〕解釋部について見よ。

みわがさき かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり(最明寺殿)

〔三輪崎〕大和國磯城郡三輪村大字三輪なる三輪山の尾崎をいふ。倭路記に「三輪の町を出ではなれて長谷の方へ行くに三輪山の尾崎あり、これを三輪が崎といふ由。又この邊に山より流れいづる小溝あり、土人これを佐野の

あたりといふ事にて渡にはあらずとぞ」。巣林子のこのあたりの文は謡曲・鉢の木に據つたのである。

むくはら 當國向原に伽藍を構へ、佛法流布を待つべしと、稻目の臣にぞ勅諚ある（用明天皇）

〔向原〕大和國高市郡にあり、欽明天皇十三年稻目宿禰が伽藍を建てた地で、これ我國寺院建設の最初である。日本書紀・卷十九、欽明天皇十三年の條に、「稻目宿禰試令二禮拜一、大臣踴受而忻悦、安二置小墾田家一、勤脩二出世業一爲レ因、捨二向原家一爲レ寺」。

むくもと 袖には涙梢には木の實こぼるる椋本や（丹波與作）

〔椋本〕伊勢國河藝郡高野尾村の西なる小驛にして、安濃津より鈴鹿關に通ずる路に當る。

むしあけ 月ぞ藻にすむ蟲明の、瀬戸の松風さんさらめけば（浦島）

〔蟲明〕備前國邑久郡にあり、往昔播磨備前間の一海驛であつた。巢林子のここの文は、月の縁によりて明をいひ、また古今集雜五、藤原直子、「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと、昔ことをなかめ世をば恨みじ」、の歌句をとりて以て地名にかけたのである。

むたのよど 六田の淀の春風に、枝垂柳が一揉み二揉み（源義經）

〔六田淀〕大和國吉野郡吉野村の北なる渡津をいふ、吉野川の急流に臨み、水邊に楊柳多い、ここの渡を柳の渡といふ。

むどうじ はや無動寺の夜半の鐘、擊吹きおろす小笹原（弘徽殿）

〔無動寺〕近江國滋賀郡比叡山の南界にして、西に降れば修學院白川村である。寺は相應和尚の開基の不動堂。

むめだつつみ むめだ堤の小夜烏（會根崎）

〔梅田堤〕大阪を流れる堀川を梅田川ともいひ、梅田川の堤を梅田堤といふ。「梅田堤の小夜烏」といへるは、梅田墓地附近の梅田堤で鳴く夜烏をいふ。

むめだばし 「うめだばし」を見よ。

むめつがは （娥）

〔梅津川〕山城國葛野郡にあつて、梅津村を流れる桂川を云ひ、舟渡しがある。

むやむやのせき 「どやどやどほりのむやむやの關」を見よ。

むらさきの （娥）

〔紫野〕山城國愛宕郡大德寺のある邊をいふ。

むろ なばかしやくしか室が泊か（松風）

〔室〕播磨國揖保郡室津をいふ。

むろど （以呂波）

〔室戸〕土佐國安藝郡津呂村室戸崎。

めいろ 違背申せば勅を背く朝敵と罷成る、お受け申して罷向へば、迷盧八萬の頂よりまされる親に弓を引く（鎌田）

〔迷盧〕蘇迷盧山卽ち須彌山のこと。梵語のSumeru、妙高山の義である。大海の中にあつて金輪の上に擁り、日月これによつて回り、諸天これによつて居る。高さ八萬四千由旬あるといふ。故に迷盧八萬といふ。西域記に「舊云須彌、又曰須彌婁、皆訛、正蘇迷盧、唐言妙高、新譯云蘇迷盧」。釋氏要覽に「長阿含竝起世因本經等云、四州地心、須彌山、梵音正云蘇迷盧、此名妙高、此山有八山八海、外有大鐵圍山、周圍圍繞竝一日月回轉、照四天下、名一閻浮土」。平家物語・燒打の條に「君の御爲に泰公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりもなほ高き父の恩徳ちに忘れんとす」。

めかはむら よくには見えぬ目川村の、馬子共よせて我等がどうを取たの（丹波與作）

〔目川村〕近江國草津と梅木との間。東海道名所圖會二に、「目川とは村の名なれど、今は名物の柒飯に田樂豆腐の名に醸ひて、何國にも目川の店多し」。

めかりのみやうじん （女護島）

〔和布明神〕早鞆明神又は單人神社とも云ひ、豐前國企救郡にある。祭神は比賣大神・彦火火出見命・鵜葺草葺不合命・玉比賣命・阿豆姫・息長帶比賣命（豐前志には「所レ祭之神五座、一曰玉依姫、二曰二彦火火出見尊一、三曰二豐玉姫一、四曰二鸕鷀草葺不合尊一、五曰二阿度目磯良一」とある。

めをとといけ 名は永き世の女夫池、池の玉藻を亡き魂の、形見に繁る蘆眞菰（女夫池） これも此方の島ゆゑぢやと、女夫池で聞いて來て、知らぬかと言はるる故（二枚綸）

〔女夫池〕夫婦池とも書く。播陽群談卷四、池の部に、「夫婦池。同郡（播磨國西成郡）天滿天神橋筋の北町辺にあり」。蘆分船卷六に、夫が妻に三年間に家に歸るを語つて行商に出たが、夫の遂に歸らぬを悲歎いてこの池に投身した、その後に夫歸つて妻の死を悲み、妻の跡を慕うて亦投身した由見えてゐる。今も大阪北區天滿末廣町あたりを女夫池と稱してその名を存してゐる。

めをとづか 末は淀のや男山、麓に立てる夫婦塚、其二道により風の悋氣爭ひ理をもて、霜に更けたる女郎花（松風）

〔夫婦塚〕男山の麓に男塚女塚とありて、これを夫婦塚といふ。謡曲・女郎花に、平城天皇の御時に小野篁風と云ふ者男山に住んで京の女と契つた、その女八幡へ尋ね行つて篁風のことを聞へば家の者答へて、この程妻を持たれてその許に行かれたといふ。女これを聞いて恨しう思うて放生川に身を投げた。篁風これを聞いて泣く泣く死骸を尋ねて取上げ、山本の土中に葬つた、その墳より女郎花一本生ひ出たので篁風あはれと思ひ、女の跡を慕うて川に身を投げた。かくて男塚と女塚と築かれた由作つてある。

もうる もうろ左衞門（國性爺）

モゴル（Mongrol 又は Monghul）を云ふ。漢字で真臥兒と書き、英傑とならない以前の印度帝國をいふ。和漢三才圖會に「按、真臥兒、南天竺之中最大國也、人物似二邏羅一而色稍黑、四季同二于邏羅一」。

もちづき 關より西にかくれなき名を望月の引馬や（堀川波鼓）

〔望月〕信濃國佐久郡にある馬の名所で、古昔朝廷に馬を納めた地。千曲之眞砂、前編卷二

に、「望月。いまは八幡の驛の上にて廓方山といへるあり、其上にすかたの原といへるあり、長三里あまりある曠き原なり、その下は望月の驛なり、この原のことを國言也、むかしは此邊五六里原野にて大牧なるよし、貢馬も諸國の牧は六十疋、ひとり望月二十疋也と延喜式に見ゆ、總じて此邊廣莫の原野にして牧場なり」。國花萬葉記卷十一、信濃國州郡名所之部に「望月の牧＝是も駒の名所云々」。堀川波鼓のこの文に就いては「ゆふづけどり開より西に云々」をも見よ。

もちひどの　此頃は眼病ゆゑ毎日餅飯殿の日醫師の方へ通ひ候（三世相）

〔餅飯殿〕奈良の興福寺附近の町名。林宗甫攝・和州舊跡幽考・第三卷、添上郡の條に「餅飯殿町。もちゐ殿町は舊名福貴畠鄉といふ、是はあめのみかどの御宇に國司和氣利貴卿五月一日に始て藪の供御をささげしより此名あり、其後逕の辨財天を勸請の時餅飯の供具を奉りしより餅飯殿の名あり」。

もとこうぜんまち　本興善町といふ所で（博多）

〔本興善町〕長崎にある町名。諏訪神社はこの町よりも北方にある。

もとめづか　昔の例求塚（今宮）

〔求塚〕昔、津の國に住んでゐた女が二人の男に纏綿せられ、詮方なくして水に投じて死んだので、二人の男も亦悲しみ、女のあとを追うて死んだ。詳しくは謡曲・求塚を見よ。大和物語にも出てゐる。名所圖會に「處女塚又求女塚とも書す、三箇所にあり、一は住吉川の西、御田村の東田畔の中にあり、塚のめぐり百五十間許、一は東明村にあり、塚のめぐり百間許、塚上に松樹二十株あり、一は味泥村の濱手大石村の間にあり、塚のめぐり二百間ばかり、これも塚上に松樹あり、東の塚を西面とし、これを茅渟男とす、土人鬼塚とも呼ぶ、西の塚を東面とし、これを菟原男とす、中の塚を南面として求女塚とよぶ、相隔つこと各十五町許」。

もどりばし　ヤ戻るついでに戻橋の鍔は戻つたか（女暫切）

〔戻橋〕京都一條通り堀川の上に架せる橋名。巢林子のこのあたりの文は石見が言葉に、その緣語の地名をいひつづけたる輕妙の筆である。

もりくち　やりての杉重に樽のめい酒を守口や（淀鯉）

〔守口〕京都と大阪との間に通ずる京街道の驛の名で、今の河内國北河内郡守口町である。

もりとのだいみやうじん　祐成……眼を塞ぎて心中に、南無伊豆箱根二所の御神、同じく湯本の大權現、生國もりとの大明神荏柄の天神（五人兄弟）

〔森戸大明神〕守殿大明神とも書く、相模國三浦郡杜戸崎にあり、祭神大山祇命。曾我祐成の生國は伊豆國なれば、巢林子のここの文に「生國もりとの大明神」といへること當らない、但相模風土記に森戸大明神のことを叙して、「緣起によれば治承四年九月八日源朝三島明神を勸請したるにて、これ源朝豆州配流の日源家再興の事を三島の神に祈り、遂に志を得たる故なりといふ云々」とあり、治承四年九月は源朝末だ伊豆の配所にあり、巢林子これ等の記事を見て、森戸大明神を伊豆にあるものと思誤つたのであらう。

もりやま　我等も今日もり山まで参ろ（酒呑童子）　**もり山の觀音堂で三十三夕が質おいて**（丹波與作）

〔守山〕近江國野洲郡にありて、美濃路へ行く宿。觀音堂がある。近江名所圖會、四に「守山觀音は驛中（守山）にあり、天台宗にして東門院守山寺と號す、本尊（千手觀音、十一面觀音）兩像を安置す、延鎭の作、桓武天皇の勅願にして田村將軍の建立なり」。

もろこしがはら　古鄉へ返せ唐錦、もろこしが原にぞ着きにけろ（扇八景）

〔唐原〕相模國淘綾郡の東部、花水川の東にあろ。（新編）相模國風土記に「唐原或は諸起原とも記す、正保國圖に稍平塚に接せし海岸の地を唐ケ原と題す」。

もろはのみやどころ（鰤九）

〔諸羽宮所〕山城國宇治郡なる諸羽神社をいふ。黒川道祐著・雍州府志・三、神社門・宇治郡の條下に云「諸羽大明神、在二四宮村一、山階十八鄉內之第四宮也、俗謂二鰤九延喜第四宮一也、此社依レ鄉二四宮一、是謂二鰤九宮一者是謬傳也、古諸羽作二兩羽一、然則大兒屋根命幷太玉命而爲二左右扶翼之神一者也」。

やうしう　十萬貫を腰に付け千載の鶴に乘り、楊州の都に樂める其樂を樂しむも（鰤八州）

〔揚州〕古來繁華を以て聞えた支那の地。「十萬貫を腰に付け云々」の條を見よ。

やくしだう　湯入りの物を掠めじと藥師堂の誓詞あり（百合若）

〔藥師堂〕攝津國有馬郡有馬溫泉地にある。有馬小鑑抄に「藥師堂＝常喜山溫泉寺と號す、釋行基……等身の藥師を石龕に刻み、又如法經を書寫し、共に溫湯の底に埋めり、猶一宇を建てて藥師の像を安置す、今の溫泉寺是也、云々」。

やしほのをか　今を初瀨の山越や、八しほの岡にこがれ行く（持統天皇）

〔八入岡〕山城國愛宕郡中村鄉中村八幡宮の北の山尾をいひ、楓樹が多い。

やすゐのてんじん　繫搥撫づる差櫛の、蒔繪に似たる松原は安井の天神これぞとよ（卯月紅葉）

〔安井天神〕攝津名所圖會・二に「安井天神。相坂の上にあり、祭神少彦名命（中略）、今天滿宮と稱して謬に菅公筑紫左遷の御時、ここにしばしやすらひ給ふゆゑ此名ありとぞ」。ここの文については「さしぐしの蒔繪云々」を見よ。

やせ（三國志）

〔八瀨〕山城國愛宕郡八瀨村。比叡山の西麓に當り、八瀨川その間を流る。八瀨女とて女子に一種の風がある。

やたてのすぎ

語彙部（三五六頁）について見よ。

やつしちがう（加增曾我）（源義經）（金精山）

〔谷七鄉〕鎌倉は東は山、西は海、月影が谷、佐介が谷、佐介が谷、扇が谷、藥師堂が谷、大藏が谷、大御堂が谷、葛西が谷、北企が谷、松葉が谷、名越が谷、辨が谷あつて、小林、小坂、葉山、津村、矢部、長尾、村岡の七鄉がある。

やつはし 謎かけ渡す八橋や杜若の一輪にて（井筒）

〔八橋〕三河國にありて昔杜若の名所。伊勢物語に「三河の國八橋といふ所に至りぬ、そこをやつ橋といふことは、水のくもでに流れ分れて木やつ渡せるによりてなんやつはしとはいへる」。丙辰紀行に、「三河國八橋は杜若の名所なり事在中將の歌にてかくれなし、今岡崎より地鯉鮒にいたる道より北の方一里計に、それなん昔の八橋なりとて所の人遠に指をさして教へ侍る、久しく田となりて今は杜若なし」。

やながせ 柳が瀬憂き瀬（蒸鮑）

〔柳瀬〕近江國伊香郡片岡の大字で、近江・越前の通路に當り、現今鐵道停車驛がある。

やなぎが浦 （國性爺後日）

〔柳浦〕肥前國北松浦郡柳村の海邊。

やなぎがをか （加增曾我）

〔柳岡〕信濃國下水内郡飯山の北なる柳原か。

やなぎはら 柳原の法印様（反魂香）

〔柳原〕京都室町上御靈前の筋下る所の左右近邊をいふ。（四六四頁）を見よ。

やはぎ （女楠）**やはぎの宿**（孕常盤）

〔矢矧〕矢作とも書き、三河國碧海郡の町で、東海道の國道に當り、矢作川の西岸。

やはま 行く先は土佐の海、八濱はま中、八坂坂中さつさつさつ（嚴嶋天皇）

〔八濱〕和漢三才圖會、四國遍路第二十三番藥王寺の條に、「自レ是行二土佐東寺一二十一里、内十里當國領分也、有二八坂坂中八濱等名一云々」。

やまざきでら 夜見世の太鼓音絶えて山崎寺の鐘の聲（淀鯉）

〔山崎寺〕山城國紀伊郡山崎の北なる寶寺をいふ。山城志に「寶積寺、明月記及桃花蕊葉等作二寶寺又山崎寺一云々」。

やましな （三國志）

〔山科〕山城國宇治郡北方過半の稱で、今の山科村・醍醐村に當る。

やましなでら （女護島）

〔山階寺〕藤原鎌足が山城國山階に寺院を建立し、山階寺といふ。淀殿公の時に山階寺を奈良に移して、堂宇を新にし興福寺といふ。而も舊名を存して興福寺を山階寺ともいふ。

やまだ 駕籠賃は山田までぜにまたちや（百合若）

〔山田〕攝津國武庫郡山田村の小邑山田をいひ、神戸の北約二里にある。近松のこの文に「ぜにまた」とあるは、行基（その條を見よ）より山田までの駕籠賃をいうたものである。行基から山田まで道程五里許ある。「ぜにまた」（二〇三頁）を見よ。

やまぶきのせ 跡は霞の八重一重、山吹の瀬を我なかの天の川瀬と（雪女）

山吹の瀬に影見えて（淀鯉）

〔山吹瀬〕山城國宇治川の所にある名所。俗に融大臣の別莊がこの地にあつた時、川岸に多く山吹を植えたからの名であるといふ。萬葉集・巻九、雜の歌に、「秋風に山吹の瀬のとよむなべ云々」。新拾遺集の歌に、「ちりはつる山吹の瀬に行く者の、花に掉さす宇治の川長」。東海道名所記巻六に「橋の西のつめに橋姫の祠あり、小島が崎、山吹の瀬みなここにあり」。

やまもとのさと 是より十八町あなたに山本の里と申してよき泊の候へば（最明寺殿）

〔山本里〕舊名であつて、戰國頃には根小屋（ねこや）といひ、上野國群馬郡今の八幡村あたりの稱。名跡志に「箕輪軍記に根小屋山本郷といふ、古は山名村のあたりより此處かけて山本郷といひしと傳ふ、鉢の木の謠曲に山本の里とあるもここか、川（鳥川）を隔てて東は佐野村なり」。巢林子のこのあたりの文は謠曲・鉢の木に據つたのである。

やまきのをか 縮髪のお六、ゆききの岡に嫁入して（持統天皇）

〔逝回岡〕大和國高市郡高市村の丘陵、市往岡の稱で岡寺のあたり。

ゆきのした （最明寺殿）

〔雪下〕相模國鎌倉郡にあつて、昔は鶴岡の北麓あたりを云うた。源頼朝の館などは雪の下にあつた。「ひかるげんじ」をも見よ。

ゆせんだいみやうじん 那須の湯泉大明神（加增曾我）

〔湯泉大明神〕下野國那須郡那須村湯本にある鄉社で、祭神は大己貴命、少彦名命、誉田別命。

湯殿山（ゆどのさん） 湯殿山のつま隠れ（酒呑童子）（枕言葉）

羽前國月山の西南山腹の一部の稱。湯殿山神社あつて今・國幣小社。「つまがくれ」とあるは酒の名。海老屋節、酒盡し心中に「色酒過ぎて幼馴染のつまがくれ酒、隱れあらざる男」。

ゆのをたうげ 湯尾峠の孫杓子、盛りこぼしたる花重（反魂香）

〔湯尾峠〕越前國南條郡今庄驛の北一里、その間の小嶺をいふ。山蘭に孫杓子といふ茶屋ありて疱瘡神の守札を出す。井原西鶴選・男色大鑑・巻之二、雪中の時鳥の條に、「越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に大きなる杓子をしるして、孫じやくしとて疱瘡輕き守札を出す」。奥細道菅菰抄に、「湯尾峠は僅なる山にて嶺に孫嬭子の茶屋あり、疱瘡の神の守札を出す、往昔此茶店の主疱瘡神と約して、其子孫嬭嬭はもがさの患なしといひ傳ふる故なり」。傾城反魂香のここの文は、杓子の緣より「盛りこぼし」といひつづけたのである。

ゆふぐれのせき （薩摩歌）

〔夕暮關〕大隅にある名所。國花萬葉記・大隅名所之部に、「夕くれの關」とある。

ゆめどの 築地ごしに高く見ゆるは夢殿さうな（聖德太子） 上宮太子は夢殿より唐船に法の道（國性爺後日）

〔夢殿〕大和國生駒郡法隆寺にありて、東院又は上宮王院とも稱し、高三丈九尺、徑五丈六尺の八角圓堂で聖德太子が三昧定を修された禪室である、今は特別保護建造物となつて居る。「上宮太子は夢殿より云々」を見よ。

ゆもと 萬能の薬の湯本と聞くからに、四百四病は消えもせん（反魂香）

〔湯本〕紀州熊野本宮の溫泉をいひ、湯の峯にあつて、小栗判官の車坂の舊蹟がある。和漢三才圖會・巻七十六、紀伊の條に、「本宮溫泉。在二湯峯一一遍上人於レ是會二熊人一、倡行入二溫泉一、卽病平癒、其所レ休地名二兒塚一、俗以爲二小栗判官一者誤也」。

ゆもと （扇八景）

〔湯本〕相模國足柄郡にありて今湯本村といふ。

ゆゐ ゆゐかんばらよしはらの（丹波與作）

〔由井〕駿河國にありて興津と蒲原との間、東海道五十三次の一。

よかは 比良や横川の春（兼好）

〔横川〕近江國滋賀郡比叡山中にある横川谷の嶺上なる堂塔を橫川と號す。ここに橫川といへるは橫川谷の邊をいうたのである。巢林子がここの文は謠曲・鞍馬天狗に「比良や横川の遲櫛」とあるにようたのである。

よしだ よしだふた川しらすかちよいと越えて（丹波與作）

〔吉田〕三河の國にありて矧油と二川との間、東海道五十三次の一。

よした （兼好）

〔吉田〕洛東神樂岡の西にありて今吉田町といふ、社あり吉田社といふ。黒川道祐編・雍州府志・卷二、神社門上・愛宕郡の條に、「吉田春日社。在二神樂岡一、此社與二南都春日社一爲二同體一、貞觀中中納言藤原山蔭卿建レ焉、一條院永延元年始奉二官幣一、奈良京則春日社、長岡京則大原野、平安城則吉田社、皆近二帝闕一而守二皇祚一、御堂關白道長公造二法成寺一、崇二吉田社一以擬二興福寺之有一春日社一」。

よしのやま 竹の内峠を越えて吉野山（吉野思宿）

〔吉野山〕大峯山脈の北端、吉野川三吉野橋邊より青根ケ峯に到る南北二里に亘る細長い峯筋の總稱。

あれにふすぼる梅田の墓、よその無常の煙を見るも（二枚繪）

〔霞原〕大阪天滿池田町の北のはてなる火葬場墓地。攝陽群談・卷九、攝之部に、「吉原墓所。西成郡（攝津國）天滿池田町の北にあり」。

よしはら ゆゐかんばらや吉原の、花のかばやき名物の、うなぎの肌へ膚ぬまづの宿（丹波與作）

〔吉原〕駿河國富士郡にありて蒲原と原との間、東海道五十三次の一。東海道圖會に、「吉原驛は昔此より東南の方にあり、延寶八年津浪して家屋漂流し、天和二年この地に移す、始の地をば元吉原と名づく」。

よしみね （娥）

〔良峯〕山城國乙訓郡大原野の西南にあつて、小塩山の内。

よしゐ よしやよしゐの渡し舟、これもこがるるたぐひかや（佐々木）

〔吉井〕備前國上道郡御休村大字吉井をいふ。渡し舟とは、この所の東大川の渡し舟をいふ。

よすぢのまち 夜見世を新におぬしと、としや遲しと見に來るは、四筋の町の軒ふかく、ともしび星の如くにて（舊門松）

〔四筋町〕大阪新町遊廓をいふ。大阪新町遊廓は四筋の町より成る、東西に通ずる眞中の通り筋を瓢箪町といひ、その北にある筋を佐渡屋町といひ、瓢箪町の南にある筋を佐渡島町といひ、そのまた南にある筋を吉原町といふ。本書附錄の大阪地圖を見よ。

よつかいち 都を出でて日數さへ、四日市にも程近き追分にこそ着きにける（博多）

〔四日市〕伊勢國三重郡にある町。

よつづか （女夫池）（天神記）

〔四塚〕山城國葛野郡にある辻で、西は藪渡（桂川）に向つて斜に馳せ、南は上鳥羽村鴨川まで直路で造道といふ。俱に攝州に趨る西國街道である。

よつばし 杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや（今宮）

〔四橋〕攝津名所圖會・四下に、「四つ橋。西橫堀に上繰橋・下繰橋、長堀に吉野屋橋・淡屋橋あり、これを合て四つ橋といふ。二流十文字になりて橋を四方に架すなり」。大阪圖を見よ。

よど 淀柱本の邊まで參りしに（關八州）

〔淀〕山城國久世郡の町で、現今は桂川と淀川と相會する所にあるが、昔はその位置多少異ろ。

よぶこのうら さぞな呼子の浦過ぎて、誰に泊の磯なれば（國性爺後日）

〔呼子浦〕肥前國東松浦郡にありて玄界灘の西南海岸に當る村。

ららえいがたに （女夫池）

〔朗詠谷〕山城國愛宕郡にある。雍州府志・卷一、山川門、愛宕郡の條に、「朗詠谷＝在二長谷一、四條大納言公任卿閑二居斯谷一、彈二倭漢朗詠集一云」。

らうのまち これぞ此小川通ひ三途の川、牢の町さへ近付けば（大經師）

〔牢町〕京都下古城町をいふ。本書に載せた京都地圖につきて見よ。京都坊目志に、「下古城町。小川通押小路下るより御池上るまでを云ふ。……廢第後鄙舍此地にあり、牢の町と呼ぶ。寶永五年三月八日の大火に斯鄙舍類燒し、尋で六角通大宮の一町西に移轉す」。

らくやう 此處ぞ世界の洛陽と殘らず語り給ひけり（大原問答）

〔洛陽〕洛陽は支那に於て周公の都を營んだ所である、その故事よりして我國の京都のことにいひ、大都會の意にいふ。

らじやうもん さりながら東寺羅生門の變化を討ち（酒呑童子）

〔羅生門〕京都南朱雀通り（今の千本通り）にありて内裏外郭の總門。謠曲・羅生門に、「東寺の前を打過ぎて九條殺に打つて出で、羅生門を見渡せば」。

りうぜんじ 諸宗の僧徒我先にとりうぜん寺にぞ詣めらるる（大原問答）

法然上人が延暦寺の僧侶と一向專念の問題を試みた、所謂大原問答のあつた寺は、山城國愛宕郡大原なる魚山勝林院である。

りさん 驪山の麓楊貴妃の御廟所（國性爺）　驪山の花も一度は散り（弘徽殿）

〔驪山〕支那陝西省の京兆府臨潼縣の東南にある。玄宗皇帝天寶六年十月に溫泉宮を造營して華清宮と稱し、十八の宮殿を建てて寵姬楊貴妃と共に歡樂に耽つたのである。

りつとうじ さて善道寺りつとうじ（曾根崎）

〔栗東寺〕攝陽群談・十二に、「大坂天滿栗寺町にあり、境内に大坂巡禮九番觀音堂あり」。

りやうがへちやう あたまつきは兩替町、内證は曾我殿（女腹切）

〔兩替町〕京都にある町名で、北は丸太町から南は三條に至る。ここの文は、頭髪の結ひ振りは兩替屋風で、金がありさうに見えるといふ意にその名にちなんだ町名を用ひたまで。

りやうじゆせん（釋迦）

〔靈鷲山〕中印度摩訶陀國なる耆闍崛山をいふ。その山形鷲に似てゐるとてこの名がある。

りやうぜんがさき（最明寺殿）

〔靈山崎〕相模國鎌倉郡稻村崎の東北に當れる岬角であつて、由比ケ濱の西つづき。

りやうぜんじやうど 聖徳太子の御本地はりやうぜん淨土、三界の教主世尊の御事なり（卯月紅葉）

〔靈山淨土〕靈山は靈鷲山の略。中印度摩訶陀國にある耆闍崛山をいふ。世尊は現世から姿を隱し給へども、その實は靈鷲山にありて永遠に說教されてゐるのである。卽ち靈鷲山は寂光淨土である。法華經「壽量品の偈に、「爲レ度二衆生一故、方便現二涅槃一、而實不二滅度一、常住二此（靈鷲山）一說レ法」。

りやうがへし 龍返の川浪に流れ殘りし若大衆（吉野忠信）

〔龍返〕大和國吉野山谷中にある。花顚居士撰、吉野しをりに、「蔕遠の先より西の方に見ゆる高き山を舟岡といふ、……西の谷を中院が谷といふ、佐藤忠信横川覺範を打し所なり、山伏かくし・龍返しなど云岩ありと云ふ」。

りゆうげごえ 敵はや勢多を越ゆると聞き、龍華越より先へ廻つて只今參陣（三國志）

〔龍華越〕山城國愛宕郡大原村大字小出石から近江國滋賀郡伊香立村龍華に通ずる山路。

りようもん

典據部（五五九頁）について見よ。

るすん 呂宋兵衞（國性爺）

〔呂宋〕ルソン（Luzon）を云ふ。比律賓群島中の最大島で、首府をマニラといふ。今は米領となつてゐる。

ろうのまち

「らうのまち」を見よ。

ろくけんちやう 月は早渡ぞめして中橋や、六軒町のさよ格子（重井筒）

〔六軒町〕南水漫遊に、「島之内六軒町といふは遊屋町（今の玉屋町）なり。重井筒の戯文中の巻に、月は早渡りぞめして中橋や、六軒町の小夜格子とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ。寶曆の頃までは兩三軒殘りありしが今はなし。此邊を六軒町といふは元文寬保の頃まで女郎屋六軒あり云々」。

ろくじだう はや天王寺に六時堂（曾根崎）

〔六時堂〕大阪四天王寺の境内にあつて鐘樓に向つて立ち、六時勤行せるより六時堂と名付く。六時禮讃とは、晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の六時に彌陀を禮讃すること。

ろくしやのみや 神力を添へ給へと六社の宮に我願ひ（扇八景）

〔六社宮〕相模國中郡國府村新宿にある六所神社をいふ。

ろくはら（女護島）

〔六波羅〕京都加茂川の東、東山の麓、松原五條通のあたり。平清盛の邸宅のあつた處で、平家物語（長門本）に「元は方一町なりしを、この相國の時造作あり、家數百七十餘宇に及べり云々」。

ろすゐ 見め唐も思ひ出のそれはろすゐの磯枕（天鼓）

〔瀘水〕謠曲・天鼓に、天鼓といふ者が靈妙なる鼓を持つてゐたのを帝に所望されて深く惜み、鼓を抱き山中に隱れたのを探し出されて、違勅の罪により瀘水に沈められたことが書いてある。謠曲拾葉抄に、「瀘水＝大明一統志三十六曰、慶陽府瀘水在二環州境一云々」。

わうじやうゐん（娥）

〔往生院〕京都小倉山の東麓の尼寺であつて、本尊は彌陀如來。妓王妓女寺と云ふ。

わがたつそま

解釋部（三八〇頁）について見よ。

わかばやし 年は經れども常緑木の若林とはれならん（今川了俊）

〔若林〕遠江國濱名郡にありて、西は篠原高塚に連り、海岸の地なれば濱松浦といふ。

わしのみね 屋根のむれ鷲の峯ぞと一筋に（重井筒）

〔鷲峯〕「わしのやま」を見よ。

わしのやま 烟は同じ鷲の山（歌念佛）

西は又鷲の御山、峨峨と聳えて連れり（釋迦）

〔鷲山〕靈鷲山ともいふ、山形鷲に似てゐるよりの名。釋尊多く此山で說教されたといふ。法華經料註に、「耆闍崛此云二靈鷲一……又解山峯似レ鷲、……又解前佛今佛皆居二此山一若佛滅後、羅漢住、法滅支佛住、無支佛、鬼神住、既是聖靈所居、總有三事、因呼爲二靈鷲山一」。

わにのみさき 和邇のみさきの堅田の浦よりお船に召されて（蓑僧）

〔和邇〕近江國滋賀郡にあつて、堅田の北方和邇川の河口の琵琶湖に突出してゐる岬。

ゐで ゐでの在所に難産がおぢやりまして（加増曾我）

〔渭堤〕相模國高座郡渭堤郷。

ゐで ゐでの里（以呂波） 小判の上にはらはらと、涙はゐでの山吹に、躑躅おき添ふが如くなり（冥途飛脚）

〔井手〕山城國綴喜郡井手村玉水町あたりをいひ、昔は山吹の名所である。古今集・卷下部、題しらず・よみ人しらずの歌に、「かはづ鳴く井手の山吹散りにけり、花の盛りにあはましものを」。

ゐなのささはら ゐなの篠原そよさらに有馬の湯口來て見れば（百合若）

〔猪名野笹原〕攝津國河邊郡猪名野の笹原、小倉百人一首・大貳三位の歌に、「ありま山ゐなのささ原風吹けば、いでそよ人を忘れやはする」。

ゐのうへ（加増曾我）

〔井上〕信濃國上高井郡須坂町西南にあつて、千曲川の東。

ゐのくま 烏が鳴けば最往（もい）のゐのくまや、何時かはやあめぐり逢ふ（大原問答）

〔猪隈〕猪隈通り（京都下京區六條北）をいふ、治承年間隅白實公の第のあつた地である。

ゐのはなざか（弘徽殿）
〔猪鼻坂〕山城國綴喜郡男山の半腹にある。

ゐのりう　流るる涙流るる血、紅白粉やもろこしの渭流を袖に湛へたり（聖徳太子）
〔渭流〕渭水の流れ。渭水は源を支那甘肅省隴州府渭源縣西北鳥鼠山に發し、陝西省同州府華陰縣の北に至つて黄河に入る。「紅白粉（べにおしろい）やもろこしの云々」（五二五頁）を見よ。

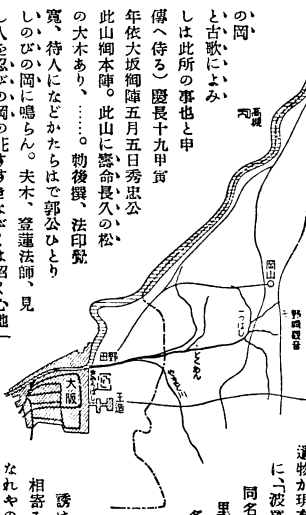
ゐちご　佐渡と越後のあひの手を通ふ千鳥の淡路町（冥途飛脚）
〔越後〕大阪新町遊廓内の佐渡屋町（九軒町の西隣り）にある揚屋で、主人は女で其の名を濟（きよ）といふ。冥途飛脚・中の巻に「橋がかけたや佐渡屋町、越後は女主人とて立客も妓も氣がねせず」とある。淡路町の亀屋忠兵衛が梅川と會合する揚足繁く通つた揚屋である。「通ふ千鳥の淡路町」（四三一頁）、「みすぢ」（六二八頁）及び所載の大阪圖を見よ。

ゐびす　此處に恵比壽の松原、松の黒みか雨雲か（今官）歩みよろよろ足たたぬ恵比壽の森にぞ着きにけろ（今官）
〔恵比壽〕大阪の今宮社を云ひ、往時は參詣道松原の中に通じ、社は森の中にあつた。蔦分船・第一に「今宮夷＝此社は天照太神宮・蛭子・素盞嗚の三神也、……蛭子を所の守護神とあふぎ奉る也、抑此御神は伊弉諾尊御子也・既に三歳にならせ給ふまで脚猶たたず、……縁日はとしごと孟春十日也、俗に傳へて十日夷と云。

をかざきむら　京近き岡崎村の分限者（大經師）
〔岡崎村〕洛東岡崎町あたりを昔は岡崎村といふ。山城名所紀行（正徳四年刊）巻三、岡崎の條に「日永天明頃、佳期風興催、尋萩春欲暮、菽麻棉楚將開、林鳧高櫪秀、霞酒幽鳥來、皈駕酣三餐々、盤礴坐三毒苦」と見えてゐる。以て近松當時の有樣が想見される。

をかべ　何心を岡部の宿に只一夜は轉寢（偶田川）
〔岡部〕駿河國にありて藤枝と鞠子との間、東海道五十三次の一。

をかやま　爰は名に負ふ壽命の松、御代長久の岡山を歌には忍の岡と詠み（女殺）
〔岡山〕野崎村の北に當り、北河内郡甲可村にある。河内名所記巻五に「岡山（忍びの岡・高嶺・古歌によみしは此所の事也と申傳へ侍る）慶長十九甲寅年依大坂御陣五月五日秀忠公此山御本陣。此山に鶯命長久の松の大木あり、……。勅後撰、法印覚寛、待人になどかたらはで郭公ひとりしのびの岡に鳴らん。夫木、登蓮法師、見し人を忍びの岡の花すすきなびくは招く心地こそすれ。「じゆみやうのまつ」「忍の岡」をも見よ。



をぐるす（本朝三國志）
〔小栗栖〕山城國宇治郡醍醐村の地名。

をざさのさか　行者様を拝む中、両方共にくわつと開き、小篠の坂を杖もつかずつつと下る（女殺）
〔小篠坂〕大和國吉野郡金峯山嶽王權現（役行者開基）より天川に通ずる路に當り、一里許の所にある。

をじかのその　笛に誘はれつま戀ふる、牡鹿の苑の法の導きこれなれや（用明天皇）（二枚繪）
〔牡鹿苑〕鹿野苑（ムリガダーブ・Mrgadava）をいふ。鹿苑・鹿林などともいひ、中印度・波羅奈斯（今のベナレス）城の北東四英里にあつて、現今サールナートフ（Sarnath）と稱する地である。釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れてから、最初に說法された聖地であつて、阿育王所建の古塔や佛像その他の遺物が現存してゐる。法華科註・序に「波羅痆國都城東北、有ニ河一、同名ニ波羅痆河一、河東北十餘里至ニ鹿野伽藍一、其側大林名ニ施鹿林一、亦名ニ鹿苑一、以ニ古仙所ニ居亦名ニ仙苑一」。巣林子のこの文は、笛に誘はれて寄る鹿のやうに、草刈笛に誘はれて繋ふ夫と妻と相寄る、佛法の慈悲の導これなれやの意。

をしほやま（娥）
〔小鹽山〕山城國乙訓郡大原野にある。

をぜき（鰺九）
〔小關〕近江國志賀郡にある。

をたえのはし　登れば下る最上川、緒だえの橋の絶えて何時（津戸三郎）
〔緒絶橋〕陸前國志田郡古川町にある小板橋。左京大夫道雅の歌に「みちのくのおだえの橋やこれならむ、ふみみふまずみ心まどはす」と見えてゐる。往昔の緒絶の橋は磐城國湯本温泉の附近であつたといふ。

をたぎのてら（娥）
〔愛宕寺〕京都東山五條の末愛宕の里にあつた阿彌陀堂で今は無き舊蹟である。

をなりばし
「おなりばし」を見よ。

をの　武藏に穂坂小野の牧（源義經）
〔小野〕武蔵國にあつて、馬の産地。拾芥抄中巻、年中行事部に「八月二十日奉ニ武藏小野牧一馬」と見えてゐる。

をの　比叡の山の麓小野の閑居（井筒）
〔小野〕山城國葛野郡小野鄕。

をののしゆくのこまちづか　大津八町で八百負ける小野の宿の小町塚で九十九文してやらるる（丹波與作）
〔小野宿の小町塚〕寒川辰清編、近江國輿地志略・巻七十七、坂田郡の條に「小野村。百百村の南にある村なり、古昔は驛舍にして繁昌の地なり　○小野地藏像。同村（小野村）にあり、近世印行の道中記などに小野小町の像と記す、あとかたもなき虚談なり、近村の土人先祖の廟をつくり建たるにて、今に持主顯然

たり」。近江名所圖會・四に「小野村道の右の上に石佛地藏堂あり、小町塚といふ、小野村といふより名付しならん、其證いまだ考ず」。

をばせ　見付けられては情なし、をばせの方で死ぬまいかと（重井筒）

書は生玉天王寺、天滿をばせ川口を終日歩む時もあり（卯月紅葉）

〔小橋〕高津の東で、四天王寺の北にある村名。

をぶち　甲斐にたち野小笠原、をぶちあだちの奥の牧（源義經）

〔尾駮〕陸奥國北郡にありて、往昔牧場のあつた地。